
クマ人形と、炎の化身

小笠 元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クマ人形と、炎の化身

【Nコード】

N 6 4 2 1 H

【作者名】

小笠 元

【あらすじ】

僕は夢を見ていた。知らない国で、知らない人たちが、ロボットに乗って戦う夢。そう、これは夢。夢のパートナーは、宙に浮かぶサッカーボール。

序章 僕の夢は誰と共に ー精霊の会議室ー

序章 僕の夢は誰と共に ー精霊の会議室ー

今、僕が見ているのが「現実的な夢」かと聞かれたら、僕は全力で否定するだろう。

ひとえに「夢」といつても、その種類は千差万別。

ちなみに、これから話す「夢」とは、「将来の」ではなく「眠ってから」見る「夢」のこと。

「現実的な夢」とはなんだろう。

クジが当たったりして大富豪になる。美人のお姉さんが突然言い寄ってくる。運よく温泉を掘り当てる。そういうのが現実的かと問われたら、それは微妙かもしれない。

仮に「宙に浮いたサッカーボールがヒトの言葉を発する」としたらそれは現実的だろうか。

少なくとも僕ならば、それを現実とは捉えたりはしない。

「そんな風に思わないでほしいナ。一時的とはいエ、同じ時間を過ごすことになるのだ。友好的にやっていこうじゃないカ」

使い込まれて皮の素材がところどころ剥げているサッカーボールが何の理由もなく宙を漂っている。ボールの表面には筆記体で「G ROUND」という文字が浮かんでいた。

「いい加減に何か言ったらどうなんだ？」

——この状況をどう考えるべきか。

いや、あれこれ考えるだけ労力の無駄だ。これは夢なのだから。

「なんでサッカーボールが喋るの？ 宇宙人とか怪獣の仲間だったりするわけ？」

向こうの出方を見るつもりで質問をぶつける。サッカーボールだけに、蹴り飛ばしたいところだが、実は怪獣でした、では洒落にもならない。

「オレは宇宙人でなければ怪獣でもない。強いて言うならコンダクター。お前さんヲ、導くためにここへ来タ」

「そう。わざわざすまないね」何が「すまない」なのかさっぱり分からない。が、とりあえずそう言ってみる。「ちなみに、ここがどこなのかを教えてもらいたいんだけど」

僕はあらためて周りを見渡す。そこは板張りの洋室。さして広くもない室内にはイスが一つあるだけで、窓もなければドアもない。僕とサッカーボールの二人だけだ。

「ここがどこか力。そうだな、精霊の会議室とでも言っておこう」
「セイレイのカイギシツ？」

さっぱり意味が分からない。そもそもコンダクターって何だ？考えるのもバカバカしいと判断する。僕の思考はそこで停止した。少し準備をするから、それを読みながら待っていてくれ」

いつの間にか僕は、一冊の本を手に入っていた。一体どこから出てきたのだろう。

「これを読むとどうなるのさ？」

「情報の整理をする手助けになるはずだ。それで八、準備に取りかかる」

「準備って、なんの準備をするのさ？」

「上映の準備だ」

上映されるものといえば映画だろうか。とすれば、この本は映画のパンフレット？

「映画でも上映するのかい？」

「そんなところだ」

夢の中で映画を見るのも悪くはない、か。

僕は手にした本に目線を落とす。殺風景な表紙だが、やたらと分厚い。

「読むことにしたのか？」

「これから読むところだよ。その前に、君の名前を覚えてくれないか？」

「ヴォル・ポーニ、ダ」

ポーニ？ あの小型の馬のことか？ どう考えても違う。どう見ても馬ではない。

ポーニでなくポーニ。馬ではなくサッカーボールだ。

「変わった名前だね」

「そう思ったことはないがナ。それニ、お前さんとそんなに違わないだろう」

——どうやら、僕のことは知っているらしい。

ユーラシア大陸の西方、ヨーロッパ、欧州などと呼ばれる場所にその国は存在する。

リムリア連邦。

建国一二〇年を迎えたその国には、数多くの人々が、数多くの文化と、数多くの争いと、数え切れないほどの想いを胸に暮らしている。

人々の営みが交わりあう大都市、人間の生命を養う穀倉地帯、人類の革新の証である工業地帯。その全てがリムリア連邦の血となり肉となり、国は今日も生きている。

その名が示すとおり、の連邦国家であるリムリアは、いくつもの国と地域が寄り集まった統一国家だ。バラバラだった国が一つになるといくつもの軋轢が生じる。政治、経済、文化の全てを統合することは不可能に近い。事実、リムリア連邦には数多くの自治州があり、州の長がいて、法律があつて、文化がある。州とは即ち、名前を変えた一つの国を示す。各州を取りまとめ、国家としての舵取りを司

るのが「連邦政府」だった。

リムリア連邦は侵略国家でもある。今日もまた、東へと領土の拡大を図っていた。

領土を増やす際には、当然ながら軍事的な抵抗を受けることがある。吸収、併合した元国家内でクーデターやテロ行為が発生することもある。歴史を数十年遡れば、遠く海の向こうの国家との戦争の記録にだって行き当たる。

有事の際に敵を倒す矛として、国を守る盾として戦うのがリムリア連邦の正規軍である「国防軍」だった。

今日もまた、国防軍の一部隊が自治州で発生した内乱の鎮圧へと向かう。

それは国を守る盾として当然の、ありふれた当たり前の任務の一つだった。

陸上輸送艦ランドドルフィン。

銀色の直方体に青いラインが三本入っただけの無骨なフォルム。ビルの三階ほどの高さに据え付けられた操縦席。後部に添えつけられた三機のプロペラが吐き出す空気の力が、僅かばかりに地面から浮き上がった艦体を前へと押し進める。

真夏の叩きつけるような日差しの下、ランドドルフィンはリムリア連邦内ウオース自治州へと向け、一路荒野を突き進む。

これから始まる映画とは、リムリア連邦を舞台とした「仮想軍記物」なのだろう。パンフレットをパラパラとめくりながら僕は「ヴォル・ポーニ」に話しかける。

「結構分厚いね、このパンフレット。とりあえず読むのはここまでにするから、準備が出来たら始めてもらっても構わないよ」

ページを進めていけば、登場人物のことなど様々な情報が記載さ

れているようだが、話を先に知ってしまうのは映画鑑賞という面においてどうだろうか。

僕はパンフレットを閉じる。

「最後まで読まなくていいの力？」

相変わらずプカプカと宙に浮いたままヴォル・ポニーが言う。

「最後まで読んだら内容が全部分かってしまいそうだからね。それだと、面白くないだろう？」

「お前さんが面白いと思うかどうかは問題ではないのだが。それで八、始めるとしよう」

「はいはい、よろしく頼みます」

クス玉のようにパカッと割れたかと思うと、ヴォル・ポニーの中から映写機らしきものが姿を現す。

もう、なんでもありな気がしてくる。

第一章 ラスティと銀色の剣士 〱 D・F・の戦場 〱

第一章 ラスティと銀色の剣士 〱 D・F・の戦場 〱

「おい、そろそろ起きろ。出撃準備だぞ、ラスティ」

「う、ん……」

いつの間にか眠っていたらしい。目をこすりながら俺は体を起こす。

「俺、いつから寝てました？」

「俺が控え室に来たときにはもう。——随分とうなされていたが、昔の夢でも見たか？」

俺は無言でかぶりを振った。質問に対する否定ではなく、寝ぼけた頭を覚ますためだ。続いて両手で頬をピシリと叩く。

「しかし、お前は大物だよ。現場に配属されて五ヶ月。やっと五回目の出撃だったのに、直前まで居眠りとは恐れ入るよ。俺は出撃前の震えが無くなるまで一年はかかったっていうのにさ」

リップ先輩が呆れたように俺の顔を覗きこんでいる。

「配属されてから随分と鍛えられましたからね。でも、まだまだですよ。もっと経験を積んで、技術を学んで——」

「強くなつて仇を討つ、だろ？」リップ先輩は無精ひげの目立つ顎をさすりながら俺の言葉を奪う。「目標は、ないよりはあるほうがいいに決まっている。そのために前を向いて努力することも大事さ。だからといって、目の前の任務を疎かにしているようじゃ話にならない。そうだろ？」

「分かっていますよ。今だって目の前の任務で精一杯ですから」

だったら居眠りなんかするんじゃない。先輩は笑いながら俺の髪をクシャクシャと撫でる。

リムリア連邦国防軍准尉。陸軍第十四機動隊所属のパイロット。それが今の俺の肩書。

膝を突き合わせているのはリップ先輩。俺よりも四つ年上の二十五歳で同じく准尉。「同じ准尉」といっても、士官学校卒業と同時に「准尉」と書かれた証書を貰っただけの俺とは違う。

先輩のそれは下の階級から一つずつ積み上げてきた結果。

軍には、特に一般入隊者の中には、ポツと出でいきなり相応の階級を与えられる士官学校卒の人間を毛嫌いする人もたくさんいると聞いていた。

けど、少なくともリップ先輩に関しては違った。

戦場での心構え。上司との付き合い方。それから夜の遊びまで、教科書には載っていないような事を手取り足取り教えてくれた。この人と同じ配属されて良かった。そういう風に心底思える、そんな人だった。

『出撃三十分前。パイロット各員は格納庫に集合せよ。全艦第二級戦闘配備へと移行』

艦内にはオペレータの女性の声と、警報が鳴り響く。

「うし、行くか」リップ先輩が短く刈り込まれた金髪をさすりながら立ち上がる。「無傷で帰ってこれたら好きなものをご馳走してやるよ。気合入れていけよ」

「今度こそご馳走してもらいますからね。よし、こんな分厚いステークにしよう」親指と人差し指の間を二センチほど開けて見せつけると、先輩はニヤリと笑った。

国防軍の軍規にはこうある。

戦闘行動に伴って発生するあらゆる結果を競う、賭る等の行為の一切を禁ずる、と。先輩が言うことは明らかな軍規違反なのだけど、教育の一環だと先輩は一笑に付す。目標を達成するために課題を持つて任務に当たる、という建前らしい。

「ちなみに、次からは俺との被弾率勝負になるからな。リスクなしでご馳走にありつけるのは今回がラストチャンスだ」

「それ、今決めたでしょ？」前を歩く先輩の顔を直接見たわけではない。が、先輩が目を細めているのは手に取るように分かった。

艦後方の格納庫で俺たちを出迎えるのは、窮屈そうに体を寄せ合って一列に並ぶ四機の二足歩行型機動兵器。うち二機は俺とリップ先輩が搭乗する機体。残り二機のパイロットが起動兵器の足下で俺たちが来るのを待っている。

「全員揃ったわね。それじゃ、今回の作戦をもう一度おさらいするわよ」

四人の中で唯一の女性であるアドリアナ隊長が説明を始める。

俺の所属する第十四機動部隊の隊長で、リップ先輩より三つ歳上の二十八歳。ベリーショートの銀髪に紫の瞳、塗れた唇の女性。氷の彫刻のような涼しげな眼差しが特徴。見た目の印象は「クールビューティー」そのもので、所見の際は「冷たい人なのかも」と思ったものだ。

「私たちが向かっているのはウォース自治州の旧市街地。南北を山と川に挟まれた東西に伸びる寂れた街ね。市街の中心部に口を開けた採掘口跡地を占拠したテロリスト連中の一掃が今回の作戦目的よ」隊長は手に持った資料の表紙をめくった。

促されるようにウォース旧市街地の地図が記載された手元の資料をめくる。

ウォース自治州は六年前にリムリアに併合されるまではウォース王国という名だった。南のウォース山地から採掘される純度の高い金によって潤う豊かな国、それがウォースだった。

国土の拡大を図るリムリア連邦は、自国の繁栄のみを望むウォース王国との間に友好的な合併を持ちかけた。利害の一致した同盟交渉はトントン拍子で進み、最終の合併調印式が行われていたまさにそのとき、合併反対を掲げる過激派が調印式場を急襲、ウォース国王とリムリア連邦政府の使者は殺害された。直後には過激派による軍

事政権が発足したという。

リムリア連邦政府は即日中に軍事政権に対して解体を通告したが、当然ながら聞き入れられるはずもなく、最初の戦端が開かれたのはわずか二十時間後のことだった。

軍事政権とリムリア連邦の戦力差は圧倒的であり政権は三日ともたずに崩壊、ウォース王国はウォース自治州としてリムリアに軍事併合されることとなった。

今回、旧市街地を占拠したテロリストは軍事政権の残党の可能性が濃厚、ということらしい。

「以前から前からゴタゴタの多い地域なんだけど、今回の連中は複数の機動兵器を所持しているらしいわ。私たちにお鉢が回ってきたのはそのためね」

「機動兵器って？」

「ようするに、『あちらさんもD・F・を持っていてので何とかして下さい』ってことだろ。そりゃ、片田舎の守備隊じゃ手に負えなくなるわな」リップ先輩が資料をうちわ代わりにしてパタパタと扇ぎながら、俺の疑問に答える。

守備隊というのは各州、各都市に配置されている武装警察のようなもので、連邦政府所属の国防軍とは別系統で動く自衛組織のことだ。「そういうこと」アドリアナ隊長が目配せをしながら続ける。「地図を見れば分かるけど、旧市街地の出入り口は東西の二箇所。私たちは二手に分かれて旧市街地へと侵入、速やかに敵機動兵器を無力化し採掘口を抑えるわ。小細工なし、オーソドックスな挟撃作戦ね。後始末は後続の第七機動隊に任せるから、私たちは一直線に採掘口を目指します」

俺たち第十四機動部隊が先行して敵機動兵器を抑えると同時に、採掘口を急襲。続けて後続の第七機動隊がテロリストの捕縛、証拠物品などの押収を行う。それが作戦の全容だ。

「それで、敵さんの戦力はどんなもんなんですか？ 資料にはその

辺りがないみたいです」「リップ先輩の問いかけに対して、隊長は首を傾げる。

「目で見て確認しろっていうことみたいね。もしも私たちじゃ手に負えない戦力が向こうにあるようならすぐに退却すること、いいわね」「それはないと思うけど、と隊長は付け足す。

「ようは、当たって砕けるってことですかね？ 守備隊も、ただ泣きつくだけでなく、情報収集くらいしてもらいたいところですね」

砕けたらダメよ、と横目で先輩を見ながら隊長は続ける。「部隊編成は、東側から私とラストイ、イラーノとリップは西側から。いいわね」

「了解。お手柔らかに頼みますよ、イラーノ副隊長」先輩はわざとらしく敬礼する。

「お前とやりあうわけではないのだから、手柔らかも手荒もない」無愛想な言葉を投げ返すのがイラーノ副隊長。リップ先輩曰く「常識のシャツ」と、「規律のズボン」を着込んだ人の姿をした軍規書のお化け、と言うような人間だ。

「相変わらず厳しいですね、副隊長は」苦笑いを浮かべるリップ先輩。

「それじゃ、イラーノとリップは出撃準備。先行して出てもらうわよ」

隊長が穏やかでクールな微笑みを浮かべる。

了解。揃って敬礼した先輩と副隊長は自分の機体へと走っていった。

「市街戦、始めてだったわね？」隊長が俺の肩を叩く。

「はい」確かに今までに市街地での実戦を経験したことはない。それでも、「シミュレーションでは何度もやっていますし、大丈夫です」

「熱くなつてがむしゃらに突っ込むと痛い目を見るわよ。普段よりも慎重に、ね」隊長が両目を細めて俺を見つめる。二十代後半とは思えない細やかな白肌にうっとりしそうになる。

背中をポンと叩かれ、俺は隊長と並んで機体へ向かう。

隊長は、一つのことに集中するとすぐに周りが見えなくなる俺の性格を心配している。

リップ先輩にも同じことをよく言われる。

でも、もう実戦だって五度目だ。いつまでも心配をかけさせている場合じゃない。

市街地戦であっても関係ない。

俺は立ち止まるわけにはいかないのだから。

「ちょっと止めてもらいたいのだけど」

クス玉のように口を開いていたヴォル・ポーニが元の球体へと戻っていく。どうやら、僕が言えば上映を中断してはくれるらしい。

「どうしタ？ まさかトイレだなんて言い出すのじゃないだろうナ？」

「そうではないけれど」そう言われるとトイレに行きたく……はならないか。

「では何の用ダ？」

「のっけから知らない単語が登場しているからさ。言葉の意味くらいは理解しておいたほうがいいかと思つてね」

「分かつタ。今なら止めても大丈夫だからナ。準備が出来たら言つてくれ」

今なら止めても大丈夫というのはどういう意味だろうか。そのうち止められなくなるとのことだろうか。まあ、いい。今は言葉の意味を確認しよう。

僕はパンフレットを開き「ダブルフット」の項目に目をやる。

D・F・（ダブルフット）

リムリア連邦国防軍の主力兵器。二足歩行の起動兵器。

最初にD・F・が産声を上げたのは物語の始まる七年前。Gen 1（ジェネレーションワン）と呼ばれたプロタイプは「人が乗って二本足で歩く」「自力で起き上がる」「走る」「跳ぶ」という四つの課題を実現するために造られた機械人形だった。三機が製作されたプロトタイプのうち一機は、リムリア国立博物館の二階、「機動兵器の歴史」のブースに今も展示されている。腰と見間違える程に逞しい二本の足を生やした姿は、どんなに臆目に見てもカッコいいとは言えなかった。博物館を訪れる子供たちは口々に「ダサイ」と指を差し笑い転げたという。

後に「常温超伝導機関・ナチュラルスーパーコンダクター」を搭載することによって真価を発揮することになるD・F・は、「第二次技術革命」と呼ばれるほどの劇的な革新をリムリア連邦へもたらすこととなる。

「また、新しい単語の登場か。『ナチュラルスーパーコンダクター』も見ておいたほうがよさそうだな」僕はパンフレット内の単語解説ページのナ行へとページを送る。

ある単語を調べるために辞書を開いたのだが、知らない間に次から次へと別の単語の意味を調べ始めていて、当初の目的とまるで違うことにリソースを取られてしまうことはよくある。これを抑制するには相応の忍耐力が必要になる。と僕は思う。

ナチュラルスーパーコンダクター

燃料の補給を必要とせず、半永久的な稼動を実現した超伝導動力機関。

本来、超伝導とは摂氏マイナス二百度以下の極低温状態で発生する特異な現象であり、超伝導体を用いた永久機関の開発は人類の長年の夢だった。その夢が現実へと大きく近づいたのは十七年前。科学者であるクレメンス・ハーミットの手によって生み出されたとある化合物は、摂氏二十八度の研究室内で不安定ながらも超伝導反応を

示したという。その化合物は室温の低下に比例して超伝導反応を増していき、摂氏十二度で完全な超伝導体となった。

半年後の学会で発表されたその化合物は、やがて世界中に激変をもたらした。わずか十年の後には、世界の電力の九割は超電導発電によつて生み出されるようになったのだ。

こうしてまたたく間に世界中に広まることとなったナチュラルスーパーコンダクターだが、避けられない重大な欠陥も抱えていた。安定稼動をするためには摂氏十度以下を保つ必要があることだ。事実、超伝導発電所の大半は緯度の高い極寒の地に建造されている。

D・F・に搭載されているナチュラルスーパーコンダクターは、生みの親であるクレメンス「ハーミット率いる開発チームが採算度外視で生み出した、至高の一作なのである。

「至高の一作ね。僕もその、クレメンスという人に会つてみたいよ」
僕の言葉を独り言とらえたのか、それとも同意を求めるような問いかけには反応しないのか、ヴォル・ポーニはフワフワと漂うばかりだった。

「オーケイ。続きを頼むよ」

僕はイスに深くもたれかかる。背中にフィットしていて実に座り心地のいいイスだ。

ヴォル・ポーニが再びあぐりと口を開く。サッカーボールに口などないはずだが。

『管制システムオールグリーン。発進準備完了です、アドリアナ隊長』

凜としたオペレータの声が、俺の前で発進体勢に入っている隊長へと届く。

リップ先輩とイラーノ副隊長は既に出撃済みだ。

「了解。私とラスティが出たらランドルフインは所定のポイントへ移動。後続の第七機動部隊が追いついてくるのを待って連絡をちようたい。それじゃ、射出よろしく！」

『了解。D・F・Gen3カスタム、アドリアナ機、発進シークエンスへと移行します』

出撃時の際のコントロールはランドルフインのブリッジから遠隔で行う。

女性オペレータの声が射出までの時を刻んでいく。

7、6、5――

「ラスティ、外で待っているわよ」

2、1、――

隊長のD・F・が発進口から飛び出していく。次は俺の番だ。

機体を固定しているハンガーがゆっくり前方へ動き始める。縦一列に並んだ四機のD・F・は、前から順に出撃していく。最後尾の俺の機体が出撃するのが最後になるのは必然だ。

メインモニターはゆっくりと迫ってくる格納庫の壁を淡々と映し出す。胴体を固定していたロックが解除され、機体がガクンと沈み込んだ。D・F・の太い脚部に重量が押し掛かる。

先輩から教わった出撃直前の「儀式」を行う。

まずは両肘の上げ下げ。次に右、左の順に拳を握り締めて、開く。指の関節に組み込まれたモーターの駆動音が鳴動する。仕上げに首を左右そして上下に捻ると、メインモニターにはD・F・の目線、高さ約六メートルから捉えた格納庫内の様子がグルリと映し出される。背伸びをすれば頭をぶつけそうな高さの天井は、当然何も言うてはくれない。

右下のステータスモニターを確認する。

オールグリーン。異常なしだ。

『ラスティ機、管制システムオールグリーン、発進準備完了です』
オペレータの声を聞き終えて、小さく深呼吸し息を整える。さっき先輩には「大物」と言われたけれど、この瞬間の緊張感は何度経

験しても変わらない。心臓が暴れる。

この緊張感にもいずれは慣れるのだろうか。

コーヒーの苦さのように。ビールの苦さのように。苦さばかりだ。

「こちらラストイ。出撃準備完了。——お願いします」

『了解、D・F・Gen3ラストイ機、発進シークエンスに入ります。カタパルトに固定。セーフティロック解除。射出十秒前からカウントダウン』

ランドドルフィンからの発進は荒っぽい。簡単に言うならば、発進口から艦の外へと放り出される。しかもそれなりの勢いで。もちろん理由はある。一定以上離れた位置まで飛ばすことで、ランドドルフィン自体との接触を回避するためだ。

二回目の出撃のとき、着地に失敗して派手にすっ転んだのを思い出す。任務終了後にリップ先輩に大笑いされたっけ。その笑い声を聞きつけたイラーノ副隊長が「後輩の失敗を嘲笑するとはなっていない」とかいう理由で、何故か俺まで一緒に説教されたんだった。挙句、先輩の「腹いせのナンパ」にまでつき合わされて……

3、2、1――

歯を食いしばる。

瞬間、大男の全力タックルを受けたかのような衝撃が真横から襲い掛かる。身体が宙に浮く感覚。同時に目の前が紙芝居のように無機質な壁から、緑の風景へと切り替わる。

両の足が地面を握り締める。もちろんD・Fの両足が。少し遅れて着地の衝撃が胃袋を突き上げる。左右のバランスーが衝撃を吸収し、補正がかかってこの衝撃だ。マニュアル操作で重心を戻しながらペダルを踏み込むと、D・Fは大地を蹴って前へと進む。ゆっくりとしたピッチから徐々にストライドを伸ばし加速する。姿勢制御はオートでもいいのだが、俺はマニュアル操作のほうがしっくりとくるタイプの人間らしい。ようは車と同じだ。

レーダーを表示する左のサブモニターには遠ざかる黄色い四角と、接近する黄色い丸が点滅している。四角がランドドルフィンで、丸

がアドリアナ隊長。

『今回も、ちゃんと着地できたみたいね』通信モニターに隊長が涼しい顔で現れる。

「散々練習しましたから——」小うるさい副隊長からは小一時間の説教を、優しい隊長からは発進練習ぶち抜き三時間コースをプレゼントされたのだった。

『そうだったわね。じゃあ、目的地まで一気に行きましょう』

「了解です」

大地を揺らしながらD・F・は山道を駆けて行く。

ゴーストタウンと化した旧市街地へと向けて。

人に臭いすらしなない沈黙のウォース旧市街地。

ほんの数年前まで賑わっていた「金鉱山の街」という看板は、果てしない旅へと出てしまったようだった。吹き降ろす山おろしが揺らすのは、家主を失い悲しげに肩を寄せ合う家々。壊れた雨どいが悲しげに頭を垂れ、軋む金扉の音が寂しさを唄う。

リムリア軍に蹂躪され、生気を失った街に口を開けた採掘口に、国防軍接近の一報が入る。

「国防軍が接近中との連絡が偵察班から入っています」

「政府からの返答は？ こちらの要求に対する返答はないのか」

「今のところは——いや、待つてください。政府の公式声明が発表されています。生中継の映像を出します」

ノイズの混じった旧式のテレビに現れたのは連邦政府のスポークスマン。いかつい髭面と後退した広い額が意味もなく威圧感をかもし出している。

『ウォース旧市街地を占拠したテロリストたちは、我々の呼びかけには一切応じずに、自分たちの要求を突きつけるのみだ。我々政府はテロリストに屈することはない。彼らの言う「ウォース王国の復

興」は虚像であり、テロリストによる軍事国家を二度と認めるわけにはいかない。六年前、旧ウォース王国との合併交渉を破談に追い込んだのは彼らテロリストだ。我が国は破壊と殺戮を望む者たちの言いなりには決してならない」

力強く拳を握る姿には、有無を言わさぬ説得力があった。

『彼らが我々の呼びかけに応じ、即時の武装解除と人質の解放に応じるのであれば、政府として寛大な処置をすると約束しよう。それがなされない場合には、実力行使もやむを得ないと判断するしかない。彼らは今一度考えるべきだ――』

「呼びかけだと！」リーダーの男が怒りに任せて机に拳を叩きつけた。「そんなもの、ただの一度もなかった！こちらの要求は一切無視し、表では降伏を呼びかけ、裏では軍を動かし我々を殲滅する算段を立てているというわけか」

「いかがしますか？」

「いかかもクソもあるか！このまま籠城を続けたところでどうにもなるまい。奴らはいざとなれば街ごと焼き払うだろう。降伏したところで抹殺されるだけだ。こうなった以上は国外へ脱出するほかあるまい」不本意だがな、とリーダーは吐き捨てた。

リムリア連邦の南東に位置するウォース自治州から国境までは、そう遠い道のではない。

「接近中の国防軍の戦力は？」

「情報によると、先行しているのがD・F・四機編成の小隊です。二機ずつ東西に分かれて接近中とのこと。後方には別部隊が展開しているようですが、そちらの詳細は不明」

「よし。戦車三機を西に、D・Fを含む残りの全戦力を東入り口へ集結させる。東から来る二機を潰した後、一気に国境へ向けて脱出する。奴らの後続部隊が来るまでが勝負だ」

「人質の老人たちはどうしますか？」

「もはや、人質になど意味はない。捨て置けば……いや、時間稼ぎに利用させてもらおう」

採掘口内がにわかに騒がしくなる。西へ向けて三台の戦車が走り出す。

「自動追尾モードに設定したらすぐに離脱しろ。国境で合流だ」リーダーの声に戦車の操者は軽く手を上げる。その後を人質の老人たちを乗せた車が追う。

「こちら東側へと移動する。国防軍に一泡吹かせるぞ！」

採掘口の脇で退屈そうに足を投げ出していた三機のD・Fが静かに立ち上がる。朽ちかけた建物の列を揺らしながら、東側へと向かって行軍を開始する。

先行するリップとイラーノは旧市街地の西口一歩手前まで迫っていた。

「見えてきたな」

「山と川に挟まれて、のどかで良さそうな場所じゃないですか。プライベートで遊びに来たいくらいですよ」丘の上から見下ろすかつての金鉱山の街にリップが感嘆の声を上げた。

「残念ながら、我々はピクニックに来たわけではないぞ」

「へいへい。仕事は抜きなくこなしますよ。だいいち、副隊長とピクニックじゃ楽しめそうにないですからね。隊長と一緒になら大歓迎なんです」

「それは私も同感だな」

「へっ？」予想外の返答にリップは耳を疑う。「隊長とピクニックにしたいんですか？」

「お前とピクニックなど論外、という意味だ。無駄口はそこまで、突入するぞ」イラーノ機が腰に据え付けられた武器を手取る。散弾を発射する火器、ショットガンを構えつつ旧市街に向けて一直線に加速した。「バックアップは任せるぞ、リップ」

「了解。俺にも獲物を残しておいてくださいよ、副隊長」リップ機の装備は三連式のロケットランチャー。いつでも発射できる態勢を取りながらイラーノに続く。

「我々は狩猟に来たわけでもないのだぞ。また指導を受けたいのか？」

「いや、遠慮しておきますって」

二人はいつもこんな感じだった。リップとイラーノ。一見すると全く噛み合わないさそうな二人だが、性格的に正反対な二人だからこそ、お互いを補完し合ったコンビネーションは絶妙で、実戦においても抜群の相性を見せていた。

旧市街の西の玄関口となる木製の傾いた門を通り抜けたD・Fの前に、廃れきった風景が広がる。生気を感じない、息絶えたような旧市街地の街並みが二人を出迎えた。

「なんでまたこんなところに立て籠もりますかね？」リップが周囲を見渡す。

「誰もいない場所のほうを立て籠もるのに都合がいいからだろう。標的は採掘口だ。指示書には市民が人質に取られている可能性もあるとあった。用心して掛かるぞ」

「まったく、人質を取って籠城したところでどうしようもないだろうに。連中が考えることは良く分からないものですね」

「テロリストどもの考えなどを理解する必要があるまい。我々は軍人として、テロ活動を鎮圧する。それだけだ」

「ま、否定はしませんよ」

珍しく二人の考えが一致したのにリップが気を緩めた矢先、背後でドンと発射音が響いた。ほどなくして二人の脇の地面が、爆発でえぐり取られる。

「これは、砲撃か？ 動体反応が三つ、囲まれたか――」

リーダーに目をやったイラーノは、自分たちの置かれた状況を把握し眉をひそめた。

三方から降り注ぐ砲弾をかわしながら、二機のD・Fは廃ビルの陰へと身を隠す。

「待ち伏せてわけですか。正面からの突入は迂闊過ぎましたかね」
「結果論だが、テロリストどもが採掘口に立て籠もっていると決め

付けたのがまずかったようだ。だが見る。敵の動きが止まった。動体感知センサー搭載の自動操縦機らしいな」イラーノは判断の甘さに唇を噛みながらも、冷静に敵の動きを観察し予測を立てた。「こつという状況での次の一手、分かっているな？」

「もちろん。手始めに東の奴に仕掛けてみますか」

言うと同時にリップはロケットランチャーの引き金を引く。砲弾は弧を描いて東側の敵近くへと着弾し小さな爆発を起こした。運悪く砲弾を受け止めた家屋は、黒煙を上げながら無残に崩れ落ちた。レーダー上の敵機を示す赤い丸が、爆発に釣られて一斉に動き出す。「標的を戦車タイプと視認。戦闘行動に移る」

イラーノ機が、巻き起こる黒煙をかき分けながら、一台の戦車へ向けて全速力で突進する。戦車の砲塔がD・F・を正面に捕らえるよりも先にショットガンが火を吹いた。耳を劈くような連続音と共に蜂の巣となった砲塔部分は完全にその機能を失う。イラーノは使い物にならなくなった砲身を捻り上げると、機関部に銃口を押し当て引き金を引いた。

「一機撃墜」イラーノがレーダーを確認すると、敵を示す赤い丸は残り一つになっていた。

「北側はリップが仕留めたか。後は南西の一機だな」

イラーノは最後の標的のいる方向へと機体を反転させた。

砲身を切り落とされ、抵抗する術のなくなった戦車のエンジンから煙が吹き上がる。

垂直に突き立てたアサルトブレードを引き抜きながらリップは、ゆっくり立ち上がった。

「三つ目は副隊長に任せて、周辺に探りでも入れてみるとするか」

イラーノは戦車の上に立ったまま周囲の様子をセンサーで探る。

「ん？ あそこに生体反応……あっちにも」

崩れかけたビルの傍らに集まっている人間の姿をセンサーが捉える。「逃げ遅れ？ それとも解放された人質か？」

リップは機体を静かに彼らのほうへと寄せた。

「三機目を撃墜。これで全部だな」

イラーノとリップが攻撃に移ってから、全ての戦車を撃墜するまでに要したのは、僅か三分ほどだった。戦車とD・F・の戦力差はそれほどのものだった。

「リップ、こっちは片付いた。そちらの様子はどうか？」イラーノは通信でリップを呼ぶ。

「周辺の索敵可能周囲内に機影は見受けられませんが——」戸惑った声色でリップは続けた。「爺さん婆さんがワラワラと出てきちゃって、どうしたものかと。一体どこに隠れていたのやら……」

「老人たちが？ 分かった、私もそちらへ向かおう」

リップのD・F・の足下を十数人の老人たちが取り囲んでいた。安堵の顔を浮かべている人もいれば、険しい顔で激しくまくし立てている人もいる。一つ共通しているのは、皆疲れ果てた顔をしていることだ。

「どうしますかね、副隊長？」

「放っておくわけにはいかないだろう。私が話をしよう」

イラーノのD・F・が静かに腰を下ろす。ハッチからイラーノが姿を現すや否や、老人たちは一斉に彼を取り囲んだ。

「——やれやれ、テロリストが立て籠もっている街の風景とは思えないねえ」

リップの見下ろす先には老人たちに食って掛かれるイラーノの姿があった。リップにはそれが、クレーム対応に追われる営業マンのようにも見えた。

俺たちの侵入ルートであるウォース旧市街地の東入り口は、なだらかな勾配の一本道を登った先にあった。道は広く、両脇には新緑

に萌えるブナの樹が並んでいる。いや、雰囲気でブナと言ってみたが、なんの樹なのかは良く分からないけれど――

とりあえず、そんなことに構っていられる状況ではなかった。

俺とアドリアナ隊長を待っていたのは、降り注ぐ銃弾の雨あられ。『さすがに近づけないわ。向こうも地の利を考えて布陣しているということね』

隊長がフツと息をつき額の汗を拭う。

俺たちは敵の攻撃が届かないところまで後退して様子を伺っていた。少しでも顔を出せば、途端に激しい砲撃が浴びせられる。

『ラステイ。あなたのリーダーでは何機補足した？』

「五、六、七、全部で八機ですね。D・Fが二機。残りは戦車が装甲車だと思います」

リーダーに浮かぶ敵影は思っていたよりも多い。

『まったく……この規模の連中が野ざらしだなんて、この辺りの守備隊は何をやっていたのかしら』隊長は口を尖らせて言う。『いい機会だから、市街戦の基本を叩き込んであげようと思ってたのに、近寄れないのじゃどうしようもないわね。あなたならこの状況、どう対応する？』

俺ならどうするか、か。

このまま時間を稼いで先輩たちが来るのを待つべきか？ いや、先輩たちは真っ直ぐ採掘口へと向かっているはずだ。ならば、一度退いて後続部隊と合流するべきか？ だめだ。ここで退けば敵は東の国境を越えて逃走するに決まっている。それなら、このまま山沿いを西に回りこんで…… 論外だな。

こんなことぐらいで逃げ腰になっているようじゃ話にもならない。俺なら――

「俺なら、正面から突っ込みます。バックアップの援護を受けながらフォワードが突入。内と外からの挟撃でまずD・Fを潰す」
リップ先輩の言葉を思い出す。当たって砕ける。

『――オーケイ。私がフォワードで行くからバックアップをお願い。』

背中は預けたわよ』

ドキリとする。隊長の視線が氷のように冷たく険しくっていく。凄みと気品を併せ持つそれをリップ先輩は「本気モード」と呼ぶ。そして「隊長の一番の美人顔」とも。

隊長のD・F・が、背中に装備した大剣を抜いた。そして構える。対重装刀フルシオン。

隊長のカスタムタイプ専用のカスタマイズ武器。俺たちの乗る量産型が装備するアサルトブレードと違い、剣自体の重量で敵機を装甲ごと叩き斬るための武器。

隊長自身の容姿も合わさって付けられた軍内での通り名は、銀色の剣士。

『私が出たら、五つ数えて続きなさい。行くわよ!』

全身をバネのように解き放って飛び出して行ったその後ろ姿はまさに、気高き女剣士のそれだった。五秒遅れて追いかけようとしたときには既に、相手の喉元にまで迫っていた。

遅れまい、と隊長の影を追う。幸いにも敵の注意は烈火の如く突進する隊長へと集中している。的確な援護をするためには、まずは敵機の配置を把握すること。敵の目がこちらにも向く前に、右から左へと目を配る。

壁の向こう、市街地内部から撃ってきているのは戦車か、歩兵の迫撃砲だろう。壁の向こうから砲撃に確実性はない。偶然の直撃にさえ気をつけていれば大丈夫だ。問題は外壁の三箇所に据え付けられた固定砲台と、D・F・からの狙撃だ。

俺は携行するショットガンのロックを解除し、砲台の一つに狙いを定める。

「大丈夫、動かない標的ならば当てられる。落ち着いて狙えば大丈夫」散弾を撃つショットガンは命中精度が高い。射撃が苦手な俺にとってはありがたい装備だ。

先に行く隊長に目をやる。喉元を通り過ぎて、目と鼻の先にまで接近している。けれど、突破まであと一步のところまで接近しながら

も、最後の一步を詰めきれずにいる。

さすがの隊長でも、あれだけの集中砲火を潜り抜けるのは容易ではないのだろう。

「ターゲットロック、自動追尾モード」中央の砲台を照準に入れる。後は引き金を引くだけだ。

次の瞬間、足下が地面ごとえぐれ飛んだ。壁の向こうからの砲撃が俺の鼻先をかすめて着弾したのだ。

「偶然の直撃に気をつけろと思ったばかりじゃないか——」今さっき心に決めたことを早速忘れている自分に呆れる。射撃に集中するあまりに砲撃への対応が疎かになっていた。

こんなことではリップ先輩からのご馳走には到底ありつけない。

体制を立て直す。砲撃を落ち着いてかわして、もう一度砲台を照準に入れる。ようやく俺が狙っていることに気づいたようだが、もう遅い。

「もらった！」引き金を引く。激しい連続音と共に銃口から硝煙が吹き上がる。「次は右だ！」中央の砲台が黒煙を噴くのを確認し、右の砲台をロックする。

右の砲台もあつさりと沈黙した。左の砲台は少し遠い。照準を外壁の隙間から顔を覗かせるD・Fへと切り替える。砲台と違って奴は動く。けれど、当てる必要は無かった。俺のほうへと注意を引き付けることができればそれでよいのだから。

散弾は相手から少し外れたところに命中した。すかさず向こうも撃ち返してくる。

「そうだ、こつちを狙え」

ジグザグに動きながらショットガンを連射する。砲撃への警戒も忘れてはいけない。

『ナイスフォロー！』ついに守備網を突破した隊長が市街地内部へと消えていく。

残り一つとなつた左の砲台を破壊するのは容易かった。

壁の向こうからの砲撃が止む。隊長が突入したわけだから、勝負は

ついたようなものだ。

「フォローくらいこなしてみせますよ」隊長に聞こえないように呟く。

いつまでもフォローで満足しているわけにはいかない。

隊長の後を追って、俺も市街地へと進入する。

二機だったはずの敵のD・Fは、四つになっていた。

一機は右半身と左半身が、もう片方は上半身と下半身が文字通りの「半身」となってそこらに転がっていた。その向こうで大剣を携えたまま仁王立ちするのは、麗しき銀色の剣士、アドリアナ隊長。

けれど、隊長はその通り名で呼ばれることをあまりよく思っていない。どうしてよく思わないのか聞いてみようと思ったまま、聞けないのだった。

『全機撃破できたみたいね』

「みたいですね。隊長がD・Fを真っ先に倒してくれたおかげで、残りは楽なものでした」

『バックが優秀なチームは強い。道理よね』

それは、その通りだと思う。でも、俺は。

『あなたがバックアップで満足しないのは分かっているわ。それに、フォワードのほう得意なものね』

さすが隊長。よく分かっているらしい。

『焦らなくても、あなたの力ならゆくゆくはフォワードを任せられるようになる。今は経験値を積むことが重要なときなのだから』

「了解。隊長には適いませんね」当たり前のことだ。隊長を超えているのなら、凌駕しているのなら俺が隊長になっている。それだけのことだ。でも。

『採掘口へと向かう前に、いくつか注意』モニターの向こうで隊長が人差し指を立てる。さっきまでの氷の視線は消え、優しいお姉さんの顔がそこにあった。『市街地戦の鉄則その一。作戦終了まで武装を収納しない。いつ、どこに伏兵が潜んでいるか分からないでし

よう？』

確かにその通りだろう。障害物、遮蔽物が多い市街地では誰がどこに隠れているか分からない。出撃前に隊長が言っていた。「普段よりも慎重にね」と。

『鉄則その二。複数で行動する際はなるべく背中を合わせて行動すること。今回みたいに別々に突入した場合はそうも行かないけれど』

隊長の言葉に耳を傾けていて、リーダーを見落としていたのは本当に、本当に愚の骨頂だった。目の前のことに頭を支配されて他が疎かになる。自分でもうんざりする。

『ラスティ、後ろ！』

背中 of ビルから D・F が飛び出してきていた。右手に持った剣を振り上げ、俺の頭を目掛けて躊躇なく、振り下ろしてくる。

振り下ろされた切っ先から紙一重の距離を右に飛ぶ。空を切った剣が地面を削った。

『ラスティ、一度離れなさい！』

隊長の声は聞こえていた。それでも、相手の初手をかわした俺には自信があった。懐に潜り込みさえすれば、という慢心があった。アサルトブレードを抜き、無防備な左側へと回りこむ。

剣閃が敵機の左脇腹に突き刺さり動力部までを貫く、はずだった。

「な、なんだよこれ。コントロールが……効かない」

相手の巨大な左腕に気が付いたときには手遅れだった。アサルトブレードは弾け飛び、空しく弧を描いた。巨大な、明らかに巨大な左腕に上半身をガツチリと挟まれる。どんなに抜け出そうとあちこちを動かしても、関節を司るモーターが唸りを上げるだけだった。

『たった二機にこれだけやられてしまうとはな。こいつを持ってきたおいて正解だった』

俺を掴んでいるのは D・F の腕ではない。D・F に直結された工業用ロボットのパワーアームだった。岩盤の除去などに使用されるパワーアームの前では、汎用性と柔軟性を重視した D・F の抵抗など無駄な努力に過ぎなかった。

『暴れるんじゃない。量産型のD・F・がこいつのパワーに敵うわけがないのだから』パイロットはオープン回線で周りに聞こえるように言い放った。『そっちの機体もだ！　まずはその物騒なものから手を離せ！』

隊長に動く様子が見られなかったので、パイロットは語気を強めて言った。

『どうした、聞こえないのか！　その剣を離せと言っている。腰の銃も外して地面に置け！』

隊長は動かなかった。

『野郎、無視しやがって！　仲間がどうなってもいいのか？』

俺の喉元、正確には俺の機体の喉元へ鋼の剣が突きつけられる。装甲の薄い首周りからコクピットを貫くのは容易いことだった。

『——分かったわ』隊長がオープン回線で応じる。『それから、私は「野郎」じゃないから、そこは気をつけてもらえるかしら』

隊長機の指先から大剣フルシオンがするりと抜け落ちる。ズシリと重たい響きを残して舗装されていない地面へと突き刺さる。

『女だったのか——　まあいい。銃もだ。早くしろ！』

隊長は腰にぶら下がる銃を握ると、静かに前方へと投げ捨てた。

『これで満足かしら？』隊長は丸腰をアピールするかのよう両手を上げた。『次はどうすればいいの？』挑発的な言い方で右足を一歩踏み出す。

『動くな！』男の声は少し震えていた。『いいか、そこから一步も動くなよ。一步でも動いたら……分かってるな？』

喉元にあてがわれた鋼の切っ先が食い込み火花が散った。

『そのパイロットを殺せば、あなたも終わりよ』ゾクツとするほどの冷気を含んだ声でそう言うと、隊長は踏み出した右足を元の位置へと戻した。

『街の外まで出れば解放してやるさ。そうだ、そのままじっとしていろ』男は俺とD・F・を掴んだまま一步、二歩と後ずさりをする。隊長からの通信が入る。サウンドオンリーのプライベート回線だ

った。

『聞こえているわねラスティ。返事はいらなからから聞いて——しばらくの間ジツとしていなさい。いいわね、微動だにしては駄目よ』

意味を咄嗟に考える。動くな、微動だにするな。なすがままにされる。このままこいつを逃がせということか？ 街の外まで出ればきつとこいつは俺を殺す。そして一目散に逃げ去るだろう。そんなことくらいは想像できる。

俺の返事を待たずに隊長は動き始める。いや、「返事はいらなから」だった。

『なんのつもりだ？』男がまた声を荒げる。

隊長機のD・Fがゆっくりと左腕を突き出したからだ。

『あなた、カスタムタイプって知っているかしら？』左の拳を突き出して隊長が問いかける。

『なんのつもりだ、と聞いている』剣が喉元へと更に深く食い込む。『おかしい動きをしたらどうなるか、分かっているのだろう？』

『決まっているのよ——その手の台詞を吐く人間には、勝ち目がないとね』

『なに……』男が言おうとしたのが「何を偉そうに」なのか「何を言っても無駄だ」なのか、それとも別の台詞なのかは分からない。

それより先に隊長機の左腕が発射されたからだ。スプリングーフリスト。

隊長のカスタムタイプの隠し武器。構造は極めてシンプル、バネの力で拳を打ち出す、それだけの仕組みだった。ワイヤーで繋がった左腕が、俺の喉元に当てられた剣を弾き飛ばす。

隊長は次の動作に移っていた。地面に落ちたフルシオン握りなおし、ワイヤーを巻き取りながら低い姿勢で俺のほうへと突っ込んでくる。

『クソがあ！』男は臆した声を上げながら俺を盾にすべく、隊長に向けて突き出した。

されるがままの俺の眼前に隊長が迫る。獲物を追う狼のような勢いで隊長のD・Fが迫ってくる。斜め四十五度に振り上げたファルシオンが眩しく光った。

「ちよっと、待って……」

いや、ちよっと待ってくれ—— どうしてそんなにためらいがないんですか、隊長。

ファルシオンの軌道がはっきりと見えた。断ち切られていく空気の流れまでもが、手に取るように分かった。次は走馬灯って奴が流れ出す番なのか？

隊長の言葉がよぎる。微動だにしてはダメよ。今は隊長の言葉を信じるしかない。動いたらダメだ。咄嗟に目を瞑る。それくらいいいでしょう、隊長？

瞬間。

地震と雷の直撃を同時に受けた感覚。

真横で一斉に爆竹を鳴らされながら、ジェットコースターに乗せられた感じ。

鼓膜が弾け飛びそうになる。操縦桿を握り締める。歯を食いしばって足を踏ん張る。衝撃と爆音がもう一度。コクピットが激しく回転して、床と天井と、操縦桿と計器がグチャグチャにかき回された。目を瞑っていたかどうか分からないが、ゆっくりと目を開く。耳はキューーンという間の抜けた音が鳴りっぱなしの状態。目の前には雑草が顔を出した茶色い地面が広がっていた。

「どうなった？」

頭は動く。操縦桿を握り締めたままの腕、足も繋がっている。ペダルを踏み込み、操縦桿を引き上げる。機体の関節が稼働する。両腕を地面へと伸ばし、機体を起こそう。

バランスが崩れた。右回りに回転したD・Fが、今度は仰向けに倒れた。地面が空に変わった。

能天気な青空が広がっているのを見て、そして、気付いた。

「メインモニターが、半分死んでいる」

右半分が真っ黒になった正面のモニターを茫然と見つめる。

『……ステイ。ラステイ、大丈夫？』

隊長の声が聞こえる。ああ、耳の奥で鳴っていたノイズが取れてきたのか。

「——なんとか」通信は生きているようだった。

『良かったわ…… 他に方法が思い当たらなくて——』

モニターは死んでしまっていたから音声だけのやりとりだったけれど、隊長の「本気モード」は終了しているようだった。

「そういう意味だったんですね。ムチャするなあ……」

左腕のパワーアームを両断された敵のD・Fが倒れている。それを見ながら俺は改めて隊長の言葉の意味を理解する。「微動だにするな」、それはつまり「俺が少しでも動いたら、一緒に斬り殺すかもしれない」そういうことだったわけだ。

『少し手荒すぎたかもしれないわね。でも、あなたなら大丈夫と思っただから』

買いかぶつてくれて、ありがとうございます。俺は大きく息を吐いた。

採掘口の調査を終えたイラーノ副隊長とリップ先輩が合流した。

人質にされていたと老人たちの安全確保と採掘口の調査を既に終え、それでも俺たちが来ないのを心配して様子を見に来てくれたらしい。採掘口はもぬけの殻だったようだ。戦力の大半は俺たちへと向けられていたらしく、先輩は「貧乏くじを引かされた」と悔しがり、副隊長に睨まれていた。

『アドリアナ隊長、応答願います』待機しているランドルフインから通信が入る。

「こちらアドリアナ。ランドルフインどうぞ」

『後続の第七部隊の展開が完了しました。市街地への突入指示をお願いします』

「グッドタイミングね。敵機動兵器群の一掃は完了、すぐに突入してもらって大丈夫よ。敵の主力は市街の東側に集まっていたから、そちらを念入りにね」

『了解しました。第七部隊に通達します』

「よろしく。こちらは、現時刻をもって作戦行動を終了。撤退するわ」

俺たちはウオース旧市街地から撤退し、ランドドルフィンの待つ合流ポイントへと向かっている。四機のD・Fが隊列を組み、緑の中を疾走する。

『よくもまあ、その状態で立って歩けるもんだ』リップ先輩が感心した声で言う。

『それだけ損傷に強い設計になっているということだ。我々パイロットとしては頼もしい限りだな』イラーノ副隊長が冷静に返す。

『損傷って、脳天から右の脇腹までバツサリですよ。爆発しないのが不思議なもんだ』

『動力のナチュラルスーパーコンダクターが無事ならば爆発はしないだろう。もつとも、動力部とコクピットを外した隊長の技量があるってものだろうがな』

『だそうだが、隊長の剣さばきを間近で見たラステイ君の意見は？』

「どうもこうもないですよ。見てのとおりです」そう吐き捨てる。

自分の油断と軽薄さが招いた結果が腹立たしく、悔しく、情けない。自己嫌悪だな。

『なににせよ、それだけ派手にぶっ壊したわけだ。ご馳走にありつけず残念だったな』

賭けの話か。無傷で戻ればステーキをご馳走になるんだっけ。敵からの被弾はゼロなんだけど。——負け惜しみだな。

『ま、隊長にぶった斬られて命があっただけラッキーと思うことだな。賭けは今回が最後で、次からは俺との勝負になること、忘れるなよ』

軽薄だな、先輩は。

『賭けとはなんのことだリップ？』

『いや、それは……その』

今の言葉は明確な軍規違反。副隊長が黙っている訳がない。

『ラストイ』隊長がプライベート回線で呼びかけてくる。『戻ったらミーティングルームね』

「——分かりました」

こっちはお説教か。

『気分が沈んでいるところにイラーノの説教は堪えるでしょう？ 適当に取り繕ってあげるから。気にするなとは言わないけれど、今日の活躍なら査定は大幅アップよ』

モニターが死んでいて表情が分からないのが残念だ。隊長の一番の美人顔は、きつと今の顔だろうに。そう思いませんか先輩？

ランドドルフィンへ戻った俺たちを、ムチと特大のアメが出迎えた。

アドリアナ隊長の口から次の任務の話が出た瞬間、皆の肩が一斉に一段下へと沈んだ。ウォースへの遠征は相当の長旅だった。当然、帰るのも長旅になるわけだが、途中で別の任務まで挟むとなると、それはガツクリとくるだろう。

だが、皆の表情は、任務の詳細を聞くに連れてみるみるほころんでいき、やがて艦内は候補者が当選した選挙事務所のような歓喜の声で埋め尽くされた。

「やってくれるぜ。護衛任務はともかく、『リゾート都市フラム』で一週間の補給待機だなんてよ。実質夏休みと一緒にじゃないか。なあラストイ？」

リップ先輩が俺の肩に手を回してガッツポーズをする。ついさっきまで副隊長の説教爆撃にさらされていたくせに。なんて立ち直りの早い人だ。

俺は、そんな素直に喜べる気分じゃなかった。

「たまたま近くを通る俺たちに、『フラム』を餌にして任務を押し付けただけでしょ？」

「なんだそのテンション低さは？ さては、派手に機体をぶっ壊したことを気にして落ち込んでいるのか？ え、ラスティ君？」

「そんなんじゃないですって」そんなんじゃない。凶星だ。

「済んだことは気にするなって」先輩は片目を瞑って、俺の背中を叩く。「フラムに着いたらパアツと飲みに行くぞ。嫌なことはそれで全部忘れる」割り勘だけだな、と付け加えながら、いつものように俺の頭をクシャクシャと撫でる。

「フラムに着く前に、任務が先でしょうに」

「護衛任務なんて、あつて無いようなものだろ？ 適当にやり過ぎばいいんだって。こういうときだけ真面目ぶりやがって、まったく」

まったくだ。みんなが喜んでいるのに、一人だけ沈んでいて。それが悔しくて意地を張って。でも、やっぱり軽薄だと思いますよ。出撃前には「目の前の任務を疎かにするな」って言っていたのに。

「何を適当にやり過ぎせばいいんだ、リップ。私にも教えてくれなにか？」

「うげえ。ふ、副隊長、いつからそこに……」

俺はすり足でソロソロとその場を後にする。巻き込まれるのはゴメンだから。

「いや、これはその…… かわいい後輩のラスティ君が色々ナーバスになつていたようで…… ですから、広い視野で物事を見るべきだと、アドバイスをしていたわけで……」

「ほお。それで、かわいい後輩はどこにいるのだ？」

「どこって、ここに—— な、あいつ逃げやがった。おい、ラスティ！」

「後輩のせいにするとは感心できないな。先ほどの賭け行為を助長するような発言といい、少したるんでいるのではないか？」

「滅相もない。全ての任務に全力を傾けるのが自分のモットーであ

りますです、はい」

わざとらしくくらいに姿勢を正し、敬礼する先輩。

「後輩のフォローもいいが、自分がたるんでいてはどうにもならんぞ。いいな」

やれやれ、という口調でばやきながら立ち去る副隊長の背中を見送りながら先輩は呟いた。

「あいつめ、次の勝負で俺が勝ったら、心の底からギャフンと言わせてやるからな」

イラーノ副隊長の地獄耳がリップ先輩の「不用意な一言」を見逃すはずもなく、先輩が説教のおかわりを口にしたのは当然の成り行きだった。

「ここで一旦休憩かい？」

映像が途切れたところで僕は、ヴォル・ポーニに聞いてみる。

「具合はどうダ？」

彼は僕の質問には答えずに、質問を返してきた。

「具合はどう、と言われてもなあ。まだ始まったばかりだし、今のところはなんとも言えないかな。強いて言うなら、ロボット同士の戦闘シーンは迫力があって良かったと思うよ——　なんでそんなことを聞くんだい？」

ヴォル・ポーニは何も言わずにフワフワと漂うばかりだった。

「そろそろお前さんの最初の出番だからナ。内容に問題がないかを確かめただけダ」

「僕の出番？」何のことなのだろうか。「映画を観る、以外に何かやることあるっていいのかい？」

「じきに分かるサ。お前さんのためにやっているわけだからナ」

僕のため？　何を言っているのだろうか、このサッカーボールは僕は映画を観たいと頼んでもいなければ、こんなわけの分からない

場所に連れてきてくれとも言ってはいない。

それなのに「内容に問題がないか」という質問にどう答える言うのだろうか。

僕は、黙ってヴォル・ポーニのほうをジッと見つめる。

何も言わぬままに奴はまた、口をガバッと開いた。

『接近中のD・F・へ通達。接近中のD・F・へ通達。本艦は技術開発省新鋭テクノロジー開発センター所属のランドホエールです。貴機の所属と、目的を述べてください』

この手のやりとりには慣れな感じの女性オペレータの声。俺は杓子定規に応える。

「こちらは国防陸軍第十四機動部隊所属、ラスティ・ウィン准尉です。貴艦の護衛任務にあたり、本隊より先行してやって参りました」
大量の砂埃を巻き上げながら前進する「丘のクジラ」、ランドホエールが俺の視界を覆う。俺たちのランドドルフィンの十倍はあるうかという流線型の巨体はまさに威風堂々。

『登録データ照合——確認しました。ご苦労様ですラスティ准尉。艦左舷の着艦口より機体を収容します。誘導に従ってください』

「了解、左舷着艦口へ向かいます」

オペレータとの社交辞令を済まし、俺は機体を流線型へと寄せる。着艦口の観音扉がゆっくり開くと、中からは巨大なマジックハンドがするすると伸びてくる。やがてそれは、俺と機体をすっぽりと包んだ。

『アーム展開完了。機体制御をニュートラルに切り替えてください』
「——了解」俺は少々、淡々と制御をニュートラルに切り替える。マジックハンドが機体をガッチリと固定する。身動きが取れなくなる。

嫌でも思い出す。当然、いい気はしない。

不意打ちにはまって捕らえられた拳句、盾にされてしまう大失態。隊長は「捕まった分を差し引いても充分にプラス査定だから気にしないで」と言っていたけれど、後味の悪さといったら、それはもう「どうしました。大丈夫ですか？」

収容は完了していたようで、景色が無機質な金属の壁へと変わっていた。オペレータの、お下げのブロードヘアーに丸メガネの女性が通信モニター越しにこちらを伺っている。

「――すみません。大丈夫です」

「ボーっとしているから心配しましたよ。そういえばそちらのランドルフイン、トラブル発生って聞いていますけど、状況はどうなんでしょうか？」

「推進系のトラブルみたいです。艦を止めての処置が必要とのもので、自分が先行してこっちに。見立てですが、再始動できるまで四時間ほどと聞いています」

『そうですか。一機での行軍は大変だったでしょう？ お疲れ様でした』

大変でも、疲れてもいないですよ別に。一人にしてもらえて感謝しているくらいです。

頭の中でそう言ってみる。

それでも、丸メガネの彼女の弾けるような笑顔が、妙に眩しかった。

後で聞いた話だけれど、隊長と先輩とでこんなやりとりがあったらしい。

いや、本当にむずがゆい話のただけけれど。

「そろそろ向こうさんと合流したところですかね、ラストイ」先輩がチラリと腕時計を見る。前の前の彼女からのプレゼントと言っていた一品だ。

「時間的にはそろそろかしらね。慣れないカスタムタイプに乗せたけど、ちゃんと乗りこなしているかしら、あの子」

「その点は大丈夫でしょう。あいつの操縦技術というか、順応性の高さは規格外ですから」先輩は手にしたコーヒを口に運びながら、もつとも、と続けた。「もつとも、コクピットに残る隊長の残り香に魅了されて、操縦どころじゃなくなっているかもしれないけどね」

「あなたじゃあるまいし」隊長が目を細める。

「俺なら、隊長が座っていたシートに腰を下ろすだけで鼻血ものですよ」

「そういうところがあの子に移らないように心がけてね、リップせ・ん・ぱ・い」隊長がマグカップ越しにニツコリと微笑む。

「あいつは真面目ですからね」先輩は照れたように天井を見上げる。「いや、真面目とは少し違うか。なんていうか。純粹というか。ウオースでのこと、結構凹んでいるみたいだし」

「見るからに落ち込んでいたものね。最後が余計だっただけで、新人離れた成果だったというのに」隊長はゆっくりと指を折りながら続ける。「砲台と装甲車を併せて七機撃墜よ。士官学校時代の評判そのまま。いいえ、それ以上の活躍なのに」

「優秀なだけにもどかしいんだと思いますよ。普通の新人なら最初はビビッて何もできないか、舐めてかかって痛い目を見るか。大体どっちかでしょ？」

「そうね。私は後者だった。リップはこれ以上ないくらいに前者ね」先輩がこれ以上ないほどの苦笑いを浮かべる。

「でも、あの子は違った。あの子は最初の実戦を難なくこなしてしまった。その後も、小さな失敗はあっても致命的なミスはしなかった」

——小さな失敗の一つが、発進を失敗してずっとこけたことなのは聞くまでもない。

「自分はやれる。いつまでも隊長たちの後ろを付いて回るのはゴメンだ。俺はもつともつと強くなる。あいつはそう思っているんでしょう。そこへ来て、自分の不注意が原因で隊長に迷惑をかけた。機

体は戦闘不能、下手したら自分が死んでいたかもしれない。隊長に味方殺しのレッテルを貼り付けることになったかもしれない。

「誰だって最初は経験がないのだから、無理して背伸びをしなくてもいいのに。それとも、そんなに頼りにならないのかしら、私たちううん、私って」隊長は俯いてそう言う。

「違うと思いますよ。あいつの場合はね。もっと別の理由ですよ」
「別の理由？」

「いや、深い意味はないですけどね。勝手な想像です」先輩がコーヒを一気に飲み干す。「ともかく、未来のエースには頑張ってもらわないと」

そうね、と微笑みながら隊長は大きく背伸びをした。

「そういえば、なんであいつ一人を先に？ それも量産型じゃなくて、わざわざ隊長のカスタムタイプに乗せて。さっき大丈夫だろうとは言いましたけど、わざわざ乗り慣れない機体を使わせなくても」
「そのほうが気分転換になるかと思って。ここにいたら優しい先輩にちよっかいを出されて、落ち着いて考えることもできないでしょうし」

隊長の上目づかいに、参ったなあ先輩は頭をかいた。

「過保護すぎると思う？」

「隊長に過保護にされるなんて、幸せな奴ですよ。俺もそんな風に優しく指導してもらいたかったなあ」

「あなたのことはイラーノに任せっきりだったものね。なんだったら、特別に訓練メニューのスペシャルバージョンをプレゼントしてあげましょうか？」

「——優しい先輩に恵まれて、俺は幸せ者ですよ」

二人の笑い声が静かに広がった。

俺は隊長からの借り物であるカスタムタイプを見上げていた。
隊長の判断と技量に命を救われたけれど、一歩間違えば死んでいた

かもしれない。

ランドホエールに向かう道中はずっと、そんなことばかり考えていた。

「あれこれ考えるのは止めて、反省して次に活かせばいい」そんな風に割り切って考えることができれば楽になれるのは分かる。

目の前のこと任務を疎かにするようじゃ話にならない、か。そうだよな。

せつかく一人になれる時間をもらったんだ、今は無理やりにそう思うことにしよう。

でも、あいつと出会ったとしたら。今、目の前にあいつが現れたら

俺は、どうするんだ？

不意に肩を叩かれて、びつくりして振り返る。

「ようこそ、ランドホエールへ。天井には何か珍しいものでもあったかい？」白衣に身を包んだ金髪の男の人が立っていた。「はじめまして。僕はここの代表者でエルリック・ハーミットというんだ。

道中、何も無かったかい？」

「自分は陸軍第十四機動部隊所属のラスティ・ウィン准尉です。着艦の許可を頂きありがとうございます。今回は……」

「ああ、いいいいいよ。ここは軍艦じゃなくて民間の輸送艦なんだからね。堅苦しい挨拶はなしで行こう、ラスティ君」渋い表情を浮かべた白衣のエルリックさんは、顔の前で手をひらひらさせる。「君と僕の間に関係なんてないのさ。本来なら護衛をしてもらう立場の僕たちが頭を下げるべきだろう？」

「——了解しました」軽く敬礼をしてそう答える。

先輩なら「じゃ、よろしく頼みますよ」と軽く手でも挙げるのだろうけど。

「軍人さんは大変だね。いちいち堅苦しくないかい？」

苦笑いを浮かべたままのエルリックさんの向こうから、女性が駆け

寄ってくる。ブロンドのお下げに丸メガネ。先ほどのオペレータの女性だった。

「兄さんも来ていたのね。あ、ラステイ准尉、さっきはどうも」エリリックさんを「兄さん」と呼んだその人は、俺に対して軽く会釈をする。

「やあ、ルーシエット。カスタムタイプ見たさに飛んできたのかい？」

「メカニックとして当然じゃない。国防軍純正のカスタムタイプを間近で見る機会なんてそうそうあるものじゃないわ」ルーシエットと呼ばれたその人は、目を輝かせながら俺のほうを振り返る。「ところで、これはラステイ准尉の機体なの？ カスタムタイプのパイロットにしては若過ぎるような気がするけれど……」

あっけらかんとした口調で質問を投げかけたところで、彼女は自分が名乗っていないことに気がついたようだった。

「あ、ごめんなさいね。あたしはルーシエット。そこにいるエルリックの妹で、メカニックをやっているの。よろしくね」左目でウィングをする。「それで、さっきの話だけど、これはあなたの機体？」

俺はカスタムタイプが隊長からの借り物であることを説明した。

「なるほどね。これが有名な『銀色の剣士』が乗る機体なわけか」ほおー、とか、へえー、とか言いながら彼女は舐め回すように機体を眺める。

何が「ほお」で何が「へえ」なのか、俺にはさっぱり分からない。「ということは、初めて乗ったカスタムタイプをいきなり乗りこなしたの？」ルーシエットさんはメガネを持ち上げて俺を見る。「パツと見た感じだけど、左右のランサーの設定も違うみたいだし、扱いづらそうな機体に見えるけどな」

「確かに、量産型とは重心の位置やランサーの設定は随分違いますね。発進してしばらくは機体が左へ左へと流れるから少し苦労しました。それを外から見ただけで分かるなんて、さすがはメカニックですね」

「まあね。プロですから」得意げにルーシェットさんは腰に手を当てた。「でも、あなたも相当なものだと思うわよ。他の人、ましてはあの『銀色の剣士』向けにカスタマイズされた機体をパツと乗りこなすなんて、そうそうできる芸当じゃないと思うわ」

そんなものなのだろうか？ まあ、言われて悪い気はしないけれど。

「そうだ。兄さん、彼にも試してもらおうと思うのだけどいいわよね？」

「そうだね。彼の部隊との合流まではしばらくかかりそうだし、いいんじゃないか？」

「オーケイ。来て早々で申し訳ないけど、少し付き合ってもらえないかなラスティ准尉？」

「別に構いませんけど、一体何を？」

「そうね。D・Fの新型制御システムのテストつてところかしらルーシェットさんが顎に手を当てて答える。「まだ試作の段階なんだけど、データ採りに協力してもらいたくて」

「さあ、座つて」半ば強引にその新型制御システムのシミュレータへと座らされる。

シミュレータは普段乗り慣れたコクピットよりも古い型のようにだった。

「インターフェースが一世代前なのは気にしないで。実際に操縦してもらおうわけじゃないしね。あと、ぶら下がっているヘッドギアはちゃんと装着してね、ラスティ君」

兄妹揃って最初から「君付け」か。まあいいけど。

ヘッドギアはズシリと重く、それなりの負担が首にかかった。

「ラスティ君、聞こえる？」シミュレータの扉を閉めて外に出たルーシェットさんが、隣に置かれた装置の前に腰を下ろし、盛んにキーボードを叩きながら話しかけてくる。

「聞こえてますよ。このヘッドギア、ずっと付けていたら首が凝り

そうなんですけど……」

「少しの間だけだから我慢してね。それじゃ、システムを起動するから。何も無いと思うけれど、変化があったら教えて」

計器類に光が灯る。メインモニターには起動プロセスらしきものが表示された。

「――SALAMANDER？ 新システムの名前か？」

見慣れない文字列が流れるのを見ていたそのとき、突然の衝撃が俺の頭に襲い掛かる。脳天に電極を突き刺されて、直接電流を流されるかのような衝撃が。

何が、「何も無い」だよ！ どんなシステムなんだこれ？

これじゃただの拷問じゃないか……

ランドドルフィンの推進系のトラブルは、思ったよりも深刻だったらしく、予定の四時間よりもさらに二時間遅れの合流となった。しかも、完全に直すためには一度ドックに入れてオーバーホールをする必要があるとのことらしい。

エルリックさんの好意もあって、俺たち十四機動部隊の全員がランドホエールへ乗艦させてもらっていた。乗員がいなくなったランドドルフィン、子クジラのようにランドホエールに牽引されて後ろについて泳いでいる。

格納庫ではD・F・が横並びになってメンテナンスを受けていた。

「うちには試作機とか、テスト用の古い機体しかないからね。こうやって現役の機体が並ぶと壮観だねえ。そう思わない、隊長さん？」
エルリックさんが感嘆の声を上げると、隣にいるルーシエットさんも大げさに頷きながら目を輝かせた。

「いつも見ていますからなんとも…… それより、ランドドルフィンを牽引していただいている上に、機体のチェックまでしていただいて。ありがとうございます、エルリック代表」

隊長が頭を下げる。

「そんなこと気にする必要はないよ隊長さん。わざわざ足を運んで

もらったのだから、このくらいのお返しは当然だろう?」

「そう言っていただけで幸いです。このまま何事もなくフラムに到着すればいいのですけど」

「何もありません。護衛だつてこちらから頼んだ話でもないのだからね」エルリックさんは白衣のポケットに手をつ込んだまま続ける。「そちらさんはフラムに到着後は休暇だそうで。お堅い軍にしては、こういう風の吹き回しなんだろうね?」

「どうなのでしょう。まあ、正確には待機なので任務の一環なんですけど――隊員たちは舞い上がってしまっていて、隊長としては困りものです」

柔らかな笑みを浮かべるアドリアナ隊長。全く困っているようには見えない。

「フラムで休暇だなんて羨ましいわ。兄さん、私たちも休みましようよ?」

ルーシエットさんが両手を握り合わせ、すがるような目で兄を見つめる。

「そうですね、お兄さん。かのリゾート都市フラムが待っているとこのに、仕事に忙殺されるだなんて、妹さんが不憫すぎます」どこからともなくリップ先輩が現れた。「この僕に一日頂ければ、必ずやあなを満足させて差し上げましょう」できそこないのミュージカルのような動きでルーシエットさんの前へとひざまずいた。

「えつと……せつかくのお誘いなのに申し訳ないのですが……」ルーシエットさんの眉間に見る見るうちにしわが寄っていく。

「なんていうことだ。白い砂浜と真夏の香りが貴女を待っているというのに」ミュージカルはまだ続く。「それでは隊長、ぜひ私目とご一緒に……」

「あら。休日返上で砂浜を走りこみでもするのかしら、リップ君?」カクツと肩を落とし、大きくため息をついた後、リップ先輩はすごすごと退散していった。

「えつと……、今の彼は?」エルリックさんが目をパチクリとさせ

る。

「舞い上がりすぎておかしくなった哀れな部下です。気にしないでください」

「おい、ラスティ！」

リップ先輩とは半年の付き合いでしかない。それでも、毎日顔を合わせていれば、一緒に行動していれば、呼ばれるときの口調で先輩のテンションくらいならば大体分かる。

「今晚付き合え、潰れるまで飲み倒すぞ」

今回は「問答無用モード」だな。これは手強い。

「一応聞きますけど、拒否権はないんですよね？」

先輩の表情が言っている。「もちろんだ」と。

「——分かりましたよ。その代わり、酔いつぶれても知りませんからね」フラムに着いたら飲みに行く予定だったんだ。少し早いけど丁度いいか。

「よろしい、フラム到着の前祝いだ。朝まで飲むぞ！」先輩が拳を突き上げる。

「ほお。任務中に飲酒、それも朝までとはいいい度胸だな、リップ君？」

「い、いつの間に……」

いつも思う。イラーノ副隊長のタイミングは絶妙だ。

第二章 ラスティとフラムの出逢い く紅い宝石の街にてく

第二章 ラスティとフラムの出逢い く紅い宝石の街にてく

あれ？

どうやら、意識が飛んでいたらしい。居眠りをしていたと言っべきだろうか。

上映は……中断しているようだ。観客の居眠り合わせて上映を止めてくれるとは、良心的な映画館だ。いや、観客は一人だけなのだから当然なのか。

でなければ、意地でも最後まで見てもらうという意味表示なのか。

「気がついたみたいだナ。気分はどうダ？」ヴォル・ポー二はサッカーボールらしく床をコロコロと転がっていた。「お前さんがあっちに行っている間二、三人目が来たゾ」

あっち？ 夢の中で夢の世界に行く、ということだろうか。

別にどっちでもいいか。それよりも。

「三人目というのは？」

僕は部屋の中を見渡す。サッカーボールの次はラグビーボールだろうか。いや、意表についてテニスのラケットかもしれない。そんな僕の予想の、文字通り斜め上からそいつは覆いかぶさってきた。

「ナン！」

ネコだ。全身真っ白のネコ。

そいつは僕の右肩へとダイブした後、イスを伝って床へと降り、毛づくろいを始めた。

「こいつが、三人目？」サッカーボールの次はネコ。この取り合わせを「三人」と数えるヒトがどれだけいるのだろう。

シロネコが僕のほうをギロリと見つめる。「オイラの名前はキャット・シーフ。『こいつ』じゃないナン」シロネコは、さも当然のごとくヒトの言葉を話した。「待ちくたびれたナン。待ってる間に

『フラム』について勉強したから、話してあげるナン」

フラムか。たしかラスティたちは、そこに向かうのだったよな――

リゾート都市フラム

母なる海がそこにある。山はいつでも待っている。

動物たちは猛り、轟く。植物たちは踊り、広がる。

青と緑の大自然が恵む、生き物たちの楽園フラム。

遊園地には子供たちが、森林公園には家族連れが。

映画館には恋人たちが、闇夜の街には大人たちが。

リムリア中の娯楽と夢と歓喜が集まる、夕暮れに輝く紅い宝石の街。

「それがフラムなんだナン」シロネコ、キャット・シーフが得意げにまくし立てる。

パンフレットそのままなのだろうが、突っ込むのはやめておく。相手はネコだ。

「フラムのこと、分かったかナン？」

「――大体分かったニャン」

「それは良かったナン」どうやらネコのくせに「ニャン」とは言わないようだ。

「続きを始めるゾ」待ちかねたようにヴォル・ポーニが口を開く。

いや、どう考えても口ではないのだが。

フラムに到着したその足で、俺とリップ先輩は歓楽街に強襲をかけた。

イラーノ副隊長にお預けを食らったことも手伝ってか、先輩の飲みっぷりはそれはもう凄まじかった。酔いが回ってくると普段よりも饒舌になり、喋りだしたら止まらないのが大体のパターンなのだが、今回の独演会は軽く二時間を越えていた。

軍に入ってから武勇伝に始まり、副隊長への愚痴、俺への小言、ナンパの手ほどきから成功したときの話などをローテーションしながら延々と喋り続ける。二年前の作戦中に隊長のピンチを救った話のときの表情は誇らしいし、昨夏のナンパに関する話題の際は渋い顔をする。声をかけた女の子が、実は軍の諜報部員だったというオチがつくからだ。

新人である、後輩である俺に対して素の姿をさらけ出してくれる。そんな人だからこそ、俺は先輩を心の底から信頼することが出来た。俺が軍に入った動機を、五年前の事件のことを、口を滑らしてしまったとはいえ、ただ一人先輩にだけは話すことができた。

仇討ちのために軍に入ったことを、先輩は咎めも褒めもしなかったけれど。

——結局、朝の四時を回ったあたりで先輩は完全に酔いつぶれてしまった。つぶれた先輩を宿舍まで担いで帰るのも、いつものパターンだった。

時計の針は、午前十一時を少し回っていた。

「いつものことだけど、ペースを考えずに飲むから、立ち上がることもできなくなっちゃうんですよ。連れて帰るこっちの身にもなつて下さいね」

目が覚めた俺は、隣のベッドで寝息を立てる先輩に声をかけて宿舍を後にする。

目をこらせば底が透けて見えそうな青空に覆われたフラムの街。大空の海は、水平線の彼方で大地の海と混ざりあっているようにも見える。

冷房の聞いた宿舍でゴロゴロしていても良かった。でも、せっかく、こないない天気の日を寝て潰すのはもったいない。せっかくフラムに来たのだから。

酔い覚ましがてら街を歩くことにした。宿舍の裏を流れるの川沿いの道は森林公園へと続くらしい。汗をかいて新鮮な空気を吸えば気

分も良くなるだろう。

ズスズキと痛む頭をさすりながら、俺は歩き始める。

森林公園へと続く道は静かだった。

水のぶつかる音が二日酔いの頭をゆるりと撫でる。ジョギングをする若夫婦、犬の散歩を楽しむお爺さん。大勢の観光客が濁流のように溢れる表通りと比べると、時間の流れのなんとゆっくりとしたことだろう。

いい雰囲気だな。心からそう思う。

ウォースで見上げた空も同じように青かったつけ。

隊長に励まされて、先輩に相談して。一人になる時間ももらえだし、お酒も飲んで心の整理はつけたつもりだったけれど、失敗の記憶はなかなか消えない。

向こうから、何かがユラユラと飛んでくる。

一体なんだろう。鳥か、それとも蝶か。

風の流れに身を委ねてゆつたりと舞い踊るそれは、レモン色をした天使の羽衣か。

魅入られるように右手を伸ばす。レモン色の天使は、悪戯な笑みを浮かべてプイとそっぽを向く。突然の横風が通り抜け、川べりに並ぶ街路樹たちがいつせいにざわめく。

黄色いそれは、瞬く間に川のほうへと飛び去っていった。

何がレモン色の天使だよ…… まだまだ酔いが残っているらしい。

「あの……」

背後で聞こえた甘い声に驚いた俺は、これでもかというほどの速さで後ろを振り返る。

「スカーフ、黄色いスカーフ、飛んでこなかった？」

その女の子は肩で息をしていた。俺よりも少し年下くらいだろうか。頬に滴る汗を拭い、一つ大きく息を吐きだす。鮮やかな空色のワン

ピースが、しつとりと汗に濡れていた。

「もしかして、あれのこと？」天使から人魚へと姿を変え、川下のほうへとゆっくりと泳ぎ始めた羽衣を指差す。いや、何を言っているんだか。

「ああ、流れて行っちゃう」女の子は転落防止用の柵から身を乗り出す。

「ああ、スカーフだったのか……」うつむいた女の子をぼんやりと眺める。

彼女の横顔。黒に近い深緑色の前髪が汗で額に張り付いている。どのくらい走ってきたのだから。ワンピースの裾からスラリと伸びる太ももは、輝く汗粒でほんの少し眩しかった。

「買ったばかりだったのに」彼女は膝を抱えてしゃがみ込む。「シヨックだなあ……」

きつと、迷った末に選んだものに違いない。

店から出るなり封を切って、歩きながら結ばうとしたに違いない。

突然の風で飛ばされてしまったに違いない。

ブランド物でそれなりに値が張るに違いない。

そうでなければこんなに汗だくになってまで追いかけてはこないだろう。

二日酔いの頭でも、こういう想像は次々と出てくるものなんだな。

「あの、聞こえてますか？　おい」女の子がこちらを見上げ、手を振っている。「もしもーし」

「え、あ、ごめん。なんだっけ？」彼女とまともに目が合う。

「急にボーっとするんだもん、びっくりしちゃった」

何を言うか考えようとすると、頭痛が襲い掛かってきた。くだらないことに頭を回したからだな、きつと。

「大丈夫？」女の子は心配そうな、それでいて不思議そうな顔で俺を見つめる。

「——ただの二日酔い。大丈夫だよ」軽く頭を振ってみると、案の定というか、ミシミシと鈍い痛みが走った。「酔い覚ましに歩いて

いたところなんだ。そしたら、さっきの、えっとスカーフが飛んできて、気づいたら君がそこにいて——」

「気づいたらそこにいた、か」女の子はふわりと背を向けた。「『君を待っていたんだ』とか言ってはくれないんだ？」上半身だけ振り向いて俺を指差す女の子。

「は？」いや、そのポーズは可愛いしいけれど。「そんなこと、言うわけがないだろう」

「ふふふっ。冗談なのに。もしかして怒った？」

「別に怒ってなんかないさ」

先輩なら、言いかねないな。そういう台詞を、それもサラッと。

「何か忘れたいことでもあったんでしょ」女の子はこちらに一步步づく。「それで、お酒をたくさん飲んだ。——違う？」

「だとしたらどうだっていうのさ？」そもそも、なんだこの馴れ馴れしい態度は？」

「別に」女の子の澄んだ紅茶色の瞳が、俺を見つめる。

「そりゃ、色々あるけど」悪い気はしないけれど。

「色々か——」女の子は目を閉じる。「『色々』って便利な言葉だよね」

「は？」

「わたしも色々あったけど、スカーフのことは諦めることにしようかな」屈託の無い笑みを浮かべてクルリと一回転する女の子。「それで、今は何をしているの？」

「酔い覚ましに散歩をしているんだって。さっき言っただろ」森林公園まで行くつもりだ、と付け加える。

「そうだったね」女の子は首を傾げる。「ねえ、わたしも一緒に行つていいかな？」

「なんでそんなことを聞くんだよ？」なんでそんな物言いなんだよ、俺。

先輩ならきつと「一緒に行くかい？」と先に聞くに違いない。

「理由を聞くんだよ？」彼女は指を三本突き出す。「——一つはここ

がどこか分からなくなっちゃったから。二つ目は、今日は一日暇だから」

「——なるほど、道案内兼暇つぶし係ってわけか」

「三つ目もあるのに」女の子はプツと頬を膨らます。

「ごめんごめん。で、三つ目は？」

「道案内係の人には教えない」

覆水盆に返らず。後の祭り。猿も木から落ちる。後悔先に立たず。違うのが一つ混ざったけれど気にしない。俺なんて所詮は「道案内係」だ。

森林公園まではゆっくり歩いて三十分ほどだった。

噴水の側に立つ時計台の針が、十二時を指そうとしている。飛び立とうとする渡り鳥の姿をあしらった時計台だ。

空の一番高いところへと近づく太陽の日差しが、木々の隙間から全身を串刺しにしてくる。

汗をかくつもりで歩いてきた俺はともかく、彼女の足取りは重そうだった。

「あそこの喫茶店に入ろうか？」

「Yellow Butterfly」と書かれた看板を指差す。

「途中にも二つお店あったよ。なんでもっと早く言ってくれないかなあ？」

彼女は煩わしそうに、ワンピースの胸元をパタパタとさせていた。

「ごめんごめん。ご馳走するから許してくれよ、な？」

「デザートも付けてくれたら許してあげる」そう言って彼女は人差し指を立てる。「それじゃ、行こう」と俺の手を引いて駆け出した。さっきまでのへばった感じは何だったんだよ。可愛いからいいけど——

「いらつしやいませ。お二人様ですね？」胸の部分が黄色い蝶の形をしたエプロンのウェイトレスが満点の笑顔で出迎える。「おタバコは吸われますか？」

「吸いません。あ、席はあその窓際がいいな」

「かしこまりました。二名様、禁煙席にご案内します」掛け声とともに、店内にいる他の店員から相槌が入る。「いらっしやいませ、ごゆっくりどうぞ」

案内されるままに窓際の席へと座る。おしぼりとメニューを置いたウェイトレスのお姉さんは「お決まりになりましたらお呼び下さい」と言い残して別のテーブルに行ってしまった。

「念のために聞くけど、タバコ吸わない人だよな？」

「え、ああ」確かに俺はタバコを吸わない人間だ。今だって、禁煙席に座ったこと自体には特に問題はない。でも、確認もせずに禁煙席って決めてしまうのはどうなのだろう。

「ちよっとお酒臭いけど、タバコの臭いがしなかったから吸わない人だと思ったの。あと、コーヒーは飲む人だよな。アイスでいい？」
彼女は、右手のおしぼりで首筋を拭いながら、左手でメニューをめくっている。

「かまわないよ。サンドイッチのセットで」軽めのメニューを指差す。

「分かった。サラダも付くけどいいんだよね？」そこまで言うとな彼女は、とてつもなく重大なことを思い出したように「ああ！」と声を上げた。

「どうかした？」

「肝心なこと、忘れてた」

「肝心なこと？」なんだろう。何か忘れていたっけ？

「うん、お互いの名前。というか自己紹介」

「言われてみたら」歩いている間もあれこれ話してはいたのだが、お互い名乗らないままだった。大幅減点だな、これは。

「俺はラステイ。ラステイ＝ウイン。見ての通り二日酔いの道案内係」

「わたしはニエル。よろしくね、ラステイ」口元を押さえながら彼女、ニエルは深緑の前髪を撫でる。そして目元を緩ませる。「あ、

店員さん。注文お願いします」

メニューを指差すニエルの横顔。正面から見ると、斜めから見ると、たはつがさらに可愛らしく見えるのは気のせいではないはずだ。

お腹を空かせていたのだろう。彼女はペロツと舌を出し、パスタセツトを注文した。

会話は本当にとりよめのないもので、好きな俳優の話に始まり、食べ物好き嫌いからお互いの年齢クイズへと続いた。その間、常にニエルはニコニコしていた。スカーフのことを「諦めた」と言う前から、彼女は笑顔を絶やしていない。最初は馴れ馴れしい女だと思っただけ、こぼれるような笑顔はがそんな想いをとつくの昔に蒸発させていた。

後姿などは十九歳にしては大人びた雰囲気をしているけれど、表情のせいもあり年齢よりも幼く見える。そう言うとき「結局どっちなの？」と詰め寄られ、「わたしは、ラステイはもつと上だと思った」と言われた。

「ってことは、歳よりも老けて見えるってこと？」

「違うよ。大人っぽいつていうこと。落ち着いて見えるって言い方でもいいかな」

「落ち着いている、ねえ……」隊の中では自分が最年少で新人だから「落ち着いている」と言われてもピンと来ない。どちらかと言えば「落ち着け」のほうが言われ慣れてるし。

喫茶店Yellow Butterflyに入ってから一時間。デザートのムースババロアを前に、ニエルは幸せそのものの笑顔を爆発させている。

何かよっぽど嬉しいことでもあったのだろうか。俺と出会えたからかも、と一瞬思い、すぐに取り消す。甘いものを前にした女の子はみんな子猫でしたっけ、先輩。

「じゃあ次、どこに行こうか？」

「どこかに行く気満々なわけだ」

「今日は暇だつて、言つたじゃない」

ああ、言っていた。確かに言っていた。どうせ俺も暇だし、暇人同士デートとしゃれ込もうじゃないか。しかも、向こうから誘っているんだから、これは立派な逆ナンパ成立ですよ。しかもこんな可愛らしい女の子と――

「またボーっつとしてるよ。今度も二日酔いの頭痛？」

「――ああ、今のはちよつと考えごとさ」

「あ、もしかして彼女のことだつたり？」

「どうだかな」いや、どうもこうもないだろうに。

「そっか。ラスティは彼女いないんだ。いてもおかしくないと思つただけだね」

そう言われて、俺はしかめっ面をしたと思う。最初もそう、店に入つたときもそう。ニエルには全てを見透かされているような気がしたからだ。俺つてそんなに分かりやすい人間なのか、と自問自答したところで誰も答えてはくれないわけで。

「本当に大丈夫？ 調子悪いのだったら無理しないで」

「残りは半日酔い分くらいかな」

ニエルはクスリと笑いながら、最後の一口を名残惜しそうに口へと運んだ。

「これからだけど、映画でいいかな。遊園地とかだとしんどいでしょ？ 映画館ならゆっくり座れるし」

「かまわないけど、観たい映画でも？」

「まあね。それじゃ、ご馳走様」

ニエルはナプキンで口元を拭くと、席を立って化粧室へと向かう。そうだ。ご馳走するんだつたつけ。

そのころ、ようやく目を覚ましたリップ先輩は、隣のベッドで寝ていたはずの俺の姿を探して宿舍内をうろついていた。締め付けられるような頭痛に頭を抱えながら歩いていたところで、アドリアナ隊長と偶然出くわす。ゆつたりとした黒のロングスカートに、ノー

スリープのブラウス姿の隊長は、なにやら書類のようなものを小脇に抱えていた。

「ああ……隊長。ラスティのやつ、見かけませんでしたか？」

「部屋にいないのならどこかに出かけたんでしょう。その様子だと昨日は随分とはしゃいだみたいね」

「ええ……まあ。ついついテンションが上がっちゃって、二軒目で歌っていたところくらいまでは覚えているんですけどね……」先輩はこめかみを押さえながら言う。

「それで、自分が何かやらかしていないかを聞こうと思ったたら、ラスティは既にいなかった」

「体調不良の先輩をほったらかして、一人で遊びに行くなんてひどい後輩ですよ。……隊長もそう思いませんか？」

「ただの二日酔いじゃない。それに、泥酔したあなたを部屋まで運ぶ、先輩思いの後輩だと思うけど」

「ラスティがいい後輩なのは間違いないですよ。要領もいいし、向上心もある……」

「急に真面目な話？ どうしたの？」

先輩は、壁に寄りかかって選ぶように言葉を繋げる。

「正直ちよつと迷ってましてね…… あいつの真っ直ぐな想いをどうやって導くべきかと。あの純粹さは、お世辞にも軍人、パイロット向きの性格とは思えなくて」

「確かにそうかもしれないわね。でも、あの子が軍人の道を選んだ以上、その道を踏み外さないように導いてあげるのが私たちの役目でしょ」隊長が先輩のほうを「違う？」という目で見上げる。

「おっしゃるとおりで」先輩は、照れたようににはにかんだ。

「あの子はこれから、様々な経験していくことになるわ。自分から投げ出さない限りは否応なしにね。辛いこと、苦しいこと、乗り越えなければいけないこと—— あなたもそうだった」

昔の話ですけどね、と先輩は懐かしそうに遠くを見る。

「あの子を見ていると、昔の自分を思い出すの。危なっかしくて、

前しか見てなくて」隊長もまた、昔を思い起こして穏やかな表情を浮かべていた。「だからね、リップ。私からのお願い。これから、あの子の力になってあげてほしいの」

「……何を今さらって感じですよ、隊長。あいつの扱いは俺が一番分かっているつもりですから」大船に乗ったつもりでいてください、と言わんばかりに先輩は胸を叩いた。

「それはそうと、隊長はもう昼は済ませたんですか？ それとも今から？」

「ちょうど喫茶店に行こうとしていたところだけど、一緒に行く？ 今日中にまとめないといけない資料があるから手伝ってもらえると嬉しいわ。それが済んだら、明日の守備隊本部との打ち合わせ準備しないと。隊長って忙しいのよ」

エレベータホールに向けて二人は足を進める。

「いやあ、せっかくフラムにやってきたんだから楽しまないと損ですよ。今日の昼ご飯はどこにしようかなあ……」

隊長の苦笑いに背中を向けて、先輩はそそくさと宿舎を後にした。

その恋愛映画に主演していたのは、ニエルが好きだと話していた俳優だった。

内容はこんな感じだった……と思う。

戦場で再開した恋人同士は、何故か今は敵同士。それでも二人は襲いくる幾つもの困難を乗り越えて再び結ばれる。しかし二人の至福の日々は長く続かず、再び離れ離れになってしまふ。やがて戦争は終結し、二人は三度目の再会を果たすのだが、男は大切な仲間を、女は心と想い出を失っていた。男は自分のことを覚えていない女を守るために命をかけて戦う。だがそこに立ちはだかるのは……――

――続く。

こんな感じだったと思う、としたのには理由がある。のっけから話についていけずにチンプンカンプンだったのと、それ以上に睡魔と闘うのに必死だったからだ。

もつとも、ニエルにとっては期待通りの感涙ストーリーだったよう
で、映画館から出た彼女の目は真っ赤だった。

涙ぐむ彼女の愛おしさといったら、それはもう――

当然のごとく、彼女は内容をおぼろげにしか語れない俺に呆れ、非
難した。

言い訳ならできる。でも、それをしたところで女性は余計に気を悪
くするだけだ。

ひとしきり怒り終われば機嫌は直るもの。まあ、これも受け売りな
んだけど。

少しして、俺たちは映画館に隣接するショッピングモールを歩いて
いた。

映画の次は買い物。デート入門第一章という感じで、基本中の基本
コースだ。

帽子屋に立ち寄ると、ニエルは少し迷った顔をしながら二つを選び
レジへと向かう。

「似合いますか、ラストイ君？」

買ったばかりの白い帽子をかぶって、クルリと一回転するワンピース
スのニエル。

似合うよ、と言いながらも舞い上がるスカートが気になるのは男と
して仕方のないこと。

「今回は飛ばされる心配がないから一安心だな」とも付け加えた。

「建物の中にいるのだから、飛ばされるわけないでしょ」「彼女は口
をへの字にした。

「冗談だって」なだめながら一つ提案をしてみる。「せっかく色々
な店があるんだから、何か記念になるものでも買っていけない？」

あつという間に笑顔を取り戻したニエルが頷く。

俺は来る前に読んだフラムの観光案内を思い返す。予習しておけ、
というリップ先輩からの特命で目を通した一冊だ。

「確かこの近くにいい物を売っている店があったと思うんだよね……」

…」

頭の中の地図を頼りにモール内を進む。目指すアクセサリ屋は近くにあるはずだった。

「あれだな」俺が指差すと同時にニエルが小走りで飛び出していく。オシャレな店構えには女の子を引き付ける何かがあるだろう。

「赤いガラス玉を二つに割って、それぞれを加工するんだ」店内を覗き込むニエルに、観光案内に載っていた内容を伝える。「キーホルダーとか、イヤリング。ネックレスにもできるらしい。世界で一組だけのアクセサリさ」

「そうなんだ。世界で一組って、なんかいい感じだね」
「だろ」

運が良かったのか、客は俺たちだけだった。加工に使うガラス玉をニエルが選ぶ。

店員のおじさんに赤いガラス玉を渡し、ネックレスに加工してもらうようにお願いする。

イスに並んで座り、仕上がりを待っていると一組のカップルが入ってきた。腕を組んで幸せそうにガラス玉のケースを覗いている。

傍から見た俺たちも、カップルに見えるのだろうな。それがどうしたって言われたら、それまでだけだ。

十五分ほど経って、店員のおじさんは二つのネックレスを持って俺たちの前にやってきた。

俺が代金を払おうとすると、「これは二人のものだから、半分ずつ」と言ってニエルも財布を取り出す。

おじさんに「Happy」という言葉を貰った俺たちは、少し傾き始めた太陽を背にして並んで歩いていた。

太陽に向けて半分になったガラス玉を透かすニエル。ほんの少しだけ涼しくなった風に揺られて、背中まで伸びた髪の毛がふわりと揺れる。

「そういえば」ニエルが思い出したように呟く。「紅い宝石。ちゃ

んと見たことないな」

「ん？」

「夕暮れに輝く紅き宝石の街フラム。知っているでしょ？」

ああ、そのことか。俺は時計に目をやる。針は五時の少し手前を指していた。

「——今から行けばちょうどいいくらいだろうから、山の展望台まで行ってみようか」

ニエルは腰に手を当てて、少しだけ体を傾けて悪戯っぽく笑う。

「行ってみようか、じゃなくて『行こう』って言えばいいのに」

「そうだな。じゃ、行こう」

俺たちは、ショッピングモール入り口にあるバス停へと向かった。フラム市街を巡るバスは個性的で目を引くデザインをしている。俺たちの乗ったバスは黄色に青い水玉模様がペイントされた二階建てバスだった。屋根も座席もない二階は手すりだけが並ぶ展望スペースになっている。俺とニエルは、その一番後ろに立っていた。海から山へと続く道を一直線に進むバスを、海風が追い抜いていくほのかな潮の香りを含んだ風が、空色のワンピースの裾を舞い上げた。

きやつ、と悲鳴を上げたニエルが両手でスカートを押さえると、今度は帽子が浮き上がった。

「よつと」俺は飛ばされそうになった帽子を咄嗟に押さえる。「人の持ち物を一日に二回も盗もうだなんて、いたずらな風だな」

「ほんと、いたずらな風。後ろの人に見られちゃったかも」ニエルが頬を赤らめる。

「どうだかな」少なくとも俺からは見えなかったけど。

そうしてじゃれ合っているうちにバスは、目的の登山道入り口停留所に到着する。展望台への経路は二つ。徒歩とロープウェイ。目指す展望台は山の中腹にある。

俺たちは早足にロープウェイ乗り場へと向かった。

展望台方面行きのロープウェイ乗り場は閑散としていた。

普段はもつと混雑するのだが、今日は遊園地で大きなイベントがあつてそちらに人を奪われているんだよ、と係員の人は言っている。好都合とはこのことだ。

俺たちは十人乗りのロープウェイへと乗り込んだ。

中で四人家族が団欒のときを過ごしていた。メガネのお父さんと、パーマ頭のお母さん。それに九歳のお兄ちゃんと、五歳になる弟。幼い兄弟は、隣に座ったニエルの太ももをつついていて。パーマ頭のお母さんが「お姉ちゃんが困っているから止めなさい」と言うのを笑顔で制して、ニエルは子供たちと楽しそうに笑いあっている。ニエルの笑顔を見ながら、観光案内のあるページを思い出した。カップルで行きたいスポット第一位、フラム山上展望台。

太陽が刻一刻と赤みを増していく。

係りの人は、時間は大丈夫だから、と言っていたけれどやはり心配になる。ニエルも同じ気持ちなのだろう、子供たちと触れ合いながらも、外の様子を気にしている。

——やがてロープウェイは、山上展望台と書かれた駅へと滑り込む。「山上展望台へようこそ。足下に気をつけてお進み下さい」待ちかねていたかのように係の人は扉を開けながら明るくそう言った。

先にゴンドラから降りたニエルが幼い兄弟の手を取る。弟はほんの二十分そこそこの間ですっかりニエルに懐いてしまったようで「離れたくない」と彼女の膝にしがみ付いたまま動こうとしない。

「もつと遊んであげたいんだけど、ゴメンね」ニエルは弟の頭を撫でながらしゃがみ込む。そして目線を合わせると「君にはこれ」とかぶっていた白い帽子をそつと頭に乘せた。

「お兄ちゃんにはこつち」紙袋の中からもう一つの黒い帽子を取り出すと、兄の頭にも大事そうにそれをかぶせた。

「そんな気を使っていたかなくても」パーマ頭のお母さんがささず駆け寄る。「ほら二人とも、お姉ちゃんにそれを返して」さよ

なら』を言いなさい」

「いいんです」ニエルはお母さんを見て微笑む。「二人とも元気でね。お母さんを困らせたらダメだよ」

ニエルの言葉を聞いてか聞かずか、幼い兄弟は帽子を手に飛び跳ねていた。

両親に挨拶をしたニエルが俺のところによってくる。

「いいのか？」

何が、とニエルが聞き返してきたので、帽子のことだよ、と返す。

「うん」頷いたあと、少し間を空けて続ける。「子供には……あのくらいの男の子には、嘘のない笑顔でいてもらいたいから——」

「そっか」ニエルにも小さな弟がいるのかもしれない。弟は「嘘のない笑顔」を見せることができないのかもしれない。——考えすぎか。

「スカーフに、帽子が二つ。結局、なんにも残らなかったな」

「ほんと、これだけだね」胸元にぶら下がる、赤いガラス玉のネックレスを手取るニエル。

「そうだな」

そう言つて俺たちは、市街地を見下ろす。

水平線の彼方へ消えていく太陽が、お別れ前の最後の力でフラムの街を照らし出す。

この地方特有の力強い夕焼けが、街の色を染め始める。

夕暮れに輝く紅き宝石の街フラム。

居並ぶ白塗りの家々が、太陽の光を吸って燃えるような紅色に染まっていく。

網の目状の道路はアカマリンに、そこここに植えられた街路樹はエメラルドに。そして、立ち並ぶ家々はルビーのように紅い輝きを放つ。

国中の大富豪から宝石箱の全てを集めても遠く及ばない。

その光景に、俺もニエルもただただ目を奪われた。

「——った」

「え、何か言った？」ニエルのほうに視線を向ける。彼女は胸元のネックレスを、夕日を浴びて金色に輝くネックレスを握り締めて目を細めていた。

「良かった、って言ったんだよ……」

「そうだな。間に合って良かったよ。あと少し遅れていたら……」

「違うの。そうじゃない。そうじゃなくて……」

「そうじゃないんだったら？」

「……………」ニエルはネックレスから手を離す。「色々、かな？」

「色々か」便利な言葉だよな、と思う。

「楽しかった」夕日が水平線に交わり、宝石の輝きが絶頂に達する。

「最後に、最高の一日を過ごすことができて」

「最後？」それって、どういう。

「明日の夕方までには、行かないといけないから。今日がフラムでの最後の日だから」

「そっか」——太陽が沈んでゆく。

「最後なのか」——空に別れを告げながら、ゆっくりと。

ニエルが俺の服の裾をギュッと強く握った。

「わたし、忘れないから。この景色も、今日のことも。——ラストエのことも」

言葉が出なかった。

ニエルが口に行っているのは別れの言葉。さよならの挨拶。

それくらいは分かる。彼女は明日、この街から発つのだろう。そういえばフラム来た理由を聞いていない。学生なのかも聞いていない。家族のことも、住んでいる場所のことも。

恋人がいるのかも。

「色々」と話したはずなのに全然聞けていない。「色々」なんて大したことないじゃないか。

「終わっちゃったね」

街に散らばっていた宝石箱は片付けられてしまっていた。

「——ああ」

しつかりしろラスティ。景色なんていつでも見れる。明日でも来月でも、来年でも。

今は他にしないといけないことがあるはずだろ。

幾つもの言葉が出ては消え、消えては沸きあがり、消えていく。俺に愛想を尽かしたのか、太陽は水平線の向こうへと消えてしまった。

「ラスティ、ちょっと耳貸して」ニエルの吐息が耳たぶをほんのりと温める。

「今日は、ありがとう」ささやく声からはほんの少しの甘い香りがあった。

頬に柔らかい感触が残る――

「さあ、戻ろう!」

最高の笑顔と、少しの寂しさを携えてニエルはクルリと向きを変える。

俺は、先に行く彼女の背中を追いかけることしかできなかった。

下りのロープウェイは、二人きりだった。

みんな分かっている。少し待ってでも、家族だけの、恋人同士の時間を作ってあげようと。

「三つ目の理由、聞きたい?」外を向いたままニエルが言う。
なんのことも分からなかった。薄暗いゴンドラ内ではニエルの表情も分からない。

「一緒に行ってもいいかって聞いた理由の三つ目だよ」

「ああ。たしか、道案内係には教えてくれないんじゃないかな?」

「道を聞くだけなら、一緒に行こうなんて言わないよ」
俺は黙って続きの言葉を待った。期待が無かったといえば嘘になる。

「わたし、人を見る目には自信があるの」ニエルは姿勢を変えずに続ける。「だから、ラスティにはピンときたの。それが理由。――」

もしかして、期待した？」

なんていうか、その、見透かされてるな。

あつという間にロープウェイは終点にたどり着く。たどり着いてしまった。

「お別れだね」

「そうだな」

「ラストイは、いつまでフラムにいるの？」

「どうだろう」

「もう何日かは？」

「たぶん」

「そう、なんだ……」そのとき、初めて見せる寂しそうな顔のニエルが、そこにいた。

「今日は、ありがとうな」陳腐なお礼しか出てこない自分に嫌気がさす。

「うん。それじゃわたしは向こうだから」

「ああ」

「元気だね。それじゃ、またね——」ニエルまた、さっきまでと同じ笑顔を見せてくれた。「ほんとに、元気だね」

俺は軽く右手を上げる。ニエルの姿が見えなくなるまで、ずっと。彼女は何度も、何度も振り返っては、ニッコリと微笑んだ。

それはきつと、ありきたりの光景にしか見えないだろう。

また後で、また明日、また今度、またいつか。またね。

俺たちに「また」は、ないんだろうな。

ネックレスをポケットにしまう。俺は宿舎の近くへ向かうバスに乗り込んだ。

——あいつを、あの蒼き魔人を倒すまで、俺は立ち止まるわけにはいかない。

——だから、それまでは必要ないんだ。

「そう思わないと、やってられないよな。ほんとにさ——」

「ラストイは、なっていないな」僕は思わず声を上げる。

「ヘタレだナン。ヘタレだナン」シロネコのキャット・シーフは、意味不明な小躍りを披露している。その動きはネコのそれではない。「あと一押しで確実に落ちていただろうに。何をやっているんだか」「やってんだかナン」

何気にこのキャット・シーフ、ノリはいいのかもしれない。オトコとオンナを分かっているのかもしれない。言葉を喋るネコ、というのも悪いものではない。本気でそう思ってもいいのかもしれない。喋るサッカーボールに比べたら遥かに現実的な話だ。

ヒトの言葉を喋るサッカーボール、ヴォル・ポーニは、例によって僕たちの会話に合わせて映像をストップさせていた。実はこいつもいい奴なのかもしれない。

「――続きを始めるゾ。そろそろ出番が近づいてきているからナ」「出番だナン」

そういえば、さっきも出番がどうって言うていた。出番って何だ。思い返す。さっき出番といわれた直後、僕は何をしていた？

居眠りだ。そう、居眠りをしていた。

「違う、その前だ」そう、確か頭がムズムズとしたはずだ。それから気が遠くなって。次に気がついたときにはもう――

僕の考えなど歯牙にもかけず、上映は再会された。

ラストイが宿舎に帰ってきたところからだ。

宿舎に戻ったのは九時半を回ったころだった。

部屋の扉を開けると、リップ先輩がソファ―に寝転がってテレビを

観ていた。

「お早いお帰りだな、色男」先輩はテレビを見たまま面倒くさそうに言葉を並べた。

「色男？」

「話は後で聞いてやるから」そこで先輩は鼻水をすすする。「あと三十分待て。シャワーでも浴びてろ」バスルームを指差して、また鼻水をすすする。

「風邪でも引いたんですか？」そう言おうと思ったのだが、先輩の回りに転がるビールの空き缶を見て止めた。今握っているのを合わせるのと片手ではきかない本数だ。

「昨日あれだけ飲んだのに、また飲んでて平気なんですか？」

無反応—— よっぽど、映画に集中しているのだろう。

俺はバスルームへと足を運ぶ。

さっぱり洗い流そう。色々なことを。

髪を乾かしTシャツ姿で部屋に戻る。

無言の手招きが、俺を誘う。嫌な予感が濛々と立ち込める。

「もう一度聞きますけど、そんなに飲んで平気なんですか？」やばいと思ったときは先手を取る。これも先輩の教えの一つだ。——隊長の教えだったかも？

「ほお、さすがは色男。何よりもまずは相手を気遣うか。勉強になるねえ」予感が確信へと変わった瞬間だった。先輩の薄ら笑いが全てを物語っている。

「あんな可愛い子がほいほいと付いてくるわけだからなあ。いやあ、お見事」

血がダウンバーストを起こすことなんてあるのだろうか？

足下の栓が抜けたかのように、物凄い勢いで血の気が引いていく。

「——意味が分からないんですけど……」

リップ先生のお悩み診療所は二十四時間三六五日営業。

診察はリップ先生が納得するまでで、患者の都合は考慮されない。先生にアルコールが入っているときは、タチの悪さが百八十パーセントアップする。

「なあ、ラスティ。俺はお前にそんなこと教えたか？」

「——いいえ、教わっていません。」

「ゴールの前でパスもらって、キーパーもディフェンスもいない。さあ、どうする？」

「——シュートします。」

「ただで美味いご飯が食べられるのなら？」

「——ご馳走になります。」

「絶対に当たると分かっているクジがあつたら？」

「——もちろん、買います。」

「つまりはそういうことだ」あきれ果てた目で先輩は俺を軽侮する。「お前、自分がどれだけもつたいないことをしたのか、分かっているのか？」

「いや、もつたいないとかじゃなくて……」

「あんな可愛い女の子がもつたいないなら、お前のもつたいないは一体どこからなんだ？ ああ？ 言ってみるよ、ほら」

「いや、だから。そういう基準じゃなくて。二エルとはたまたま……」

そう、たまたま声をかけられて、一緒にご飯を食べて、映画を観て、買い物をして、展望台へ行っただけなのに。

なんでこの人は、偶然俺たちがバスに乗るところを見かけてるんだよ？

天性の嗅覚、野生の勘、神のお告げ、予言の書の力。人ならざるものの力が宿っているとしたかと思えない。

「逆ナンされて、一日一緒に行動して、拳句、キスまでされたのにそのまま帰ってきただあ？ 今すぐあの子に謝ってこい。せつかくのお膳立てをぶち壊してごめんなさい、謹んで今夜のお相手をさせていただきますって、土下座してこい」

そんなバカな……　そもそも、「さよなら」って言ってきたのは向こうだし。

「お前、接近戦が得意なんだろう？　模擬戦で俺や副隊長に勝ったこともあるよな？」

「ええ、まあ」

「D・F・での接近戦はお手の物だつていうのに、生身の女が相手だと途端にそのざまだ。弱気になったらやられるのは接近戦の基本だろ？」

「それは、そうですね」そんな関係ないでしょ、と言う暇も与えられない。

「私生活から攻めきれない奴が、戦場で勝てるわけがないだろう？」今日のリップ先生は相当にタチが悪い。更に五割増しといった感じだ。加えて、理屈はメチャクチャだけれど、心に深く突き刺さることばかりなのも厄介極まりない。

「と、まあ、ここでお前を悪く言うのは簡単なことだ。だがしかし、そこからは何も生まれない。ただただ、絶望と失望の螺旋階段を奈落の底に向けて駆け下りることにしかない」

「絶望と失望の螺旋階段……」そんな階段、絶対に降りたくない。

「だが、お前にはまだ希望が残されている。希望という名の灯火が、お前の未来を照らし出しているのだ！」

「希望という名の灯火……」そんな灯火があるのなら、すがってみたい。

「キーワードは夕方の港だ！　分かるな、ラスティ君？」

自分にはまるで理解できません、先生。

「情けない。俺は本当に情けないぞ。昼間に観た映画は何だったんだ？」

「何つて……　良く分からなかったけれど、恋愛ものの映画ですよ。いまいち話に付いて行けなかったし。それに眠くて……」

「だから、お前はヘタレなんだよ！」リップ先生は、たまらないといった感じに身を乗り出して力説する。「望まぬ別れを決意し、最

後の大陸横断船で旅立たんとするヒロインと、命がけで彼女を追う主人公。夕焼けが見下ろす中二人は、出航直前のタラップで運命の再開を果たす。抱きしめ合う二人の姿に俺の涙腺もリミットオーバーだ」

何を言っているんだ、この人は。

「いいか。主人公はお前なんだよ。運命の出会いを果たしたラストイとエリヌ。だがエリヌに残された時間はあと一日。翌日、彼女は遠く誰も知らない国へと旅立ってしまう」

エリヌじゃなくてニエルです。そう突っ込むと、「そんなことは大した問題ではない！」と一括されてしまう。よくないだろう。

「となると、お前たちの再会の場所は夕暮れの港しかない。彼女はきつと船に乗ってフラムから旅立つはずだ」

「だから、意味が分かりませんって」

「お前、あんな感動する映画の続編を観てきて、何も感じないのか？」

「続編？」

——ああ、続編だったのか。どうりでチンプンカンプンだったわけだ。

涙腺がリミットオーバー。つまり、先輩がさっき鼻水をすすっていたのは、泣いていたということか。まったく、心配して損した。

「案の定、ヘタレと言われているな」僕はキャット・シーフに同意を求める。当然「そうだな」という返事を期待してのものだった。ところがキャット・シーフからの返事は返ってこなかった。

ついさっきまで元気に跳ね回っていたのが嘘のように、イスの下に潜り込んで身じろぎしなかったシロネコ。丸くなったままピクリとも動かない。

「どうしたんだろう。急に眠ってしまったのかな？」

「いいの力、目を離してモ？」僕がキャット・シー不のことを心配しているのを、心配する様子もなくヴォル・ポーニは緩急の無い口調で言い放つ。

「今回は止めてくれないんだ」

「止める理由がないからナ。物語は進んでイル」。

「進めているのはそっちじゃないか」

ヴォル・ポーニに、僕の声が届いているのかは分からない。

翌日、午後四時三十分。俺は港で、彼女の姿を探していた。

探すふりをしていただけなのかもしれないし、本気で探していたのかもしれない。

確実なことは二つ。

俺は彼女に、ニエルに会ったとして、何をどうするか全く決められていないこと。

会わずに帰ったら、確実にリップ先輩にどやされるということ。

すがすがしいほど真っ青な空が広がっていた。岸壁に寝転んでみると、空が上に広がっているのか、広がる空を見下ろしているのか分からなくなる。

空に向けて手を伸ばし、ネックレスをかざす。半分になったガラス玉が金色に輝いた。

「先輩、うまくやっているかな」

先輩は一緒に来る気だった。野次馬、冷やかし、監視、経過観察。あの人のことだ、理由なんかこの三倍は適当に用意するだろう。副隊長には、俺たちが遊びに出るようにしか見えなかっただろう。事実、遊びに出ようとしていたわけだ。到着初日から深酒、翌日も遊び呆けていた俺とリップ先輩の姿を見るに耐えなかったのも分か

る。

大真面目なイラーノ副隊長は、急遽ミーティングを行うと言い始めた。

俺がそれを知ったのは先輩よりも一足先に宿舍の玄関をくぐったときだった。後ろを歩いていたはずの先輩が副隊長に呼び止められた。「ここにいたかりップ。これから部内ミーティングをするから、参加するようにな」

「これからですか？　ちょうど出かけようとしていたところで……」
「任務中に私的理由で外出する場合は、外出申請を出す必要があるのは知っているだろう。どうしても出かけるというのなら強制はないが」

「いや、そんなの書いたことないですけど……」先輩はたじろいだ。外出理由に「後輩の男女関係の行方を見届けるため」などと書けるはずはないだろう。

「どうする？」副隊長の視線が先輩を撃ち貫く。

「いや、あ……　分かりました、出ますよ。チャチャッと終わらせてくださいよ？」

「それはお前たち次第だな。それより、ラスティは一緒ではないのか？」

額に冷たいものが浮かぶ。副隊長が玄関の外を覗けばあっさりと見つかってしまう。

「さあ……　昼飯のときに見かけたつきりですね。部屋にはいなかったですよ」

「そうか。ウォースの件もあるし、彼にこそミーティングに出てもらいたいのだがな。こういう時間があるときにこそ思ったのだが――」

「見かけたら連れて行きますよ」

副隊長のミーティングになどつき合わされたら、あっという間に日が暮れてしまう。
待てよ。

そもそも、ミーティングは嫌がることなのか？ いるかどうか分からない女の子探しをすることのほうが大切なのか？ 俺にとっては。

先輩が、後ろに回した手で盛んに合図を送ってきている。さっさと行け、と。

「どうした、外になにかあるのか？」

先輩の手首の動きに気付いた副隊長が、外の様子を窺おうとする。

「そうだ副隊長！ 実はですね、以前から温めていたフォーメーション案がありまして」 思い出したかのように先輩は声のトーンを上げる。「是非ご意見を頂きたいのですが！」

「ほう、それは楽しみだ。ならば尚のことラストイも呼ばないといかな」

「それがですね、ラストイ抜きでのフォーメーション案なんですよ。あれでも、あいつはまだ新人でしょ。新人ありきでのフォーメーションばかりだと、いざというときに綻びが出るかもしれないじゃないですか。かといって、自分がいない場合の話を目の前でされて疎外感を持たれるのも嫌でしょ？」

「確かにそうだな。なんだかんだでちゃんと考えているじゃないか」「でしょ？ ラステイ抜きでやつちまいましよう。そういえば、隊長は？」

「隊長はフラム守備隊の本部で打ち合わせ中だ。ちなみに、私も夕方には事務手続きでランドホエールに行くことになっている。あまり長くは付き合えない」

「だったら、わざわざミーティングなんかやらなくても……」

「何か言ったか？」

「な、何でもないですって。それじゃ、さっさとミーティングルームへ、ほら」

後ろ手で親指を立てながら先輩は、宿舎の奥へとフェードアウトしていった。

グッドラックってか。

フラムの遙か北に横たわる黒い山脈、ヨルズン。

うつそうとした木々の生い茂る獣道を、青いバイクが猛スピードで駆け登る。断崖絶壁を苦もなく跳ね上がるカモシカのように。

悪路の中驚くべきことに、ドライバーは片手をハンドルから離し耳元へと添えていた。

「ホワイトです」感情の欠片もない棒読みでドライバーは携帯電話に語りかける。

『ミッション開始三十分前だぞ。どこをほつつき歩いている』

「あと十五分で、戻ります。準備は予定通りに――」

風に流れる後ろ髪。ライダースーツ越しに浮かぶ柔らかな身体の輪郭は女性のものであった。

『当然だ。お前の都合で遅れることなど許されない。分かっているなホワイト』

「分かっています」上下動のない返事をし、ホワイトは携帯電話を胸ポケットへと収める。

唸りを上げるエンジン音。

驚いた鳥たちが、枝を離れ一斉に空へと舞い上がった。

山中に不似合いな大型輸送車の脇に青いバイクが滑り込んだのは、十七分後だった。

「遅いぞホワイト。オーランド博士が待ちかねている」ガラガラ声の男がホワイトを出迎える。

無言のまま、男とは目を合わせようとせずにはホワイトは輸送車に入る。薄暗い室内で白衣の男が彼女を待っていた。ヘルメットを脱いだホワイトは、オーランド博士の前に立つ。

「心配したよ、ホワイト」その口調には、微塵の心配も含まれてはいない。

吐き出されたのは心配ではなく、無関心。

「フラムの街はどうだった？」オーランドはそう続ける。

「よかったです」後ろでくくった髪を揺らしながら、他人事のようにホワイトが答える。

「そうか」オーランドもまた、彼女の答えに興味は無い様子だった。
「改めて聞くまでもないだろうが、ミッションの内容は分かっているな？」

「はい」ホワイトは短く口だけで答える。

「フラムへはゆつくりと接近すればいい。ゆつくりと、君の存在をじっくりと見せ付けながらだ。接近に気付いた守備隊が応戦をしてくるだろう」守備隊などどうでもいいが、とオーランドが続ける。

「守備隊などどうでもいいが、奴を誘い出すきっかけにはなるだろう。適当にかわいがってやればいい」

ホワイトはただただ黙って、そこに立っている。血が通った人間なのか、精巧に造られた人形なのか分からないほどに、彼女には人間味がなかった。

「奴は必ず出てくる。それが例え不完全な状態であってもだ」オーランドの表情からは自信が滲み出していた。「適合したパイロットのいない『セイラム』など恐れるに足りない。なんとしても鹵獲する。手足を斬り落とすぐらいは構わない」

「はい」

「期待しているぞホワイト。そろそろ時間だ、出撃準備を」

「はい」

ライダースーツを脱ぎ捨てたホワイトは、ライトブルーのパイロットスーツに袖を通す。

そして彼女を待つ蒼い翼の下へとゆつくりと歩み寄る。

彼女は機体へと乗り込み、静かに目を閉じる。

輸送車の天井が、ゆつくりと開いていく。

白衣を着た男たちがコンピューターの前に陣取って矢継ぎ早に言葉

を交わし、キーボードを叩く。鮮やかな流れ作業は、まるで台本を読み合わせる舞台役者のようだった。

『ナチュラルスーパードクター、ツインユニット始動』

『機関内圧力上昇。冷却装置の稼働率八十パーセント。内部温度、摂氏七度で安定』

『各管制システムに異常なし。機体コントロール正常』

『制御システムをメイン出力へと接続。オートコントロールを維持しつつシステムを起動』

『システム SYLPH の起動を確認。搭乗者との接続を開始』

コクピットのホワイトに対して、システムが電子干渉を開始する。電子の波に揺られながら彼女は、全てを委ねるかのように動かないでいた。

『アジャスト完了。引き続きフライトシステムの起動に入ります』

『フライトシステムをサブ出力へ接続。フライホイール始動』

『ステルスモードオン。対電光波フィールド展開』

『セーフティロック解除。コントロールを搭乗者へと移譲します』

「——アイ・ハブ」

操縦換を握り締めたホワイトは、ゆつくりと目を開いた。

そして、彼女は見えない誰かに言うように呟く。

「おはよう——」

蒼い翼を広げ、機体はゆつくりと上昇を始める。空気の振動が真夏の新緑に溶け出していく。

「システムオールグリーン。サイルフ、テイクオフ」

解き放たれた矢のように、風を切り裂いて、蒼い翼が飛翔する。

第三章 ラスティと紅き炎の化身 ーフラムと、別離の日ー

第三章 ラスティと紅き炎の化身 ーフラムと、別離の日ー

午後五時三十五分。フラム守備隊本部応接室。

クラシカルな応接室の隅に据え付けられた電話がけたたましく鳴り響く。

それはまるで、舞台の開演を告げるベルのように。

「失礼」フラム守備隊司令は席を立つと、億劫そうに受話器を掴む。
「来客中は無闇に呼び出すなど言っているはずだが――」

「申し訳ありません。緊急事態のため連絡いたしました」

「緊急事態？」司令は受話器を左手に持ち替えると、客人の座るソファーに背を向けた。「何があった？」

「北方ヨルズン山付近にて未確認飛行物体の出現を確認。現在フラム方面へ向けて移動中。今の速度を維持した場合、市街地上空まで三十三分で到達する見込みです」

「技術開発省の連中のテスト機か何かではないのか？」

「いえ、本日そのようなテストプランは出されていません」

「では、その正体は何なのだ？」

「それが、飛行物体を中心とする強力な電波障害が発生しており、正確な割り出しができない状態です。自然物でないことは明白なのですが……」

「当たり前だ。鷹やトンビが電磁波など出すものか。――念のためだ、偵察機を出して調査に当たらせる。守備隊は第二種警戒態勢で待機。私もすぐそちらに戻る」

「了解、至急対応いたします」

司令は受話器を置くと、客人の女性を振り返った。

「国防軍からの正式要請も来ていますし、修理と補給の件はお任せ

ください。週明け早々には我々の施設を使っていただけのような手配を進めておきましょう。それまではフラムの街をゆつくりとお楽しみください」司令は、テーブルの上に広がった資料を片付け始める。「申し訳ないのですが、急な用件が入ってしまいました。こちらから連絡を差し上げますので、本日はお引取りを」

「待つてください、司令」女性が立ち上がる。「偵察機の緊急発進に、警戒態勢の発令。ただ事とは思えません」

「聞こえていましたか」含み笑いをした司令は、なあと続ける。「なあと、ちよつとしたトラブルですよ。あなたたちの手を煩わせるようなことはありません。今日のところはお引取りを。アドリアナ中尉殿」

訝しげな表情を浮かべたアドリアナに再度「お引取りを」と囁きかけて司令は応接室を立ち去った。部屋に一人残された彼女の白い頬を、傾き始めた太陽が赤く染める。

午後五時四十五分。フラム守備隊司令室。

『こちら偵察機FRP02。低周波電子カメラの最大望遠にて飛行物体を捕捉。映像を出します』

司令室の大型スクリーンに偵察機からの映像が映し出される。水平に伸ばした両翼で大気を切り裂きながら飛翔するその姿に、司令室はどよめきに包まれた。

「司令室よりFRP02へ」戻ったばかりの守備隊司令が通信機を手取る。「接近中の飛行物体にオープン回線を開け。こちらから停止勧告を行う」

『FRP02了解』

「フラムへ接近中の飛行物体に勧告する。こちらはリムリア連邦フラム守備隊である。ただちに停止し、所属と目的を述べよ。勧告に従わぬ場合は迎撃行動に移る。繰り返す――」

司令は飛行物体に対して、二度の勧告を行った。

司令室内の全員が固唾を飲んで見守るが、飛行物体に停止する様

子はない。

『こちらFRP02。飛行物体は速度を維持、停止する様子はありません』

「奴め、聞こえていないのか、それとも聞こえないふりなのか」司令は忌々そうにスクリーンを睨みつけた。「仕方がない。FRP02は現空域より離脱せよ。守備隊各機は順次出撃、北西二二〇地点を防衛ラインとして布陣せよ」

そのとき、偵察機のパイロットが大声で叫んだ。

『え、FRP02より司令室へ！ 飛行物体が急激に加速！ 信じられないスピードです！ 本機は現空域より緊急離脱します！』

「——現時刻をもって、接近中の飛行物体を迎撃対象として識別する。市街全域へ第二種退避警報を発令。守備隊の発進を急がせる！ 市街地へ接近する前に体勢を整えろ！」

拳をデスクに叩きつけて司令が声を張り上げた。

『こちらFRP02！ 至急救援を！ だ、ダメだあ！ うわああああああ……』

断末魔の叫びと共に偵察機FRP02の反応がレーダーから消失する。

「FRP02、応答して下さい！」オペレータの悲痛な声が空しく響き渡った。

同刻。フラム市街。

追われるように守備隊本部を後にしたアドリアナは、傾き始めた太陽の下、宿舎へ向けて車を走らせていた。

疑心と不安。彼女を支配していた想いは、空をつんざく警報音によって確信へと変わる。

「冗談じゃないわ」吐き捨てるように言うと、携帯電話に手を伸ばしイラーノを呼び出す。

「今どこに？ ——そうだったわね。ええ、手続きは後回し。D・F・の出撃準備とリップへの連絡を大至急で。私もすぐに向かうわ。」

——ええ、飛ばせば十分ちよつとで着くと思うから」

車をUターンさせた彼女は、停泊中のランドホエールへと向かう。

午後五時五十六分。フラム北西、守備隊防衛ライン。

「隊長。目標を有視界レーダーにて捕捉しました。射程内まで二二〇秒」

「ギリギリまで引き付けたところで、両翼の戦車部隊が一斉砲撃。目標をこちらへと誘い込む」

「誘いこんだところにD・F・隊の総攻撃。そこで一気に叩き落す、ですね？」

「その通りだ」守備隊隊長は自信に溢れた表情を見せる。「戦車部隊、滞空迎撃用意」

戦車の各砲塔が北の空を舞う一対の翼を照準に捉える。

「目標、射程距離まであと5、4、3、——」

「よし。戦車部隊、滞空迎撃——、撃てえええ！」空に映る光点を指差し隊長が叫ぶ。

同時に両翼から幾筋もの弾道が放たれる。夕空に白い放物線を描きながら。

「目標が加速！ 全弾回避されました！」

急加速で砲撃をかわした飛行物体が、守備隊目掛けて接近する。

「第二波を撃てえ！ 目標の軌道を変えさせるな！ 真っ直ぐこちらに誘い込め！ D・F・隊は前へ。集中攻撃で仕留めるぞ！」

フラムを象徴する真紅のストライプペイントを施された八機のD・F・が隊長機を中心に隊列を組む。

今まさに、攻撃の指示が出されようとしたその瞬間、目標の動きが唐突に止まった。

「なんだ、あれは……」パイロットの一人が驚きの声を上げる。

蒼き半鳥半人の魔人の姿。

静止したことにより、その禍々しい姿が夕焼け空にはっきりと映し出される。

燃え盛るように真っ赤な瞳が、飢えた獣のように守備隊を見下ろしていた。

「目標の動きが止まったぞ。チャンスだ！ 撃ち落とせえええ！」
ガトリング砲が、ショットガンが、バズーカが、ミサイルが一斉に火を噴く。戦車部隊の砲撃も止まらない。集中砲火が、黒い煙が、蒼い翼を飲み込んでいく。

——次の瞬間、無秩序に広がらんとしていた黒煙が、黒い渦へと変わっていく。

渦は竜巻となって吹き上がり、空をまたたく間に塗りつぶした。

「撃ち方止め！ どうなっている！ 状況は！」

突如発生した竜巻を前に、守備隊各機はたじろいだ。

——空気の渦がほどけていく。

渦に巻かれていた幾千もの砲弾が霰のように降り注ぎ、乾いた金属音を鳴り響かせる。

「そんなバカな」目標を見上げた隊長が、愕然とした声色で続ける。
「あれだけの砲撃を浴びせたというのに、——無傷だともいうのか……」

半鳥半人の魔人は、自身を抱擁していた蒼き翼を優雅に、切り裂くように開いた。

「隊長、奴が——」

その先に続くはずだった「こちらに突っ込んできます」という台詞を発するより先に、D・F・の上半身は下半身と切り離された。空を切り裂く蒼い翼は、D・F・の装甲をたやすく断ち斬る鋼の刃でもあった。

「立ち止まるな！ 散開して攻撃を続けるんだ！」

よく訓練された動きでフォーメーションを組みなおす守備隊各機。それをあざ笑うかのように、蒼き魔人は地上へと舞い降りると、一台の戦車を両断する。引き裂いた戦車の半身を近くのD・F・へと投げ放ち、間一髪でそれをかわしたD・F・をあっさりと十字に分断する。

あつという間にD・F・二機と戦車一台を失った守備隊は、狐に抓まれたかのように、金縛りにあつたかのように動きを止める。そんな守備隊を尻目に、魔人は上空へと舞い戻った。

恨めしそうに空を見上げる守備隊への餞別とで言わんばかりに更に二機を撃破し、蒼き翼の魔人はフラムの街へ進路を取った。

「なんということだ。ほんの数分で、ここまで——」茫然自失になつていた隊長が、ハッと我に返る。「市街地へ急行するぞ。動ける機体は続け！」

「しかし、我々が戻ったところで……」氣力の失せた声で隊員の一人が言う。

「バカやろう！ 我々守備隊が戦わずして、誰が街を守るといふのだ！」

飛び去った蒼き翼は、既に視界の彼方へと消えていた。

午後六時。技術開発省新鋭テクノロジー開発センターフラム支部。フラム支部の代表であり、兵器開発局長でもあるエルリック・ハーミットは、フラムへと迫りつつある脅威を前にしても、その柔和な表情を変えずにいた。

「まったく、誰が呼び寄せたのだろうね？」大きくため息をつくエルリック。

支部長室に設置された吊り下げ型のモニターが、接近中の蒼き翼の機体を映し出す。

「呼び寄せた？」エルリックの妹、第一開発室チーフであるルーシエットが怪訝そうに兄の顔を覗きこむ。「呼び寄せるってどういうこと？」

「せっかくフラムに戻ってきたというのに、次の日にこれだろ。誰かが疫病神でも呼んだんじゃないかと思つてね。ルーシエットはそう思わないかい？」

「あたしは無神論者なの。そんなことよりも、どうするのよ兄さん？」

「どうするって、何をさ？」

「何をつて——」ルーシエットは眉をひそめた。「近づいてくるあの蒼い奴をに決まってるでしょう！」

「ジタバタしてもしょうがないさ。僕らは一番安全なところにいる、そうだろ？」

「確かに、この施設は地下シエルターのようなものよ。ちよつとやそつとじゃ、びくともしないでしょうね」両手をギュツと握り締めてルーシエットは憤る。「だからつて、ここで時が過ぎるのを待つて言うの？ 守備隊じゃどうにもならないことくらい分かっているくせに」

「あつちがポテンシャルの半分でも出そうものなら、守備隊の戦力じゃ相手にならないんじゃないかな？」平然と言つてのけるエルリック。

「だったら……」

「だったらどうだつていうんだい？ 僕らは軍人じゃないし、ましてや正義の味方でもない。この街を守る義務があるわけでもない。むしろ守られるべき立場の人間だろ？」たしなめるような口調でエルリックが続ける。「それに、君は物事を悲觀的に捉えすぎだ。あれが敵だと決まつたわけではない。そうだろつ？」

「友好の証に守備隊の機体を真つ二つにするつていうの？」

「確かに友好的ではなさそうだ。でも、決め付けはよくないと思わないかい？」

「もついいいわ……」ルーシエットは携帯電話を取り出した。

「どうする気だい？」

「十四機動隊に連絡するわ。休暇中に悪いけれど、あの人たちならきつと——」

「連絡先は？」

「リップつて人が教えてくれた」

「ああ、君をナンパしようとしていた彼か。デートでもする予定だった？」

「しつこいから番号だけ受け取ったのよ！」ルーシエットはメモに記された電話番号をダイヤルする。「結果的に受け取っておいて正解だったわ」

『——ただいま、電話に出ることができません。御用の方はメッセージをどうぞ』

「繋がらないじゃない！」ルーシエットはメモを丸めて床に投げ捨てた。「役立たず！」

「——どうやら、こっちが気を回す必要は無いみたいだよ。彼女たちは軍人の鑑だな。ルーシエットも軍に出向してみたらいいんじゃないか？」

エルリックはモニターを停泊中のランドホエールに切り替える。

第十四機動部隊のD・Fが発進体制に入っていた。

「最初から分かっていたのね。ほんと、性格悪いんだから……でも、あの人たちと守備隊が協力して迎え撃てば何とかなるかも。カスタムタイプもいるし」

「彼女たちの実力の程は分からないけれど、あの装備では厳しいと思うよ」妹に冷や水を浴びせるかのようにエルリックは言っている。「高速で自在に飛翔する標的を迎撃するのは至難の業だ。時間稼ぎにはなるかもしれないが、時間を稼いでどうにかなると思うかい？」

「……どうして兄さんはそんなに冷静なの？ 何とかしようとは思わないの？」

余りにも冷静で、客観的で、余裕たっぷりの兄の物言いにルーシエットは唇をかみ締める。

「こっちに持ってきた機体の搬入は全部終わったんだっけ？」

「そうよ！ ランドホエールに残っているのは十四機動隊の分だけよ。守備隊のドックに入れるまで仮で置いておくことに決めたじゃない！ それがどうしたっていうのよ！」

「じゃあ、今こっちにある機体の中ですぐに動かせそうなの？」

「組み上げ前の機体ばかりで、動かせるのはセイラムくらいよ。分

かっているでしょ？」

「なるほど。セイラムなら出せる。そういうことだね？」

「それはそうだけど……パイロットがないわ！」

「適合テストで破格の数値を叩き出した人間が、今この街にいるはずだろう？」

「それって……」ルーシエットはハッと息を呑んだ。「ラステイ……君」

思い出したようだね、と目線を送るエルリック。

「でも、彼がどこにいるのか分からないし……」

「電話、鳴っているよルーシエット。ナンパの彼からじゃないかな？」

慌てて携帯電話を耳に当てるルーシエット。声の主は予想通りリップだった。

「——誘ってなんかいません！ こっちも取り込み中なの！ 一つだけ教えてください。ラステイ君はそこにいますか？ ——じゃあ彼は今どこに？ ——分かりました、港ですね。——はい、その件はまた今度。それじゃ、失礼します」

電話を切るなり部屋を飛び出そうとしたルーシエットを、エルリックが呼び止める。

「自分からけしかけておいて、反対なんかさせないわよ！」

「第二デッキでスタンバイしておくよ。二十分もあれば出せる状態にはできるかな。くれぐれも気をつけて、危険を感じたらすぐに逃げること。いいね？」

頷きながら出て行った妹を見送ったエルリックは、タバコに火を点ける。

「ただの偶然か、それとも必然か…… いるのだったら黒幕の顔を…… 拝む必要もないか」

立ち昇る白い煙を追いかけて目を細めた。

午後五時五十五分。ランドホエール格納庫。

空へと飛び出さんばかりの勢いでスロープを駆け上がり赤い乗用車が滑り込む。

「イラーノ、お待たせ」銀色の髪を揺らしながら車から飛び出すアドリアナ。出撃準備の整ったD・Fを見た彼女は感心して口を開く。「いつもながらさすがの手際ね。あなたがこっちにいてくれて助かったわ」

リップが隊のムードメーカーならば、イラーノは縁の下の力持ち。アドリアナが二十四歳で新任隊長となったときから、隊の屋台骨となり若き隊長を陰に日向に支えてきたのが彼だった。勤務シフトの作成から補給の手続きまで、事務仕事の大半を取りまとめるのは彼の役目だった。

「状況ですが、思っていたよりも芳しくありません——」イラーノは、集めた情報を淡々と報告する。「北西方面より接近中の飛行型アンノウンと、守備隊の主力部隊が交戦。アンノウンはD・F・三機と戦車数台を撃破し戦域を離脱。間もなく市街上空へ到達する見込みです」

「飛行型のアンノウンってというのは？」

「所属不明の飛行型としか言えませんが、現状では」

「市街内部に残っている守備隊の戦力はどの程度？」

「数機程度かと。迎撃に出た主力部隊も市街地へと急行しているようです」

「まず間に合わない、か——」黙って顎を引くイラーノを横目に、アドリアナは守備隊司令の言葉を思い返す。

事態が「ちょっとしたトラブル」でないことは明らかだった。

「ありや、隊長のほうが早かったか……」汗だくになったリップが姿を現す。「わりかし急いで来たつもりだったんですけどねえ」

「遅いぞリップ。十五分以内にと言っただけだ」

「この状況じゃ無理ですって副隊長。タクシーも何も走っていないですから」乗ってきた自転車を降りながらリップが抗議する。

「ところでリップ、その自転車は誰のものかしら？」右手を腰に当

てたアドリアナの質問に、それは置いておいて、とリップは話題を変える。

「それは置いておいて。ラスティの姿が見えないようですが、あいつはまだですか？」

「いいえ、彼は呼んでいないわ。現状で彼が使える機体はないし、ウォースでのこともあるから。あの子には、もう少し楽な状況で出してもらうつもりよ」

「ってことは、今回は楽しやないってことですか？」嫌な予感がプンプンですね、とリップは付け加えたる。

「この警報を聞けば、想像はつくでしょ？」アドリアナが茜色の空を指差す。「飛行型のアンノウンが接近中。迎撃に出るわ」

「飛行型のアンノウンねえ…… 空飛ぶ大怪獣襲来、なんて話じゃないですよね？」

「旧式とはいえ、守備隊のD・F・三機をまたたく間に撃破するほどの相手だ。心してかからないと痛い目を見るぞ」いつもより一段と厳しい顔のイラーノがリップを睨む。

軽いノリで答えながら何気なく携帯電話を取り出したリップは、しまった、という表情を浮かべる。

「俺としたことが、着信に気付かないとは……」リップは履歴の番号へ素早くかけなおす。

「——あ、テク開のルーシエットさんですか？ いやあ、せっかくのお誘いなのに申し訳ない——え？ ああ、そうなの。ラスティ？ いや、ここにはいないけど、あいつに何か？ ——たぶん港のほうじゃないかと。そんなことより、明日こそは一緒に……あ、ちょっと」

一方的に電話を切られ消沈するリップの背中をアドリアナがポンと叩く。

「さ、行くわよ。リップ先輩」

「了解、了解。ちゃちゃっと片付けましようかね」

「ラスティ抜きの新フォーメーション。試す絶好の機会だったろう

にな？」

「その件は散々謝ったしもういいでしょ。ほら、出撃ですよ副隊長」
新フォーメーションの話がリップの出まかせだったのは語るべくもない。

三機のD・Fが発進するよりも僅かに早く、蒼い影がフラムの上空へと姿を現した。

ストーリーは、一つのヤマ場にさしかかっている。うん、間違いない。

主人公のラスティが味わったウォースでの苦い経験と、フラムでの出逢い。

そして、フラムへと迫る蒼き翼の魔人。

出撃する機体のないラスティと、エルリック、ルーシエット兄妹の思惑が絡み合う。

そして、蒼き魔人を迎え撃つアドリアナたち第十四機動部隊の命運は。

「次回、『フラムは紅く燃えているか』をお楽しみに、といったところかな」

僕の言葉に耳を傾けるヒトなどいない。

そもそもここに「ヒト」なんていないのだった。

ヒトの言葉を話すサッカーボールと、男と女が分かるシロネコ。

そのシロネコ、キャット・シーフはずっと眠ったままだ。

すやすやと気持ちよさそうに寝息を立てている。

いい夢でも見ているのだろうか。

夢。

それにしてもこの夢だ。覚める様子がまるでない。

「仮にだ。今の状況が夢ではないとしたらどうだろう」と考えてみる。

夢の中で、夢でなかったらどうしようなどと考えるのは、生きているのに、死んでいたらどうしようと考えのと同義ではないだろう。

うか。

——いや、そんなことはどうでもいいか。

ここが夢の中ではなくて、仮想現実空間だとしたらどうだろう。この何もない洋室はコンピュータによって作られた擬似的な空間。ヴォル・ポーニが水先案内役で、キャット・シーフはマスコットキヤラクターだとしたら？

「どうもこうもない」

誰が、いつ、何のなめに、どうやって、なぜ、僕をそんな場所に連れてくる必要がある。

どれ一つ答えることさえできないだろう。

「だとすると、マインドコントロールか何かか？」

これは笑えない。

「一体、どうなっている？」

心なしが頭がボーっとしてくる。気持ちちが地面に吸い寄せられている気がするし、魂が空まで昇ってしまった気もする。

唯一の手がかりは、精霊の会議室という言葉。

サッカーボール。シロネコ。会議室。そして僕。

「こんなときに限って電池切れかよ——」俺は携帯電話を握り締める。

こんなときだからこそ、だったのかもしれないが、この時点では分かりようもなかった。

「希望の灯火か……」鳴り響く警報の先に、希望があるとはとても思えない。

港を賑わせていた大勢の人たちは誘導に従って避難してしまい、辺りは閑散としていた。

やむを得ず俺はランドホエールの停泊する軍用港を目指していた。

「……ティ君！」

警報に紛れ込むように俺を呼ぶ声がする。近づいてくる。

「ラストイ君。こつちよ、こつち！」

バイクが一台、一直線に近づいてくる。シートにはブロンドのお下げと丸メガネ。

「ルーシエットさん。なんでこんなところに？」しかもノーヘルで。

「あたなの部隊の人に聞いて来たの。ほら、あの背が高くてチャラチャラした感じの」

「リップ先輩」

「そう。そのリップ先輩に、あなたが港にいるって聞いて。こんなにあっさりと見つけることができるなんて思ってた。神様の導きかもしれないわ」

「神の導きですか——でも、どうして俺を？」

「説明なんて後よ。とにかく後ろに乗って。ほら、早く！」

前と同様に、ルーシエットさんの勢いに押されたまま後部座席へと跨る。

「運命の再会、ねえ」相手がルーシエットさんだったのは予想外だったけど。

「すっかりつかまっていたね。落ちたら死ぬわよ」

そりゃ、ノーヘルですからね。と心の中で突っ込みを入れる。

動く物のない車道を、バイクは猛スピードで駆け抜けた。

あれだけたくさんいた人間は、表通りから綺麗さっぱり消えていた。災害を想定しての避難訓練が徹底されているのだろうか。

「何が起こっているんです？」ルーシエットさんの腰にしがみ付きながら叫ぶ。

「敵襲よ、て・き・しゅ・う。ああなたの部隊の人たちももうじき出てくるわ」

「隊長たちが？——すぐにランドホエールに向かってください。

俺も行かないと」

「あなが行っても、何もできないでしょう。今は、あたしを信じて一緒に来て」

「……分かりました」そう、戻ったところで俺は出撃することさえできないのだから。

自分がどこに連れて行かれるのか想像する。

答えは一つしかない。そして、そこには俺が使える機体があるのだろつ。

その前に隊長たちがカタをつけてしまつかもしれないが、それならそれでいい。

どちらにせよ、今はルーシエットさんと行くしかない。

連れ行かれた先は予想通りテク開のフラム支部だったけれど、足を踏み入れた先は予想外の地下研究施設だった。

開発中の新型、テスト前の試作型、展開前の量産型。即ち機密事項の一大展示場のようなその場所は、一般には伏せられていて存在すらも知らなかった。

そこはランドホエールのそれよりも遥かに広大で、長大な格納庫だった。

巨人が自分の部屋にプラモデルをずらりと並べたような光景が目の前に広がっている。

「ここが第一格納庫。たくさん並んでいるけれど、ここにあるのは試作機や性能試験用のテスト機ばかり。実戦に出せる機体は一つもないわ」

第一格納庫を通り抜ける間、ルーシエットさんは企業秘密から国家機密に至ると思わしき内容を次々と口に出した。その大半は俺にとって重要なことではなかったけど。

「あなたに乗ってもらう機体は一つ下のフロアにあるわ」俺たちは奥にあるエレベータに乗り込む。

扉が閉まり、ルーシエットさんがボタンを押した瞬間、前触れもなく照明が落ちた。

「停電なの？」彼女の声が一オクターブほど高くなる。

暗闇の中で肩と肩がぶつかり、きゃっ、という悲鳴が上がる。

「落ち着いてください、ルーシエットさん」俺が言うのと同時に照明が復旧する。

「ごめんなさい」彼女は俺の袖口から手を離す。「予備電源に切り替わったみたいだわ」

何事もなかったかのようにエレベータは動き出す。

降りた先は、なんとも怪しげで、寂しげで、幻想的な空間だった。停電の影響なのか、いつもそうなのかは分からないが、暗闇の中で人口の光が煌く星空のような場所だった。

右奥の一際青く、光が集まったところでその人は待っていた。

「随分早かったね。神様が二人を巡り合わせた、そんな感じかな？」

エルリックさんが軽い口調で言う。ルーシエットさんと同じく神様の導き、と。

髪の色以外は全然似ていないのに、この二人はやっぱ兄妹なんだな。

——俺たちはどうだったのだろうか。——今さらな話だけど。

「それよりも兄さん、状況は？ さっき一瞬停電したみたいだけども？」

「予備電源に切り替わったけれど問題はなし。機体の準備は万端、いつでも行ける。ここが一番安全だって言っただろ？」

「オーケイ」ルーシエットさんが俺のほうを振り返る。そして、背後にそそり立つ真紅の機体を指差して「これがあなたに使ってもらう機体よ」と言った。

「これが——」

分厚い胸板に筋骨隆々の肢体。一目見れば分かる、重装甲の突撃型兵器。

騎士の甲冑を思わせる紅蓮の装甲の継ぎ目には、開閉式の噴射口が取り付けられている。機動性を高めるためのブースターなのか、排熱用フィンなのか、ここからは分からない。骨太で重厚感のあるフォルムは、細身でしなやかなD・Fのそれとは相反するものだった。

た。そして。

「悪魔みたいな顔だ」

むき出しの牙と釣り上がった目。あまりにも禍々しい姿に、感じたままが言葉に出る。

「わざと威圧感を抱くようなデザインにしてあるのさ。この機体にウサギの頭だと釣り合いが取れないだろう？」エルリックさんは極めて真面目にそう言う。

この人の言っていることは本気なのかどうか分からない。

ほぼ全てが疑問系だし。

「外では十四機動部隊が戦闘に入ったみたいだよ。君も、こんなところでボーっとしている場合ではないだろう？」

「隊長たちが…… ルーシエツトさんから敵襲だと聞きました。どこの誰が攻めてきたんですか？ 外の状況は？」

「外の状況の説明を受けるか、出撃準備を進めるか。どちらを選ぶ、ラスティ君？」

—— やっぱり、疑問系かよ。

隊長とは別の、冷たい視線に嫌悪感を抱きながら、俺は機体へと乗り込むことを選ぶ。

「ほんと、正確悪いんだから」兄に非難の言葉を投げながらルーシエツトさんは通信用のインカムを装着する。『見覚えのある景色でしょ、ラスティ君？』

言われずとも分かる。この天井からぶら下がったヘッドギア。

新型システムのテストという名の罰ゲームを受けたあのときと同じ状況だ。

「今度も、この前みたいにバリバリってなるんですか？」

『この前は特別よ。今回はそんなことはないから安心して』

「——信用しますよ。あんなのはもう、ゴメンですからね」渋々ヘッドギアを装着する。相手がエルリックさんなら、果たして信用することができただろうか。

どちらにせよ前に進むしかない、だな。

『その機体、セイラムのことを説明するわ。前にテストをしてもらった際は、頭に電気が走るように感じたわよね。あれは、あなたの脳波とシステムとが激しく干渉したせいなの。想定値を超えた分をシステムが吸収できずに、ヘッドギアに逆流してしまった』

「——よく、分からないんですけど」

『そうね、ごめんなさい。時間もないし簡潔に言うわ。セイラムに搭載されているのはパイロットの脳波を機体の制御に使用するシステムなの。あのテストは、システムとあなたの相性を調べるためのものだったのよ』

「——それで、俺はどうすればいいんですか？」

『基本は普通のD・F・と何も変わらない。そして、上手く起動さえすればシステムがあなたをサポートするわ。あなたが思えば機体は動く、そういうシステムなの』

「思えば動く？」そんなバカな、と思わず口に出しそうになる。

『理論上の話よ。あくまでテスト中のシステムだから、あてにする必要は無いわ』

「——分かりました。やれるだけやってみますよ」

ルーシエットさんが小さく顎を引くと、機体のそこかしこから駆動音が鳴り始めた。

メインモニターには前と同じように文字が流れていく。「SALA MANDER」さっき彼女が口にした「セイラム」とはこれのことだろう。

『ラステイ君。これから機体を射出用デッキに移動する。その間に機体のチェックを頼むよ。スペックデータも送るから、簡単に目を通して特徴だけでも掴んでもらえるかい？』

エルリックさんからの指示を受けて、俺はいつもの儀式を行う。両手、両腕、首。

通常動作に問題はないけど、反応が少し鈍い。若干タイムラグがある感じ。

まあ、問題はないだろう。

見た目通りというか、スペックデータを見る限り多少の被弾を気にするような機体ではないらしい。いかにも小回りが利かなさそうだが、それも分かっていればなんとかなる。

各部のチェックを終えると、待ち構えていたようにエルリックさんが口を開いた。

『射出用デッキへの固定完了。それじゃ、外の映像をそちらに送ろうか。敵さんは飛行型で捉えるのは難しいだろうけれど、なんとか頼むよ。何か質問はあるかい？』

市街地のリアルタイム映像が転送されてくる。

いたるところから黒煙が噴き出している。ニエルと歩いたショッピングモールも、半分が崩れ落ち赤い炎に侵食されていた。

輝く歓喜のときを迎えるはずの街が、炎に包まれて苦しげに煙を吐き出していた。

映像が別カメラへと切り替わる。高層ホテルと、隣接する遊園地を遠目から写すアングル。

三機のD・F・Fが飛行型の機体と交戦をしている。大剣を構えたD・F・Fがホテルの屋上から飛び降りる。落下線上には蒼い翼の飛行型。

——その瞬間、俺の中を稲妻が駆け抜ける。

猛然と斬りかかるアドリアナ隊長のD・F・Fを竜巻の力で吹き飛ばす、蒼い翼の飛行型。

——心臓の鼓動が爆発的に早まる。身体中の血が沸騰しそうになる。

『準備がよければ射出するよ——どうしたんだい？』

——身体中から冷たいものが噴き出した。

『どうしたの、聞こえているんでしょう？ 何かあったのラステイ君？』

——全身の筋肉が震える。骨と言う骨が軋む。

『ラステイ君！ 何かトラブル？ 返事をして！』

——皮膚を突き破って飛び出しそうになるものを、無理やりに抑え

込む。

「何でも、ありません—— 出してください」

—— 見つけた。向こうから出てきやがった。

『ラスティ君の様子がおかしいわ。脳波も乱れているし、このまま出すのは危険よ!』

『彼は大丈夫だと言っている。それに、彼を促したのはルーシェット、君自身だろう?』

『それは、そうだけど……』

—— これこそが「運命の再開」じゃないか。

—— 隊長、副隊長。先輩。そいつは俺が倒しますよ—— だから。だから、さつさと出してくれ。

『ここから先は、当人たちに任せるほかないさ』

エルリックさんが射出ボタンを押す。俺とセイラムを乗せた射出デツキが重低音を響かせながら上昇を開始する。

午後六時十八分。フラム市街。

鳥のように、魚のように、自在に空の海を駆け回る蒼き翼の後方を、煙と弾道が通り過ぎる。

「ちい、かすりもしねえ! ランチャーは当たらないぞ、こりゃ」
リップが吐き捨てる。

「闇雲に撃つたところで捉えるのは無理だ。無駄弾を撃つな」

「だからって、奴をピンポイントで狙い撃つのも無理ってもんでしょうが。それとも、副隊長には何か秘策でもあるんですか?」

リップとイラーノのD・Fが背中を合わせて上空を見上げる。
リップのロケットランチャーは易々とかわされ、イラーノのショットガンでは宙を舞う青き翼に届かない。

「秘策があるのならとっくに出している。来るぞ!」

蒼き魔人が交差させた両翼を大きく振り開く。目に見えるほどに

圧縮された空気の刃が、音を立てて二人に襲い掛かる。

「どんなカラクリだか知らないが、おっかない攻撃だなまったく！」
飛びのいたリップが振り返ると、バツサリと切断された街灯が力なく倒れた。

ダダン、ダン！ 攻撃の終わり際を狙ってイラーノがショットガンの引き金を引く。

翼の魔人は瞬時に身をかがめると、一気の急上昇で難なくそれかわした。

「正面からではどうにもならんか—— 隙をつくしかなさそうだが」
「そんなことは分かってますって。どうやってその隙を作るか、でしょう」

「そうだな…… よし、ダンスでも踊ってみるか」

「は？」リップは目をむいた。「普段は冗談なんか言わないくせに、こういうシリアスの場面で突然言わないでくださいって」

シニカルな笑みを浮かべる二人の下へ、アドリアナから通信が入る。

『二人とも。西側に白い高層ホテルが見えるわね。奴をそこまで誘導してくれないかしら？』

「誘導って、どうするつもりなんですか？」リップが聞き返す。

『いいから、黙って言うとおりにして』

「隊長には何か策があるのだ。目標をあそこまで誘導する。行くぞ」
ショットガンを構え直したイラーノが飛び出す。

「本気モードの隊長を信じるしかない、か」一呼吸遅れてリップも続く。

リップとイラーノ。副隊長と部下。先生と生徒。父と息子。

二人のコンビネーションは抜群だった。

右へ旋回する蒼き魔人をイラーノが牽制し、左へ回り込もうとすればリップが狙い撃つ。

上をリップのロケットランチャーが、下をイラーノのショットガンが押さえながら、風の刃を紙一重でかわしながら、二人は巧みに蒼

き魔人をいざなっていく。

周囲より頭二つ抜け出した高層ホテルを目前にし、蒼き魔人は再び急上昇を試みた。

『上出来よ、二人とも』

ホテルの屋上で大剣ファルシオンを大上段に構えたアドリアナの操るカスタムタイプが、獲物を捕らえる狼のごとく鋭い眼光を光らせる。

上昇してくる標的を目掛け、躊躇なくその身を投げ捨てた。

「あの高さからダイブするなんて正気の沙汰じゃないぞ、隊長は！」
リップが目を丸くする。

「だが、あの速度では避けられまい。決まりだ」

二人は頼れる隊長の勝利を確信した。

急上昇する蒼き魔人と、急降下する銀色の剣士が、今、交錯する――

蒼き魔人の真紅の瞳が強く輝く。

慣性を無視した急停止、急旋回、急上昇。

断ち斬られるはずだった蒼き翼の姿を見失った鋼の刃が、空しく闇夜を斬り裂いた。

「消えた……そんな……　うわあああああ！」

アドリアナに愕然とする時間は与えられなかった。

力の限りにファルシオンを振り抜き、バランスを失った彼女に、攻撃から身をかわす術はなかった。蒼き翼から放たれる乱気流に吞まれ、なすがままに弄ばれる。

右も左も分らないままに吹き飛ばされ、スローモーションのように宙を舞い、きりもみ回転しながら観覧車に激突し、崩れ落ちる銀色の剣士。

「くそつたれが！」驚きと怒りが織り交ざった口調で、リップは空を見上げる。

「リップ、隊長のところへ行け！　私がやつを何とか押さえる」
銃口を上げたイラーノに背を向けて、リップはアドリアナの元へと

走る。

「隊長、隊長——　しっかりして下さい！」

リップはコクピットで気を失っているアドリアナの肩を揺らす。観覧車がクツションになり衝撃が緩和されたのだろう、彼女に目立つ外傷はなかった。

「ほら、こんなところで寝ている場合じゃないでしょ？」いくら肩を揺すっても返事のないアドリアナに手のひらを向け、彼女の頬を二度三度と優しく叩く。

「あんまり起きないようだと……」一息を吐き、ベリーショート
の銀髪に指をかける。そして鼻の頭同士が触れそうな距離にまで顔を近づけた。彼女の寝息が彼の頬を優しく撫でる。

リップがゆっくりと瞼を閉じると同時に、アドリアナの整った眉がピクリと動く。

「へ？　ちょ……　んっ！」

アドリアナの拳が瞬時に振り抜かれる。

「あ痛たっ！　っう……」

無防備な顔面に裏拳がまともに入り、リップは思わず飛び上がった。

「リップ……　だ、大丈夫？」

「ったく——　俺が心配する番でしょうに……」

「いきなり目の前にいるとは思わなかったから、びっくりして」

「だからって、殴らなくてもいいのに……」

涙目でリップは顎をさすり、そして安堵した表情を見せた。

「それより、状況は？　あいつはどうなったの？」

「健在ですよ。今は副隊長が引き付けてくれています」リップは親指で外を指差した。

開いたハッチから覗く闇空に、蒼白い光が螺旋を描いている。

「了解。ゆっくり休んでいる暇はなさそうね。あなたも、機体へ戻って」

「うっす」

リップは、小走りで自分の機体へと戻り、コクピットに入りシートに腰を下ろす。ベルトを締めて操縦桿を握り、ため息をつく。「同じ殴られるなら、キスして殴られたほうがおいしかったんだけどな。しかし、ガード硬いですよ、隊長……」

戦線に復帰すべく、アドリアナは周囲の状況を観察し把握する。

そして彼女は一人奮戦するイラーノに呼びかけた。

「面倒をかけたわねイラーノ。態勢を立て直すわ。一度後退して」

『無事でしたか隊長。了解しました、これからそちらに…… なっ、しまった！』

「イラーノ？」

『油断した！ くそっ…… ぬあああああっ！』

普段の落ち着いた口調からは想像もできないような甲高い悲鳴を残して、イラーノ機の反応がリーダーから消失した。

「何やってるんですか副隊長！ シリアスの場面での冗談は止めてくれって、さっき言ったばかりでしょうが！」リップが身悶えながら叫ぶ。

「リップ！」突き刺すようにアドリアナが言った。「落ち着きなさい。イラーノの反応が消えた地点に向かうわ。トレースできるわね？」

「やってますよ。意地でもあの野郎を叩き落とさないと気がすまない！」

「——最優先でイラーノ機を回収。その後、戦域から離脱するわ。

いいわね？」

「はあ？」リップは耳を疑った。「撤退？ 逃げるんですか、冗談でしょ？」

「このまま交戦を続けてもいたずらに被害が拡大するだけ。それくらい分かるでしょ？」

「だからって——」納得できない、とリップは主張する。

「このまま戦って全滅しても、それは無駄死にでしかないわ。お願い、分かって」

アドリアナの悲痛な面持ち見て、リップはそれ以上何も言えなかった。

「念のために守備隊本部に住民の避難状況を確認して。充分に時間は稼げたはずよ」

「了解……」リップが通信を入れようとしたそのとき、レーダーは新たに接近中の識別不能機を捉える。

「新手？ このタイミングでか？」

リップは身を凍らせる。今の状況で新たな敵への対処をすることなど不可能だった。

識別不能を示す緑の丸印が近づいてくる方向に呆然と視線を向ける。それは、リップとアドリアナの視界の先をかすめながら駆け抜けていった。

真紅の機体を揺らし、重戦車のように大地を揺すりながら、紅い蒸気を噴き出して。

「何だよあれは？ こちらを攻撃してこないってことは敵ではないのか？」

「——イラーノ機の回収に向かうわよ、リップ」

「けど、今の奴も同じ方角に向かって……」

「副隊長を放ったまま撤退なんてできないでしょう？」

二人は、蒼き魔人のいる方角へ向けて真紅の機体の後を追った。

俺の中の何かが震えている。全身の震えが、まるで止まらない。

恐怖？ まさか。今さら恐怖なんて感じたりはしない。

武者震い？ いや、違う。そんな安っぽいものじゃない。

——姉さん、やっとこの瞬間がやってきたよ。

そう、これは歓喜。歓びが俺の中を駆け巡っている。

姉さんは「仇討ち」なんかを望んだりはしないだろうな。

——俺も、姉さんが喜ぶとは思ってないよ。

俺が軍人になったこと、よく思っただろう？

仕事で人殺しをする弟の姿なんて見たくない、きつとそう言うんだろうな。

でも、俺にはこれしか思いつかなかった。

——姉さんの最期の言葉、聞けなかったんだから。

だから、俺はあいつを倒さないと前に進めない。

それで姉さんが戻ってこないことも、喜んでくれないことも分かっている。

それでも、俺はあいつを倒す。これは、俺のわがままなんだ。

お説教なら、また今度ゆっくり聞くから。

——だから、見ていてほしい。

ほら、見えてきた。あの日のように、我が物顔で飛び回っているあいつの姿が。

その蒼き翼を、引きちぎって地べたに叩き落してやるよ。

その紅い瞳を、真っ黒に塗りつぶしてやるよ。

姉さんが受けた痛み、苦しみ、恐怖、絶望。全部まとめて、何倍にもして返してやるよ。

——それが俺の、全てだから。

僕は何をしているのだろうか。

そうだ。夢を見ていた。夢の中で、映画を観ていた。

主人公のラスティ。

姉の仇を討つために軍に入ったラスティ。

士官学校を優秀な成績で卒業した有望な新人ラスティ。

アドリアナ、イラーノ。そしてリップ。良き先輩たちに囲まれたラスティ。

彼の行方を、行き先を、僕は見ていた。

そして今、僕の横で奇声を上げながら戦うラスティの姿を。

「くそおお！ 当たれ、当たれよ！ 墜ちろお！」

ラスティの目には、踊るように飛び回る蒼き翼の魔人の姿しか見えていない。

撃ち放つ炎の弾丸が木々を焦がしていることにも、吹き上がる灼熱の蒸気が車や街灯を蹂躪していることにも気付いていない。

繰り出す攻撃の全てをかわされ歯軋りするラスティの眼前を、蒼き魔人は猛スピードで横切る。風の刃を突き立てて、真紅の装甲に一撃を加えながら。

「クソつたれが！」

セイラムの胸部装甲に薄く亀裂が入る。騎士の甲冑の如き分厚い装甲が無ければ、何機ものD・Fを切り捨ててきた風の刃が一刀両断に斬り伏せていただろう。

やがて蒼き魔人は、メビウスの輪を結ぶようにセイラムの周りを旋回し始める。

苦し紛れに繰り出す炎の弾丸はいとも簡単にかわされ、ラスティは加速していく蒼い影を目で追うことしかできない。

蒼き魔人の旋回半径が縮まり始める。風の刃が真紅の装甲を削り取っていく。

ラスティは、四方八方からの絶え間ない攻撃を成すすべなく受けるだけだった。

僕は、歯を食いしばるラスティの横顔を黙って見ていることしか出来なかった。

アドリアナとリップは、紅と蒼との攻防を立ち尽くして見ていた。

「思ったとおり、あの二機は敵同士みたいね」

「なんでそう思ったんですか隊長？ 俺は敵の増援かと思ったのに

……」

「空を飛ぶ蒼い機体はフラムの外から来たけれど、紅いのは街の中から出てきたでしょ」

「つまり、紅いほうはフラムの守り神だとも？」

「まさか。そうだったらいいのだけど…… そんなことよりもイライノを探しましょう」

続けてアドリアナが「急ぐわよ」と言おうとしたところで緊急通信が入る。

「——あなたは、テク開の」

見覚えのある金髪に柔らかな微笑を浮かべた男が通信モニターに映し出された。

『やあ。二日ぶりだね隊長さん。休暇は満喫できているかい？』

エルリックとアドリアナの視線が、モニター越しに交錯する。

『そんな怖い顔をしないでもらいたいね。もしかして怒った？』

「……ご存知の通り、今は非常時です。用件は手短にお願いします」
『そんなに邪険に扱わないでほしいな。——分かった、今回は真面目に話すよ』

エルリックはため息をつく。そして険しい顔をしたままのアドリアナに対して続ける。

『聡明な隊長さんのことだ。既に予想は付いているだろうけれど、紅い機体はウチのですね。フラムを救うための力になるべく出撃させたのはいいけれど、見ての通り一方的にやられてしまっているわけだ』

「……それで、私たちに援護をしろと？」

『まあ、そんなところだ。もっとも、その傷ついた機体で援護をしてほしいというのはムチャなお願いかもしれないけれどね』

アドリアナはエルリックから視線を逸らす。リップには黙っていたが、彼女の機体はセンサー類のほとんどと左腕が使い物にならない状態だった。

『——凶星だったみたいだね。当てずっぽうでも言ってみるものだ』
『そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！』ルーシエットが画

面の脇から割って入る。そしてアドリアナに頭を下げる。『兄の無礼は謝ります。ゴメンなさい。それから、差し出がましいのですけどお願いがあります。直接通信でセイラムに呼びかけてもらえませんか？』

「セイラム？」

『セイラムって言うのは、あの紅い機体の名前です』

「——それで、呼びかけると言うのは」

『どうも機体の調子が良くないようですね。こちらからの通信も届いていない……』

『兄さんは黙っていて！』ルーシエットが兄を怒鳴りつけ、画面の外へと押しやる。『セイラムに乗っているのは……ラステイ君なんです。彼、機体に乗るまでは普通だったのに、急に呼びかけに对应してくれなくなつて。通信も無視されるし、戦い方もムチャクチャだし……』

アドリアナは咄嗟に思考を整理する。

あの機体、セイラムに乗っているがラステイだということ。彼が普通の状態ではないということ。彼に呼びかけを行うべきかどうかということ。

『お願いします。今こんなことを頼めるのは皆さんしかいなくて』本来であれば自分の部下が、国防軍の一兵士であるラステイが無断でテク開の機体に乗って戦闘に出ている事実を問い詰めるべきなのだろう。だが、今の彼女にその選択肢はありえなかった。

「ラステイが我を忘れている…… 相手は空を飛ぶ蒼い機体」リップがポツリと呟く。少しの間をおいて「そうか」と声を上げる。「そうか。そういうことか。隊長、分かりましたよ！」

「分かったって、何が？」

「仇ですよ。ラステイはあの蒼い機体と戦うために、その手であいつを倒すために軍に入ったんです。仇を目の前にして冷静さを失っているんだ」あのバカが、とリップは付け加える。

セイラムが吐き出す炎を帯びた蒸気が街を侵食していく。

憎しみを込めた炎が建物を崩し、街路樹を灰にしていく。

「おいラステイ！ 何をやってるんだお前は。少しは落ち着けよ！」
リップの叫びはラステイに届かない。一心不乱に敵を追い続けるセイラムの攻撃が夜空を焦がしていく。

「――隊長。副隊長を回収して先に撤退してください。座標は送りました。頼みます」

「状況が見えないわ。説明をしてちょうだい」

「そんな時間は無さそうです。後で食事でもしながら、いや、ベツドの中でも話しますよ」

アドリアナの表情を見てリップは襟を正す。

「俺がラステイをなんとかします。あいつを止めないと街の被害が拡大する一方だ。あいつのことは俺に任せるって話でしょ？」

「――分かったわ。イラーノのことは私に任せて。後でしっかり説明してもらおうわよ」

力強く顎を引くリップに微笑みかけると、アドリアナはモニターの向こうの二人に言った。

「こちらは何とします。あなたたちも避難を」

『僕たちにはセイラムのことを見届ける義務あるからね。それに、ここはフラムで一番安全な場所だから、どうぞお構いなく』エルリツクは手を振りながら姿を消した。

僕は、歯を食いしばるラステイの横顔を黙って見ていることしか出来なかった。

暴風雨のような攻撃に晒されたセイラムは、既に片膝を地面にっいている。

分厚い装甲のあちこちが剥がれ落ち、左腕はだらりと垂れ下がったままだ。

「さてと。どうしたものかね」

ビルの陰から様子を窺うリップは残弾を確認する。

「バカ正直に出て行ったらバラバラに切り刻まれて終わっちまうだろうが……」

既に彼の決意は固まっていた。

紅と蒼の二機はお互いのことしか見えていない。

「一瞬でいいから、こっちに背中を見せたまま動きを止めてくれないものかね」

リップの想いが届いたのか、ただの気まぐれか、魔人は翼を翻して静止する。ちょうど彼に背を向ける形で。膝をつき、うずくまるセイラムに、最後の一撃を見舞うべく。

今しかない、とリップは飛び出した。

「全弾、持っていけええええっ！」

一撃、二撃。がら空きになった背中に砲弾が命中する。

触れることも適わなかった蒼き魔人のシルエツトが大きく揺らぐ。

紅の前に立ち、蒼を見上げながらリップは、ランチャーに残る残弾と、胸部に内蔵されたバルカンの全てを浴びせかける。後のことなど考えもせずに。

もうもうと焚きあがる黒煙の中からバランスを失った蒼き魔人がフラフラと姿を現す。そのまま流されるように飛び去り、離れた場所へと静かに翼を下ろした。

「何とか、なるもんだな……」全ての武装を撃ち尽したリップが汗を拭う。「さてと」

空になったランチャーを投げ捨てると、沈黙する紅い機体へと近づいた。

『聞こえるかラストイ。——聞こえてないなら返事をしろ』

声が聞こえる。リップ先輩の声。何をしに来たんだろう？

まあ、どちらにしろって。

「——例え先輩でも、邪魔は……させませんよ」

誰であつても、邪魔するのなら俺は容赦しない。絶対に。

『まるつきり我を忘れているわけじゃないようだな。しっかし、ひどいザマだな。一方的にやられちまってさ。もう少し肩の力を抜くよ』

「黙っていてください—— あいつは、俺が倒す」

肩の力を抜け？ ふざけるな。そんなお気楽な話じゃない。

『すぐに周りが見えなくなる悪癖。なかなか治らないな』

「そんなことはどうでもいい。あいつはどこに」

俺の癖のことなんか今はどうでもいい。あいつを、血祭りに上げるのが先だから。

『直撃だったからな。やられてはいないだろうが、それなりのダメージを受けているはずだ』

「俺がこの手で倒すんだ。余計なことをしないで……」

そうだ、あの悪魔は俺がこの手で叩きのめす。でないと——

『なあ、ラスティ。おまえさ——』

先輩は呆れた顔で俺を見る。続けて小さくため息。そして。

『いい加減にしろ！』

怒声。今までに聞いたことない憤慨の声。

『一人で倒すだ？ ふざけるのも大概にしとけ！ てめえ一人が暴れて、勝手にくたばるだけなら誰も文句は言わねえよ。だがな、周りを見てみる。誰が街をこんな風にした？』

街が…… フラムの街が燃えている。悲しみの炎と、憤怒の黒煙を上げながら。

『この炎に姉を焼き殺された少年は誰を恨む？ 大切な人を奪われた恨みを誰にぶつける？ お前の独りよがりで大勢の人がお前と同じ想いをするんだぞ。それでいいのかよ、お前は？』

「それは……」

独りよがり。

分かっていて。そんなことぐらい分かっていた。いや、分かっていたふりをしていただけか。

違う。分からなかった。分かりたくなかった。

けれど、それは、嫌だと思う。多分、それは、嫌なことなんだと思う。

『俺たちの使命は目の前の任務を忠実にこなすことだって、何度も言っているだろう？ お前が個人的な恨みで戦うことをどうこういう気はない。戦う理由なんて人それぞれだ。けどな、俺たちは復讐者である前に、軍人なんだ』

人それぞれ。色々か――

『――なんてな。らしくないこと、言わせるなよ』先輩がいつもの先輩に戻る。『面倒ごとは後回しだ。とりあえずフラムから撤退するぞ。まだ動けるな？』

動けるか？ かるうじて足は動く。左腕は動かない。ステータスモニターは真っ赤。リーダーはノイズだらけ。メインモニターも虫の息。

「大丈夫です。機体に助けられました」

そのとき、俺は気付いていなかった。

蒼き魔人がゆっくりと舞い上がっていたことに。

『俺のほうはかすり傷だ。んじゃ、戻ったら晩御飯でもご馳走してもらうか』

「そんなこと言ったら、また副隊長にどやされますよ」

『都合の悪いときだけ副隊長の名前を出しやがって。っと、隊長に報告を入れないとな』

リーダーが完全にいかれていた俺には気付けなかった。

そのとき既に、蒼き魔人がおぞましい空気の渦をまわっていたことを。

『ありや、繋がらないぞ。向こうに何かあったのか？ いや、そんなはずは……』

「そつえば隊長たちはどこへ？」

『副隊長がやられちまってな。隊長が確認に行った。副隊長のことだから、まず大丈夫だとは思うが』

先に気付いたのは先輩だった。

俺が気付く術を持たないのだから、それは当然のことだった。

『ラストイ、後ろだ!』

「え?」

咄嗟に振り返る。迫ってくる。目の前に。空気の渦が。竜巻が。蒼き翼の魔人が。

『バカ野郎が!』

先輩が俺のほうに、一直線に突っ込んでくる。

傷ついたセイラムはもんどりうって倒れた。機体が万全であれば、こつも簡単にバランスを崩したりはしなかっただろう。だけど俺は、バランスを崩して倒れた。

『……つたく、手間かけさせやがってよ』

それが、通信機越しなのか、心の声なのか、俺の気のせいなのかは分からない。

見上げた先で、先輩が竜巻に飲み込まれる。きりもみ回転をしながら突撃する風の刃が、先輩の腕を、足を、腰を、背中を、バラバラにズタズタに裁断していた。

「……………あ……………あ……………」

粉々に砕け散ったガラス細工のように、先輩のD・Fが夜空へと飛び散っていく。

ついさつき、ほんの数秒前までその顔を映していた通信モニターは、砂嵐になっていた。

「……………思えば動く。そう言っていたはずだよな」

そういえば、そんなことを言っていたっけ?

「何でもいい。あいつを捉える攻撃。空まで届く一撃はないのか」
空まで届く一撃、か。できると思うけど。

「頼む! そうじゃないと、俺は……………」

主人公がやられっぱなしじゃ、格好つかないもんな。それに——
「力を、貸してくれるんだな?」

そういうこと。さあ、集中して。意識を通わせるんだ。目標はただ一つ。

僕とラスティの意識が一つになっていく。そして、叫ぶ。
『行けえええええ！』

セイラムの瞳に、意思の力が宿る。

スラスターからは真紅の蒸気が噴き出る。

全身から噴き出した八筋の炎は、やがて荒れ狂う八匹の竜となる。

夜空を駆ける昇竜が、蒼き翼の魔人を追い詰める。

手負いの魔人。渾身の竜巻を繰り出して息も絶え絶えの魔人が、最後の力で上昇する。

二つある動力の片方は悲鳴を上げていた。

もう少し、あと少し――

アドリアナ隊長が戻ってきた。戦闘は、既に終わっていた。

蒼い翼の影は消え、炎に包まれた街並みが、俺とセイラムを静かに抱擁する。

『ラスティ―― 無事なのね？』

「はい。大丈夫です。俺は」

『そう、良かったわ』隊長は、心底ホッとしたような顔をする。『

あいつは？』

「後一步のところで、逃がしました」

『さっきの炎の柱、あなたとその機体が出したもののね？』

「はい」

『――とにかく、ここから撤退しましょう。イラーノの手当てもしないと』

「副隊長は、無事なんですか？」

『負傷しているわ。意識はあるけれど傷は浅くない。急いで病院に運ばないと』

そう言いながら隊長は、周囲を見回す。

「どうしました？」

『リップの姿が見えないから—— 先に行っただの？』

「先輩なら、いますよ」

『そっちに乗っているのね？』

「違います。先輩なら、ここに——」

右腕に掴んだ、変わり果てたD・F・のコクピットブロックを隊長に見せる。

半分程の大きさに切断され、Lの字にひしゃげて、切断面がどす黒く染まった、先輩が乗ったままのそれを。

隊長の表情が、文字通り凍りついた。そして、刹那の後に今度は、一気に沸騰する。

『あなたは何をボーっとしているの！ 早く運ばないと！』

「運ぶって—— どこに？ 何もかも、みんな炎に包まれているんですよ」

俺は妙に落ち着いていた。取り乱しきって、平静を装いきって、心を落ち着かせようとしすぎて、思考が冷め切っていたのかもしれない。

「どうしろっていんですか？」

『どうしろって……、そうよ、ランドホエールへ戻るわ！ 急いで！』

こんなにくるたえる隊長の姿を見るのは初めてだな。

ああ。やっぱり落ち着いているな、俺。

『取り込み中に失礼するよ。ちよっといいかい？』通信モニターにエルリックさんが現れる。

『今はあなたの相手をしている場合じゃない！ 黙っていて！』

ただでさえ狼狽しているところに横槍を入れられて、隊長が吼えた『落ち着いて。とりあえず話を聞いてくれないか？』困った顔でエルリックさんが言う。

この人は、いつもこんな感じなのだろうか。

『今から送る座標にテク開の救急医療センターがある。受け入れの』

準備をしているから怪我人は大至急そこまで運んでくれないか？」

『——ラストイ、聞こえたわね』感情を必死に抑えながら隊長が言う。『行きなさい、早く』

救急医療センターでは、ルーシエットさんが俺を待っていた。

先輩を乗せたままの、鮮血に染まったコクピットブロックを引き渡した俺は、ひとまずルーシエットさんに謝ることにした。

「機体をボロボロにして、すみませんでした」

「謝る必要なんてないわ。あたなが戦ってくれなければフラムの街はきつと壊滅していた。だから、あたしたちは、お礼を言わないといけないのよ。きつとね」

暗い顔をして俯くルーシエットさん。今日はいつもの白衣ではなく私服を着ているからだろうか。胸の膨らみ、腰のくびれ、スタイルの良さが妙に際立つ。

こんな状態なのに、そういうところに目が行くなんて、まるで先輩みたいだな。

——そうか、そういうことか。

すぐに周りが見えなくなる俺が、今は周りしか見ていないってことか。

目の前に突きつけられようとしている現実から目を逸らそうと、必死になって無駄な抵抗をしているだけか。何が「落ち着いている」だよ。

「あたしは、もう行くわ。セイラムはこちらで回収するからそのままでもいいわ」

俺に背を向けて、ルーシエットさんは小さくこぼした。

「お疲れ様」それから「ごめんなさい」と。

何故謝られたのかは分からなかった。

エルリックさんは結局、姿を現さなかった。

俺は、待合室のソファに腰をかけて非常灯の灯りをぼんやりと見

つめていた。

遅れてきた隊長は、イラーノ副隊長を預けると、足早にセンターを後にしてフラム守備隊の本部へと行ってしまった。本部への報告とか、やることはたくさんあるらしい。

隊は壊滅状態に陥っているというのに、隊長というのは忙しいものなんだなと思う。

それに比べて、俺は一体何をやっているのだろう。

誰がやってくるのを、誰が帰ってくるのを待つというのだろう。

——俺は、どうすればいい。

仇を討つことすらもできなかった俺に、誰が語りかけてくれるのだろう。

そんなことを望むはずがない姉さん。

そんなことを知るはずもない隊長、副隊長。部隊の人たち。士官学校の仲間たち。

——俺は、なんて言えばいい。

かける言葉なんて、あるわけがない。

何もかも中途半端な俺に、そんなことできるはずもない。

手術着を身につけた医師がすぐそばにまでやってきていた。

「患者さんの——」

その先の台詞は、聞きたくない。お願いだから、言わないで……

「意識が、戻りました」

戻った？

「それって……」

「会話が可能な状態まで意識レベルも回復しています。ご本人に状況を説明し、ご理解いただきました。患者さんが面会を希望されています」

「——そうですか。面会相手は、俺でいいんでしょうか……」

「患者さんに確認済みです。どうぞ、あちらへ」

「——分かりました」俺は、ゆっくりと身体を持ち上げようとする。

こんなにも自分の身体を重く感じたことはない。

膝頭を握り締め、身体を引きずり上げるようにして立ち上がる。ほんの数メートル先にある自動ドアが、とてつもなく遠く感じられた。

隊長から連絡が入る。十五分ほどで戻ってくるとのことだった。重い扉が、氷の上を滑るように開いていく。

「聞くの忘れてたんだけどさ、あの可愛い子、ノエルちゃんだっけ。逢えたのか？」

「ニエルですよ。結果なんか聞かなくても分かるでしょ？」

「相変わらず情けない後輩だ」こういうとき先輩は、決まってニツと頬を緩ませる。「みすみす取り逃がすくらいなら、俺が行けばよかったよ」

「ダメですよ。ニエルは先輩みたいな男には付いていきませんか」

「俺みたいなタイプ、ねえ」先輩は右目を細める。顔の中で唯一原型をとどめていた右目の周りだけは包帯が巻かれていない。

「そうか、逢えなかったか——」自分のことを悔しがるように「残念だ」と、先輩は呟く。

「俺のことは、いいでしょ」

「バカ。お前じゃなくて、そのニエルちゃんのことを悔しがったんだよ。上手くやればお前を言いなりにできたかもしれないだろ？」

「言いなりですか……」

そんなことしなくても、先輩の言うことなら大抵は聞いていたじゃないですか。

先輩が「止めておけ」って言うてれば、止めていたかもしれないですよ。

「そういえば、勝負はお前の勝ちになっちまったな」

「勝負？」

「俺の機体はバラバラにされちゃっただろ。後輩に負けたままで終

わるのは実に不本意だ」先輩は「でもさ」と続ける。「でもさ。お前の乗っていた機体。あれは反則だろ。あれがD・F・だったら、お前も俺と一緒になつてたかもしれないんだぜ？」

「——そうですね。じゃあ引き分けにしておきましょう」

「違うな、ノーカウントだ」

「一緒でしょ？」

「お前にとっては一緒でも、俺にとっては違うんだよ」

こういうときは、俺の両肩に手を置いて妙に真面目ぶるんだよな、先輩は。

「最初で最後の勝負が引き分けじゃ、先輩の威厳も何もあつたものじゃないだろ？」

膝が笑う。最初で最後。最後。さいご——

必死に言葉を搾り出す。何かを、何かを喋らないと。

「——あの後どうなったのか、聞かないんですか？」

「聞かないさ。隊長には報告したんだろ？　ならそれでいいよ。俺がお前から聞くのは相談だけで充分だ。この上、報告までされたら俺の身が持たないだろ」

先輩は静かに右目を閉じる。

青い稲妻マークが施された、それこそ棺桶ほどの大きさの機械に、先輩はすっぽりと納まっている。亀が甲羅から顔を出すように、先輩も機械から顔だけを出して横になっていた。

規則的な振動を響かせるその機械は、人体を凍結し仮死状態にするための装置だった。

首から下を凍結することにより損傷部分からの出血や壊死、肉体の崩壊を食い止める。

その間、患者は激痛から開放される。

脳だけ、頭だけが生きた状態。

最期の別れを告げるために与えられた短い時間を今、先輩は生きている。

抑揚のない電子音だけが、静かに先輩の心の声を伝える。

「右半身はほとんど原型を留めていないんだとき—— 心臓が潰れずに済んだのは本当に偶然だったらしいぜ」

「——」
「そんな顔するなよ。お前とこうやって無駄話できるのも、あと少しなんだからさ」

目なんて、見えていないくせに…… 分かった風なことばかり

……

「そっぴや、隊長はどうした？ 副隊長は無事なのか？」

どうなったか聞かないって言ったのに、やっぱり気になるんじゃないですか。

「隊長はいません。もうじき戻ってくると思いますけど——」
「なけなしの声を絞り出す。」「副隊長は手術室に運ばれて—— 意識はあつたから、たぶん大丈夫だと思います」

「そうか。二人とも無事か。副隊長がいなくなれば隊の居心地も良くなるだろうにな。あの人が、俺より先にいなくなるわけないか……
いや、別に居心地が悪いと言っているわけじゃないぞ」

分かっていきますよ。そんなこと、言われなくても分かっていきます

——

「俺にはさ、弟がいてな。四つ歳の離れた弟が」

思い出したように、先輩は唐突に話しを始める。

先輩に俺と同じ年の弟がいるだなんて、知らなかった。

「よく二人で悪戯をしてさ。くだらないことばっかだけど、これがなぜか、すぐ親父にばれるんだよな。説教が長い親父でさ、怒ると自体が目的じゃないかといつも思っていたよ。俺は兄貴だろ？」

弟と一緒に説教されるんだったら、庇ってやろうと思っっているわけだ。ところが、弟は逃げ足の速い奴でさ。いつの間にかいなくなっちまうんだよな。要領がいいというか、機器察知能力が高いという

か」

「弟は生意気で要領がいいクセに、単純な奴でさ。とにかく一生懸命なんだよな。やれば出来るやつなのに、性格もあってか失敗も多くてさ。何かやらかす度に凹んでは、俺に泣きついてくるわけだ」
それは、困った弟さん……ですね。

「まいったくだ」

きつと先輩は、風の海のように穏やかに微笑むだろう。

「でもさ。俺もまんざらじゃないわけだ。頼りにされているなっと思つと、それに応えたくなるし、悩みを乗り越えて成長する弟の姿を見ると嬉しいわけだ。負けてられるか、とも思つしな。相乗効果つてやつだな」

「……いい兄弟じゃないですか」

「だろ？ こんなこと、弟の前じゃ恥ずかしくて言えないけどな」
ただの電子音。機械の声なのにそれは、とても恥ずかしそうに聞こえた。

「……俺が弟だったら、恥ずかしくて聞いてられない。聞こえないふりでもしますよ」

「そうだろうな。きつとそう言うだろうな」

俺の中の先輩が、クックククと笑っている。

「母さんも弟こと、随分と気にかけていてさ。昔の自分を見ているみたいで危なっかしいって、いつも言いながら見守ってるわけだ」
「そうですか」

「俺がいなくなったら母さん、大変だろうな。あの人は優しいから」

「先輩」俺は決壊しそうになる涙腺を必死で押さえつけて言う。「何か。何か伝えておくことはありますか？ 必ず、絶対に伝えますから。約束します」

「そうだな」

——沈黙。長く長く、とても短い時間が過ぎる。

「それじゃ、頼む。弟に伝えてやってくれ」

俺は、二回大きく息を吸って吐き出した。

「母さんのこと、頼むって。母さんは頑張り屋で責任感が強いから、誰かがフオローしてやらないときつと倒れてしまふ。何もかも一人で抱え込んで、疲れきってしまう。そうならないように、あの人を支えてやるように伝えてくれ」

分かりました——俺が、必ず。

「それからもう一つ。これは弟へ」

リップ先輩は、いつものちよつと人を小バカにしたような、諭すような、兄貴ぶった、先輩ぶった口調で言った。

「俺は、お前の足枷になるつもりはない。死んでまでお前の肩に乗りかかるつもりもない。向こうで楽しくやるつもりだから、くだらないことでいちいち呼ぶなよって」

涙が溢れ出す。口は空気を噛むばかりで、言葉なんか出てこない。

「お前の姉さんも、俺と同じ気持ちだと思う」

見えない手が俺の肩をポンと叩く。

「お前だってそれは痛いほどに分かっているんだろ？ そりゃ、大好きな姉さんのことだもんな。——お前はただ、振り上げた拳の下ろし方が分からなくなっているだけなんだから」

頭を、いつもみたいに、クシャクシャと撫でられる。

「だから、必ず自分の気持ちに自分自身で決着をつける。答えを見つける。どんなに遠回りをしてでもいいから、必ず自分の手で」

「はい……………」

懸命に、喉の奥から引きずり出すように声を出し、何度も頷いた。

「ったく、ひどい顔をしゃがって——笑って終わりにしようぜ。な？」

「そうですね……そのほうが俺たちらしいや」

「俺たちらしい、か……」

「はい」

「んじゃ、俺らしく最後の先輩命令だ」

「なんですか？」

「俺たちの母さんが外で待っている。悪いけど、呼んできてくれな
いか」

「分かりました」

俺はリップ先輩に背を向ける。

先輩は、力いっぱい笑顔で、目を細めて俺の背中を見ているんだ
ろうか。

『今まで、』俺たちの声が重なる。

先輩にかける言葉がない？

バカを言うなよ。

あるだろう。

何よりも、どんなことよりも、絶対に言わないといけない言葉が。

そう、簡単なことじゃないか――

「ありがとうございました」

「サンキューな。強く生きろよ、ラストイ」

第四章 ラスティと二人の同期生 ー 特別部隊結成 ー

第四章 ラスティと二人の同期生 ー 特別部隊結成 ー

スイレノ島

リムリア連邦の遙か西の海上。 気象観測施設と海洋調査の中継基地のみが存在する孤島。

数名の駐在員以外に人の出入りがない緑の楽園。

島と本土の繋がりには月に一度の定期船だけであり、文字通りの絶海の孤島であるスイレノ島の現状を知るものは、限りなく少ない。

フラムを襲った蒼き翼の魔人がそこにいたとしても、それは変わることはなかった。

海洋調査基地のオペレーショングルームに一人の男の姿があった。

一人たたずむのは、蒼き翼の魔人と共にヨルズン山に姿を見せていたオーランド。

オーランドはモニターの向こうに座る男となにやら会話をしている。モニターの向こうに腰を下ろしているのは気品溢れる長髪の男。

『フラムでは芳しくない結果に終わってしまったって実に残念だよ、オーランド君』

男は艶のある漆黒の長髪をかき上げながら、達観した様子でそう言った。

「セイラムがあればどのスペックを発揮するのは全くの想定外だった。それが全てだ」

オーランドは淡々と淡白に自分の考えを述べる。

『こちらの情報だと、セイラムをチクチクと痛めつけている間に思わぬ反撃を受けて敗れた、となっているな。出し惜しみせずに、最初から潰しにかかれれば済んだ話ではないのか？』

「セイラムを破壊してしまっただけ意味がない。あれを鹵獲すること

が目的だったのだからな。その指示のせいでパイロットが臨機応変に対応できなかったことは認めるが――」

『所詮、人形ではその程度が限界ということだろう。で、君の今後の方針を聞かせてもらおうか。分かっていると思うが、君の宿願達成を手伝うために、それなりに骨を折っているわけだ。その結果が「リムリア随一のリゾート都市を半壊させただけ」では話にならないよ』

長髪の男は落ち着き払ったまま、少しだけ語気を強めて言った。

「それは承知している。次の機会にこそ成果を見せることを約束する。結果を出せばそちらも納得するのだろう?」

『どこまでも強気だね。君ならきつとそう言うと思っていたよ。そう思っ、既に手は打ってある』男の口元が緩む。そして、冷酷な微笑を浮かべてオーランドを見下ろす。『そう遠くないうちに、あのセイラムを含む国防軍の攻略部隊がスイレノ島へ赴くことになるだろう。そのときにこそ、君が言う「成果」というものを見せてもらおうだろうか』

「国防軍がここに? ——まさか、情報をリークしたのか?」

『勘違いをしてもらっては困るな。国防軍だってバカじゃないってことだ。フラムから真っ直ぐスイレノ島には戻さずに、帰還ルートを変えて回り道をさせているようだが、無駄な小細工だってことだよ』

オーランドは眉間を震わせる。

戦闘で受けた多大なダメージが、撤退する際のステルスモードを不完全なものにしてしまったのだろう。

「セイラムを含む攻略部隊と言ったな。そんなに都合よく話が進むのか?」

『そこは少し手を入れさせてもらっよ。そのほうが君にとっても都合がいいだろう?』

「——いつごろの話になる?」

『そう遠くないうちに、と言っただろう。それをどう受け取るかは

君の自由だ。それに言ったじゃないか。「次は成果を見せる」と。早く結果を出したいのだろう?」

「――承知した」

『そうそう、ちょっとしたプレゼントを送っておくよ。カスタマイズして好きに使ってくれ』

「――感謝する、と言っておこう」

『素直な気持ちは大切だ。それでは、健闘を祈る』

暗くなったモニターを睨みつけてオーランドは拳を握り締めた。

「――オーランド?」

二人のやり取りを横目で見ていたおかつは頭の少年が口を開く。メガネ越しにオーランドを見上げ、訝しげな表情を浮かべながら少年は言った。

「国防軍の奴らが、ここへ来るの?」

「――そうだ。そのときこそジル、君の力が必要になる」

「分かっているよ」ジルと呼ばれた少年は甲高い声で応える。

「いい子だ。では、今日のメニューを始めようか。調整はもう最終段階に入っている」

オーランドはジルのおかつは頭に手のひらを乗せた。

「ホワイトはいつごろ帰ってくるの?」

「明後日には帰ってくる予定だ」

「分かった」ジルはニツコリと頷き、穢れのない瞳でオーランドを見つめた。「僕が戦えるようになれば、ホワイトたちが戦う必要は無くなるんだよね。そのためだったら特訓だってなんだってする。」

そうさ、国防軍の奴らは僕が倒すんだ」

つぶらな瞳に優しい視線を返してオーランドはジルの背中をポンと叩く。

勇んで駆け出していくジルの背中に冷徹な視線を浴びせながら、オーランドが吐き捨てる。

「予定とは違う結果になるが仕方あるまい。だが見ている――」

僕はラスティの横顔を見ていた。

興奮して叫び、吼える彼を。

好きなように弄ばれて、憤慨する彼を。

説得され、我に返る彼を。

大切な人の無残な姿を見上げて、愕然とする彼を。

打ちひしがれ、力を求める彼の姿を見て、僕は力を貸したいと思った。

そして、彼と心を通わせた。

あの炎の竜は、僕たちの想いが形となって現れたもの。

あの蒼き翼の魔人を倒すには至らなかったけれど。

「これはどういうこと？」そう言いながらも答えの予測はできていた。「出番というのは、こういうことだった。違うかい？」

ヴォル・ポーニは、僕の質問に応える気がないようだった。

「目が覚めたみたいだナン？」

キャット・シーフが床をもそもそと愛らしく転がっていた。

「それはこっちの台詞だよ」

「ナン？」シロネコは不思議そうに首をかしげる。

「せつかくいいところだったのに、ぐっすり寝ちゃって残念だったね」

出番がどうかを抜きにしても、これまでで一番の見せ場だったことは間違いない。

その一部始終を見逃すなんてどう考えてももったいないことだと思う。

「寝たりなんかしてないナン。せつかくの出番を棒に振るようなことはしないナン」

「そうなんだ。じゃあ君も一緒にいたのかな？ 全然気付かなかったけれど——」

「変なこと言わないでほしいナン！」

そう言うと、キャット・シーフはプイと僕に背中を見せる。

なんだか分からないけれど、キャット・シーフにも「出番」はあ

ったようだ。

ネコというのは、丸まって目を閉じていても視覚は働いているのだろうか。

あぐらをかいて背伸びをするネコを、ネコと呼ぶのが間違いなのかもしれないが。

あれから、二日が経った。

テレビの報道は、リムリア随一の観光都市を襲った大火災の様子を大々的に報じている。

『……お伝えしておりますように、新鋭テクノロジー開発センターフラム支部にて開発中の新型兵器の暴走事故を発端とするフラムの大規模火災は、発生より四十時間以上を経てようやく終息を迎えました。まもなく政府から安全宣言が発表されるものと思われます』
ニュースキャスターは三十分おきと同じ内容を繰り返している。

『なお、今回の大規模火災を引き起こしたと思われる新型兵器は、駐留していた国防軍陸戦部隊及び、フラム守備隊の手により撃破されました。激しい戦闘が行われた商業地区一帯の七割が消失し、死者行方不明者を合わせるとその数は二百名を超えています。まだ戦闘の爪跡が残るフラムと中継が繋がっています』

映像が切り替わり、焼け落ちたフラムの街並みが大写しになる。

『はい、こちらフラム放送センターです。私の背後では未だに懸命の救助活動が昼夜を問わずに続けられております。先ほど入りました情報によれば……』

時計の針は十四時を少し回ったところだった。

俺はアドリアナ隊長の補佐という形で、テク開フラム支部の会議室にいる。

物凄く形式的な物言いを見ると「副隊長代行」ということになるの

かもしれないが、俺自身を含め誰もそうは思っていないだろう。よ
うするに雑用係というわけだ。

「テレビはずっと同じことの繰り返しね……」隊長は静かにため息
をつく、物憂げな顔でテーブルに頬をつける。そして、そばに転
がるリモコンを指でピンと弾いた。

「仕方ないでしょうね。大事件なわけですから」

テーブル上を滑るリモコンを見ながら俺はそう応える。

「こんな嘘八百な報道を繰り返されて、うんざりしてない？」

「うんざりはしていますよ。だからといって、どうにもならないす
し。それに——」

「それに？」

それに——

政府発表や報道が真実とは程遠いということは、身をもって知って
いるから。

驚いたり、ショックを受けたりするのはバカバカしいことだから——

「——何でもありません」

隊長は俺のほうを少しだけ訝しげな目で見たけれど、それ以上は
何も聞いてこなかった。

そして、少し生気のうせた顔をゆつくりと上げると、今度は大きく
ため息をついた。

「でも、ラステイがしっかりしているのは意外だったわ—— リッ
プがあんなことになって、フラムの街もひどいことになって。あな
たはもつともつとショックを受けると思っていた。ひよつとしたら
立ち直れなくなるかとも思ったのよ……」

「——」

「本当は、私がもつとシャンとしていないとダメなのにな……」

「——」

ショックですよ。ショックに決まっているじゃないですか。「シ
ョック」なんていう陳腐な言葉で感情を表すのもバカらしいほどに
ショックは受けました。でも。

「俺なら、大丈夫です」

そう、俺は先輩に頼まれたんです。

だから、隊長。あなたのそんな顔は見たくない。

早くいつものように、涼しくてちよっとお茶目な笑顔を見せてください。

俺たちを呼び出した張本人、テク開のエルリック代表は三十分遅れて会議室に姿を見せた。

「遅れてしまって申し訳ない。色々とやる事が多くてね。大分待たせてしまったかい？」

「ご苦労様です」

隊長は素早く立ち上がって敬礼する。俺もそれに続く。

「ご苦労なのはお互い様だよ。忙しさならそっちも負けていないと思うけど？」

「お気遣い、ありがとうございます」

フツと微笑を浮かべてエルリックさんは着座する。

促されるようにして俺たちも腰を下ろした。

「さて。そのテレビもずっと言っているけれど、諸悪の根源に仕立て上げられたテク開フラム支部にまでわざわざ来てもらった理由は分かるかい？」

イスを回転させながら流し目でエルリックさんが問いかける。

相変わらず、ふざけているのか真剣なのかがさっぱり分からない。

「事情聴取ですか？」 神妙な面持ちの隊長が応える。

「ま、普通はそう考えるかな。でも、事実は小説より奇なり。ようするに外れ。そもそも、街を救った正義の国防軍が、悪のテク開に事情聴取をされるのは筋違いだろう？ 正解を言っちゃおうか？

それとももう少し考えてみるかい？」

エルリックさんは糸のように目を細める。

いかにも楽しそうな表情。ワザとトゲのある言葉を選ぶような態度。

「——クイズに付き合うつもりはありません。用件をお願いします」
そのまま放っておけば「つまらない内容なら容赦しない！」とでも続けそうな雰囲気だ。隊長にはあった。どうやらカチンときているらしい。もちろん俺もただ。

「アドリアナ・ローラン中尉」

いきなり、唐突にエルリックさんの声色が低く重厚なものへと変わる。

そのあまりの変貌ぶりに俺も隊長も息を飲んだ。

「リムリア連邦国防軍、陸軍第十四機動部隊の解散を君に通達させてもらうよ」

「……………え？」

そのときの俺は「呆気に取られる」を辞書で引いたような顔をしていただろう。

きつと隊長も。

「国防軍の緊急編成委員会での決定事項だからね。じきに正式通達が出ると思うよ」

なんでこの人の口からそんなことが語られる？

国防軍とは関係のない、テク開フラム支部代表であるこの人から。同じくこちらでも公式発表前の情報だけど、技術開発省ではテク開フラム支部の破棄が決定された。緊急医療センターの病院機能だけは残すけれど、それ以外は全部まとめてフラムから撤退することになったわけだ」

それってつまり。

「今回の件に関係した組織はまとめてお払い箱。そういうことですか？」

努めて平静に、隊長は口を開く。

「半分は正解。でも完答には半分足りないね。残りを考えて…………いや、続けて話すからそういう怖い目で見ないでもらえるかな？」

隊長の眼光に怖気づいたのか、ふりなのは分からないけれど、エルリックさんは続ける。

「テク開フラム支部の人材、資材の全ては国防軍へと吸収・合併されることになった。併せて、旧テク開フラム支部、旧第十四機動部隊＋補充人員で新部隊が結成されることになった。新部隊は既存の命令系統からは外れた独自部隊、即ち、特別部隊として動くことになるみたいだね。——これが回答だよ」

「え？」

「はあ？」

ポカンと口を開けっぱなしの俺たちを見てエルリックさんはニヤリと笑う。

「つまり、僕と君たちは、めでたく同じ部隊の仲間になるわけだ。理解してもらえたかい？」

「ちょ、ちょっと待ってください」たまらずに隊長が言う。「——理解できません。今の話が本当だとして、でも、どうしてそれがあなたの口から？」

俺だって同じ気持ちだ。

「僕が新部隊の司令官だから、ではダメかい？」

「司令官？」

「そう、司令官。——ようするに、貧乏くじを引かされたってわけさ。フラム支部の代表をやっていたのが裏目に出た感じだね。といっても、軍事という分野に関して素人の僕じゃ、実務を回すことなんてとてもできない——」ふう、とエルリックさんは嘆息する。「そういうわけだから、今後は頼むよ。アドリアナ『隊長』」

「——そういうことですか」

「ルーシエットに散々言われたよ。『それじゃただの丸投げだ』ってね。確かにその通りさ。もちろん、責任は全て僕が取る。司令官なんだからそのくらいは当然だろう？」

意味深な笑顔を見せるエルリックさん。いや、エルリック司令と呼ぶべきか。

俺には、この人の真意が、想いが、全く分からない。

そして隊長は、必ず——

「断る理由はありません。もちろん、上からの正式通達を待つてからですが——」

「オーケイ。じゃ、先に司令として最初の指示を出しておくよ」

隊長は、責任感の強い人だから。

数日経ち、俺たちはフラムの街を後にする。

この数日は、あつという間に駆け抜けていった。

俺はできうる限り隊長のサポートをし、雑用をこなした。

支える、と言うにはおこがましいけれど、それでも何かをしたかった。

俺は、小さくなっていくフラムの街をランドホエールの甲板から眺めていた。

復興作業へと向かうトラックの列が次々と街へ吸い込まれていく。

街は、傷ついた身体を少しずつ癒し始めている。

太陽は、あの日と同じようにフラムを照らしている。

「ここにいたのね、ラスティ」

背中越しに隊長の声が聞こえた。甲板を蹴るヒールの音がゆっくりと近づいてくる。

「風が気持ちいいわね。あなたも風に当たりにきたの？」

隣に立った隊長の前髪を、吹き抜ける風がな撫で上げる。

「別に、ただのサボリですよ」

「——上官の前で堂々と言う台詞じゃないわね」

隊長は手すりに両肘を付き、顎をその上へと乗せる。そして眩しそうに目を細めた。

いつもの香水の香りがしないこと以外は、普段通りの隊長に見えた。「さぼっていても、怒る人がいませんからね」

イラーノ副隊長は、いや、イラーノ元副隊長は腰椎骨折を含む全治半年以上の重傷で、結成される新設部隊には名を連ねてはいなかった。

「そうね。イラーノが抜けるのは残念だけど、彼にはしっかり療養してもらわないと。元々、私の下に付くような人ではないのだから」前に聞いたことがあった。イラーノ副隊長は将来の幹部候補なのだと。アドリアナ隊長の下に付いたのも、若い女性隊長を支えたという実績を作るためなのだ、と。

「まあ、俺はあまり怒られた記憶はないんですけどね」

——そう。いつも、先輩が怒られてくれたから。

「新しい副隊長は隊長の同期だっていう話でしたよね？　どんな人なんですか？」

補充パイロットの話は聞いていた。一人は隊長の士官学校の同期で、その人が副隊長を務めるということ。もう一人は、その副隊長お気に入り女性パイロットだということ。

「どんな人か、か……」難しい質問だけど、と隊長は遠い目をして言う。「物凄くクセが強くて、好き嫌いの分かれるタイプの男よ。」

そして、何よりも、物凄く強い人」

「物凄く強い、か」

「士官学校時代、何をやってても彼には勝てなかった。いつもコテンパンにされていたイメージしかないわ」そして隊長は、今はどうかしらね、と笑う。

「強いつて、どういうことだと思いますか？　相手をやっつける。コテンパンにする。それが強いつてことですか？　強く生きるって、そういうことなんですか？」

なんでそんなことを聞いたのか分からない。隊長が何も迷うことなく「強い人」と口にするのを見て、その人に嫉妬しただけなのかもしれない。

「強さ、なんて人によって違うもの。誰かが決めることじゃない。

だから——」

だから。

隊長の言葉はそこで止まった。——沈黙。そして。

「私をもっと強ければ、こんなことにはならなかったかもしれない」

「不甲斐ない隊長のせいで辛い思いをさせて、ゴメンなさい」

なんで隊長が謝るんですか？ 隊長が謝る理由なんてただの一つもない。

それに比べて、俺は一体どれだけの……

「リップはね、あなたのことを『将来のエース』って言っていたわ。私も、そうなってもらいたいと思っているわ。けどね。今のあなたは一人の新米兵士なの。今は弱くてもいい。誰かに頼ってもいい。背負う物が重いというのなら、私が一緒に支えるから」

言葉が、先輩の言葉が頭の中にこだまする。

——母さんのことよろしく頼む。

「これは、リップが最期に言った言葉」隊長はスカートをギュツと握り、薄く目を閉じる。「『ラストイが凹んでいたら、喝を入れてやってくださいね』って。最期まであなたのことがかり気にかけていたわよ」

俺には「隊長のこと頼む」で、隊長には「俺に喝を入れる」か——世話焼きの先輩らしいといえば、らしいよな。まったくさ。

「私たちが戦った結果、たくさんの命が失われたかもしれない。でも、救われた命はそれ以上に多いわ。私たちが、あなたたちが戦ったからこそフラムの街は救われた。あなたが負けていたらフラムの街は失われていたかもしれない。私も死んでいたかもしれない」

俺は、黙ったまま小さくなるフラムの街を見続けた。

「私たちが築く橋は、たくさんの命に支えられた橋。私たちが架けた橋は、たくさんの人を未来へと導く橋」噛み締めるように隊長は言葉を綴る。「士官学校時代の先生から受け売りなんだけど、軍人とはそういうものだと思つ」

それが、隊長の強さ？ そうなのかもしれない。

「——そういえば、フラムが完全に復興するには早くても一年はかかるって、どこかの評論家が言っていたわね」努めてあっさりと、隊長は言った。

「評論家って、普段は何をしているんですかね。何かあった時期にだけ、我が物顔で偉そうに喋って、それだけでお金を貰えるのだったら楽な仕事ですよね」

「そうね」

こうして穏やかな表情をしている隊長は、綺麗なお姉さん以外の何者でもないのに。

「それじゃ」と、俺の頭をポンと叩き、隊長は甲板を後にしていった。

公にサボりを認めてもらい、一人甲板に残った俺は、地平線に沈んでいくフラムの街を見送った。何気なくポケットを探ると、なにかが指に当たる。あのネックレスだった。

紅いガラス玉は、俺のことをからかうかのようにキラキラと輝いている。

「無事だよな—— 次に逢ったら、もう少し気の聞いたことと言えるようにするからさ」

国防軍マリアノ基地。

リムリア連邦の西の端。人の横顔の形をした半島の鼻先にあるその基地が、俺たちの新しい拠点となる。到着早々、俺はアドリアナ隊長と共に、エルリック司令に連れられて会議室へと向かっていた。新任パイロットとの顔合わせをしておく、ということらしい。

新しく補充されるパイロットは二人。

隊長の同期で、副隊長に就任するロブソン・レリック中尉。

そして新副隊長お気に入りの女性パイロット、リンダ・スインフォード准尉。

リンダの名を聞いたときには、正直言って面食らった。

同姓同名の女性パイロットが他にもう一人いるとは思えない。であれば、そのリンダは間違いなく、俺の士官学校時代の同期であるリンダ・スインフォードなのだろう。

「同期の女の子との再会に緊張している？」

前を歩く隊長が、わざとらしく聞いてくる。

「再会といっても、一年も経ってないですから」

そう、リンダと会うのがどうというわけではない。俺が面食らったのは、彼女がロブソン副隊長のお気に入り、ということだ。あんな、いつも周囲を威嚇しているような女のどこが気に入ったのだろう。「寄せずのリンダ」のどこがいいのか、俺にはさっぱり分らない。

会議室の前で足を止める。そして隊長が扉をノックする。

「入ってるぜ！」野太い声がすかさず返ってきた。

隊長は「ふう」と息を吐くと静かに扉を開けて言った。「トイレじゃないんだから」

会議室には一組の男女の姿があった。

男のほう、垂れ下がった黒髪のパニーテールと、それには不釣り合いなほどに鍛え上げられた肉体。いかにもいかついこの大柄な人がロブソン副隊長なのだろう。首もとの汗を拭いながらロブソン副隊長は息を吐く。黒いタンクトップが汗を吸って分厚い胸板に張り付いている。全身から湯気を発するその姿は、観るものを圧倒する迫力を醸し出していた。

「暇があれば筋トレをするのは昔のままね。これからミーティングだつていうのに、少しは考えてもらいたいものだわ」呆れたように隊長が言い放つ。

「おやおや。同期の出世頭、アドリアナ大尉殿ではありませんか。いや、隊長閣下とお呼びしたほうが良かったですか？ すっかり重役出勤が板についているようで」

まったく悪びれた様子も見せずにロブソン副隊長はニヤリとする。ほんの数秒間視線を交錯させた後、隊長が先に表情を崩した。

「相変わらずね、ロブソン。七年ぶりだっていうのに」

「こちとら、あちこちの資料やら記事やらでお前の名前を見かけるからな。月に一度は顔を合わせている気分だよ。にしてもアドリア

ナ。お前太ったんじゃないのか？」

「失礼なのも変わらないわね。体重は変わっていないわ。それに私、着膨れするタイプなの」

そうかい、という顔でロブソン副隊長は頭をかいた。そして傍に立つ女性、リンダに対して言い放つ。

「だそうだが、リンダちゃん。お前さんの憧れのアドリアナさんは、着膨れするんだとさ。つるつぺたなリンダちゃんは、まず胸の膨らませ方から勉強させてもらわないとな」

カッカッカツとロブソン副隊長は笑う。

おいおい、なんだこの人は。クセが強いという以前に、おかしくないか？ これから会議をするというのに筋トレで汗だくになっているし、女性に対して「太った」だの「つるつぺた」だの、デリカシーのかけらもない。

そもそも、リンダに胸のことを言うとは、なんて命知らずな……

「つい痛えええ！」

ほら、言わんこっちゃない。

リンダの鋭いニーキックが太ももへと突き刺さり、ロブソン副隊長は悶絶する。

「この程度で悶絶するなんて、役に立たない筋肉の鎧ですね。それに私、マッチョよりスリムな男性のほうが好みですから。そこにいる——」そう言っつて、リンダは俺を指差す。

「はあ？」

俺に気付いたリンダの一言目がそれだった。「はあ？」だ。

「なんでラスティがここにいるのよ？」

何でも何もないだろう。同じ部隊だからに決まっている。今さら何を——

「さては、その子に教えなかったのね。同期のラスティと一緒にいるっていうことを。相変わらずひねた性格なこと」隊長は呆れたようにロブソン副隊長に言う。

「そのほうが、面白いだろう？」

隊長にそう言ったロブソン副隊長は、今度はリンダのほうを向く。
「しかし『はあ』なんて可愛らしい声上げちゃってよ。でもな、リンダちゃん。俺だってお前みたいなのより、アドリアナみたいなプニプニ柔らかい女のほうが好みで……」

隊長とリンダから同時に殺気が噴き上がる。

プロの格闘家顔負けの流れるような動作から繰り出される、魂の乗った拳が副隊長を襲う。

哀れ、副隊長の顔面は、二つの鉄拳によってサンドイッチにされてしまった。

間違いない。

この人はおかしい。

そして、俺はこの手の人が苦手だ。好きにはなれないだろうな。

こうなることが分かっていたのか、状況を楽しんでいたのか一人席に座っていたり顔のエルリック司令が仲裁に入り、俺たちは向かい合わせで座席に着いた。

俺の隣には、士官学校時代と何の変わりもないリンダが座っている。

切れ長のツリ目。トマトのように真っ赤な髪の毛。特徴的なサイドテールを左手の人差し指にクルクルと巻きつけながら浮かべるしかめっ面。

常に不機嫌そうにしているところもちつとも変わらない。

「さて。落ち着いたところで始めようと思うけれど、いいかい？」

エルリック司令は俺たち一人ひとりの表情を見渡すと、早速説明を始めた。

「手始めに特別部隊結成の経緯から話そうと思うのだけど、そのためにはフラムで起こった出来事の真相を知ってもらわないといけないわけだ。そこで、リンダ君。簡単にでもいいから君の知るフラム炎上事件の概要と顛末を話してもらえないかい？」

「テク開の実験機の暴走が引き起こした不幸な事故です。実験機は

軍の新型の手によって撃退されました。原因となったテク開フラム支部は解体されました」

リンダは公式発表の内容をそのまま口にした。

「うん。時事問題の回答ならばそれで正解。満点の答えだね。でも、それだと大悪党であるテク開フラム支部の責任者であった僕が司令官としてここにいるわけがないだろう？ テク開の実験機、という部分を噛み砕いていかないと話は始まらないんだ。そうだろう、ラストイ君？」

噛み砕く——か。確かにその通りだろうな。気は進まないけれど。

エルリック司令の口からあの日の出来事が語られた。所々を俺と隊長でフォローしながら。

「公式発表と全然違うじゃない——信じられないわ」

啞然として言葉を失うリンダに対してロブソン副隊長が人差し指を立てる。

「あながちそうでもないぞ。そこにいる彼が動かした『セイラム』って機体、結果的に国防軍のものになったわけだろう。となると、軍の新型が暴走した兵器を撃退したって部分はあながち嘘ではなくなるわけだ。仕上げに、『暴走したテク開の実験機』を『謎の飛行型兵器』に置き換えてみると」

「——フラムの街を襲撃した『謎の飛行型アンノウン』に対して、ラストイが搭乗した『今は国防軍所属』の『新型機セイラム』が応戦し、これを撃退した」

「な、言ったとおりだろ」

「そんなの、後付で無理やり当てはめただけです」納得のいかないリンダが噛み付く。

「公式発表なんてそんなものさ」エルリック司令は他人事のように言っただけだ。「政府に都合の悪い部分のみ消し、責任は余所へと押し付ける。そして責任を取らせるついでに、自軍の戦力を増強

する。責任を押し付けられる側としては堪らないけれど、極めて好意的に言うならば『優秀な政治的判断』というやつになるんじゃないのかな？」

それでも納得のいかないリンダは、サイドテールを揺らしながら首を捻る。

「国防軍が活躍したと発表すれば都合がいいのは分かります。けれど、謎の飛行型に襲撃されてそれを撃退した、と発表しても政府は困らないはずですよ。責任をテク開に押し付ける理由が分かりません」

「それはだな、リンダ」家庭教師が生徒を諭すように副隊長が応える。「『謎の飛行型』にフラムを蹂躪された、となれば軍の信用はガタ落ちだ。たった一機相手に何をやっているんだ、とな。そうなると、国土拡大推進派の現政府は非常に困るわけだ」

「国の拡大よりも国家防衛を優先しろ、という声が高まるからですか？」

「そういうこと。あの公式発表は非難の矛先をすりかえるための捏造というわけだ。テク開に責任を押し付けた上で、諸悪の根源であるフラム支部を即座に解体する。ただし病院は残して地域に貢献しますと。そうすれば政府は迅速に対応したと評価はされても、非難される可能性は低い」

「責める対象がなくなれば、それ以上は何も言えなくなってしまうから？」

「ま、さっきの話を聞いた限りの推測でしかないわけだが」

得意げに自説を語るロブソン副隊長を見ていたアドリアナ隊長が、懐かしそうに口を開く。

「頭の回転の速さも相変わらずみたいね」

「お前と比べたら、誰だって相変わらずだよ」

隊長が何かを言葉にしようとしたところで、エルリック司令が話を止めた。

「それでは、本題に入ろうか」

俺たちは司令へと目線を戻した。

「ここまで話せば予想くらいできるだろうけど、一応聞いておこう。特別部隊結成の目的は何だと思う、ラスティ君？」

——予想はできていたし、それに向けての覚悟も決めていた。

それでも、俺の心臓はドクンドクンと波を打ち始める。

黙って座っていらなくなるような興奮を抑えて、俺はそれを言葉に変換する。

「目的……それは、そう。あの空飛ぶ機体を、倒すこと——」

「はい、正解」エルリック司令がコンマ何秒で俺の言葉を肯定する。

「それに関して何か聞きたいことはあるかい？」

「あいつがどこへ行ったのか、行方は分かるんですか？」隊長が手を挙げた。

「行方は軍諜報部が追っているよ。僕の予想が正しければ近いうちに判明するはずだけどね」

「近いうちに分かると思う根拠は？」

「隊長さんは、あれがフラムから飛び去るところを見なかったかい？ 立て続けにオーバードライブをした影響からか、飛行を維持するのが精一杯という感じだった。あの状態では航続距離は伸びないだろうしステルスモードも使えないはずだからね」

「——だから、捕捉できるはずだと？」

「そういうこと」エルリック司令は目じりを下げながら、いつても、と続けた。「といっても、今日明日の話にはならないだろう。

当面の間みんなには部隊内での連携強化と新型の調整にあたってもらおうと思っている」

司令は部屋の隅に置かれた電話を手に取り、ルーシエットさんを呼び出した。

「こんにちは。整備班長を務めるルーシエット＝ハーミットです」
「よろしく願います、と頭を下げたあとルーシエットさんは、トリードマークの丸メガネをクイツと持ち上げる。」

ロブソン副隊長がヒューと口笛を、特に彼女の胸元に向けて鳴らした。

改めて見ると、ルーシェットさんの胸がいかにも殺傷力の高い凶器であるかが分かる。

リンダは殺気混じりの凄まじい視線を副隊長にぶつけていた。

「自己紹介はほどほどにして、説明を頼むよルーシェット」

「了解であります、総司令殿」

ルーシェットさんはエルリック司令に対してわざとらしく敬礼をして、舌をペロツと出す。

そして彼女は持参した携帯端末をプロジェクターへと接続する。

壁に取り付けられたスクリーンには二機の人型兵器が映し出された。「表示されたこの二機は、テク開で開発中だった次世代型D・Fの先行試作型です」

「ようするに次世代型D・Fの試作型、というわけさ」エルリック司令が合いの手を入れる。

「向かって右側、白いほうは近接格闘仕様の試作N型です。Gen 3の1・八倍の高出力に加えて、各関節に使用するモーターの全面刷新によって機体の追従性も1・四倍となっています。固定装備として頭部バルカン砲と、脚部のレールカノンを搭載。携行武器としては新型のレーザーブレードを採用しています——そして、N型最大の特徴は、両腕に装備した耐熱セラミック素材ジルコニア製の大型ツインクローです。従来機では搭載不可能だった装備ですが、N型の出力があれば、クローの重量に振り回されずに使用することが可能です」

一気に喋り、一呼吸置いてルーシェットさんが続ける。

「次に、左のダークグレーの機体が遠距離砲戦仕様のD型です。こちらに関しては機体の機本性能は従来機と変わりません。大きく変更されたのは照準システムです。制御プログラム本体を一から再設計し、理論的には射撃精度が八割向上します。固定武装としてフルカスタマイズのFFPSスナイパーライフルを装備。新型照準シス

テムへ直結すれば、搭乗者の技量次第でミリ単位の狙撃が可能です。あとは、背中に搭載された迫撃砲がありますが、こちらは牽制用と思ってもらえれば」

速射砲のような説明に、アドリアナ隊長は苦笑し、ロブソン副隊長は何やら思案顔、リンダは変わらずに不機嫌な顔をしている。

「元々フラム支部で開発していた機体をそのまま持ってきたってわけさ。性能テストも兼ねて部隊で使おうかと思ってね」エルリック司令が親指でスクリーンを指差した。

「片方は腕よりも大きな鉤爪、もう一方は身長よりも長いライフル。一筋縄ではいかない機体みたいね」隊長が呟くように言う。

「プロトタイプだから極端なコンセプトになっているのさ」おどけた顔で前髪を触りながら司令が応える。「量産される際にはこんなふざけた、じゃなくて、大げさな装備が採用されることはありえないだろう？」

「確かにふざけた装備だな」腕組みをしたロブソン副隊長が隊長に視線を送る。「ふざけた装備といえば、ストレス解消用に馬鹿でかい剣を背負ったカスタムタイプがいるって話を聞いたことがあるが、どこの部隊の話か知っているかアドリアナ？」

「——教えてあげてもいいけれど、ストレス解消相手に立候補でもするつもり？」

「遠慮しておくよ」そう言って、ロブソン副隊長は改めてスクリーンに映る二機の試作型を見やった。「で、この二機をどうするんですかい、司令殿？」

「接近戦仕様のN型はラステイ君に思っている。彼は今乗る機体がないわけだしね。どうだろうラステイ君。やってもらえるかい？」

「はい」
断る理由なんてない。戦うためには力になるものが必要なのだから。

「それじゃ、N型はラステイ君に決まりだね。次にD型だけど」
エルリック司令の話が終わるのを待たずに、ロブソン副隊長がパ

イロツトを指名した。

「そっちはリンダで決まりだな。射撃に関してこいつは天才だからな」副隊長はリンダを指差す。「同期のお前ならよく知っているだろう、ラスティ？」

確かにそうだった。リンダが「寄せずのリンダ」と呼ばれていた理由その一、だ。

「そうですね。射撃に関しては学校時代も群を抜いていました。代わりに接近戦はからつきでしたけど」

「それは今も同じだ。なあリンダちゃん？」リンダを指差すロブソン副隊長。

切れ長の目を、更に細く吊り上げてリンダは指を払いのける。

「ラスティのほうこそ射撃の成績は相当酷かったじゃない。それに模擬戦での対戦成績は私が勝ち越しているってことを忘れないで」

「そうなの、ラスティ？」隊長が目をパチパチさせて俺のほうを見る。

「ええ、まあ……」

勝ち越して言ったって五勝四敗じゃないか。あれ、六勝五敗だったけ？ まあどっちでもいいか。ようするに、俺とリンダの場合は。

「俺が懐に入り込めるかどうかだけだったわけですけどね」

「遠距離からなぶり殺すか、接近戦で殴り殺すかのどっちかってわけか。お互い、難儀な部下を持ったもんだな、アドリアナ」副隊長が呆れながら言う。

「ほんと。個性的なね」

ゴホン、とエルリック司令が咳払いをした。

「では、D型はリンダ君ということで決定だね。二機を新人に預けてしまっただけじゃないのかい？」微笑む隊長と、顎を引く副隊長を見てエルリック司令もニヤリと笑った。

結局のところ、予定調和だった、ということなのだろう。

「では、これから二人には整備班長であるあたしの特別講座を受けてもらいます！ これで新型機も怖くない怖くない！ さあ、レッ

「ッゴー！」

ルーシエットさんが勢いよく拳を突き上げる。同時に胸がゴムまりのように弾んだ。

俺は啞然とし、リンダの眉間には深いしわが刻まれた。

そのままルーシエットさんに連れられて会議室を出ようとした俺を副隊長が呼び止める。

「そうだ、ラスティ」

「はい？」

「お前、例のセイラムって機体にはもう乗らないのか？」

「——派手に壊してしまいましたから。それに、俺が決めることではありませんし」

「そうか。一機で街を焼き尽くすほどの機体が『味方』にいればさぞかし心強いだろうに」

「——」

失礼します、と言って立ち去ろうとしたところで、副隊長は更にもう一言付け加えた。

「ああ、そうだラスティ。俺のこと『副隊長』って呼ぶのに違和感を覚えるのなら、『先輩』って呼んでくれても構わないんだぜ。どうだ？」

「——………考えておきます。ロボソン副隊長」

そう言っただけ俺は、ルーシエットさんとリンダの後を追った。

ロボソン「レリックという人が隊長の同期だということは分かった。リンダのことがお気に入りだということもなんとなくは分かった。頭の回転が早い人だということも。クセの強い人だということも。

それ以外に、俺の中で決定的に分かったことが一つあった。

俺は、この人のことが気に入らないらしい。

僕の中でも一つ確実に分かったことがある。

どう考えても、今観ているこれは、ただの映画じゃないということ。

主人公であるラスティが「セイラム」に乗ったとき、僕も間違いなくそこにいた。

僕は彼を見ていて、僕と彼は心を重ねて戦った。

ラスティの日常を追いかけて、彼がセイラムに乗って戦うときは力を貸す。

そういう仕掛けになっているのだ。

空飛ぶサッカーボール、ヴォル・ポーニは何も言ってはくれない。

だが、彼が再三口にする「出番」というのは、そういうことなのだろう。

疑問はいくつもある。

最初に「出番」と言われたときのこと。

ウォースから傷心で戻ったラスティが、ランドホエールで始めてエリリック、ルーシエツト兄妹と出会ったときのことだ。あの時点でセイラムはその姿すら見せていない。

ただ、これに関しては説明がつく。ラスティがルーシエツトにやらされたテストだ。あれは彼とセイラムとの間で行われたもの。いわばファーストコンタクト。

「最初の出番」と言って差し支えないものかもしれない。

次に「出番」がセイラムに関することに限られていること。

ラスティがセイラムに乗ったのはあくまでイレギュラーケース。今後も彼が継続して乗り続ける可能性は低い。だとすると、僕の「出番」はこれでお終いということになってしまう。それならそれでも構わないのだけだ。

そしてもう一つ。シロネコ、キャット・シーフの存在。

ヴォル・ポーニはキャット・シーフに対してもやはり「出番」と口にしていたし、キャット・シーフ自身も「出番を棒に振ったりはしない」と言っていた。キャット・シーフも僕と同じようにセイラムを動かしていたのか。それとも別の機体だったのか。

「別の機体。となると……」

本人に聞いてみるしかない。僕はキャット・シーフを呼ぶ。

「にゃん？」

なんだ、ネコらしい返事もできるのかよ――

「君が今観てい映画は、僕が観ているものと同じなのかな？」

「――何を言っているのか、さっぱり分からないんだナン」

確かに、僕自身にも分からなくなってきた。

そもそも、分かる必要があるのだろうか。

これは所詮「夢の中」の出来事のはずなのだから。

夢なら夢として、相応に見ていればいいじゃないか。

「そうだな、キャット・シーフ」

キャット・シーフは何も言わなかった。

傷ついたサイルフと、ホワイトたちはオーランドに二日遅れてスイレネ島へと戻ってきた。

「戻りました」

何の感情も、情緒もない声色。だが、ホワイトそれが普段のホワイトの声。

「無事に戻って来られて何よりだ」

オーランドの口先だけの安堵の言葉も、ホワイトのそれよりはよっぽど人間らしく聞こえる。

「ごめんなさい」

「君のせいではない。想定外のこと起きてしまった、それだけだ」
「はい」

「近いうちに国防軍がスイレネ島へとやってくる。そのときにこそ、

君の力を見せてくれ」

「はい」

「それまでにサイルフは修理しておく」

「はい」

「今日はゆっくり休むことだ。ジルが首を長くして君のことを待っている」

「はい」

人形のように凍てついた表情のまま、ホワイトはオーランドの元を後にした。

「おかえり！」ホワイトの部屋の前では、おかつぱ頭の少年が目を輝かせて彼女を待っていた。

「ジル」

「やられちゃったって聞いて心配したんだよ。怪我とか、してないよね？」

「大丈夫」

ホワイトはポケットから鍵を取り出すと、静かに扉を開いた。先に部屋へと飛び込んだジルがベッドへと飛び乗る。遅れてホワイトが部屋の明かりを点けた。

無感情な彼女の姿からは想像もつかないような、ピンクや黄色で彩られた年頃の少女らしい部屋が照らし出される。

ホワイトは、ベッドに寝転がるジルの隣にゆっくりと腰をかけた。

「本当に、どこも痛いところとかない？」

「ええ」

「嘘ついていない？」

「わたしは、嘘つけないから」

ジルはベッドの上を転がりながらホワイトに擦り寄る。そして、彼女の太ももにおでこをあてて小さく「そうだったね」と呟いた。

「今、替わるから」ホワイトはジルの頭をさすりながら言う。

「うん」

ホワイトはゆっくりと睫毛を伏せる。

部屋の中は二人の心臓の鼓動が聞こえるくらいに静まり返っていた。掛け時計の針が十度時を刻んだ後、ホワイトは頭をガクンともたげてうつむく。

黒に近い深緑の髪が、遅れてふわりと宙を舞った。

「——ジル」

自分を見つめる、穏やかで、優しく、暖かい微笑みに、ジルは顔を上気させた。

「おかえり、ニエル！」

「ただいま。そうだ、まず謝らなくちゃ。約束していたお土産、忘れちゃった」

「ニエルはドジなんだから」ジルはニエルの胸に頬をすり寄せる。

「ゴメンね」ニエルはジルを抱き寄せて、頭を優しく撫でる。

「オーランドは何か言っていた？」

「ここに国防軍が攻めてくるって」

「うん、僕も聞いた。そうだったら僕とソールとで蹴散らしてやるんだ！」

ジルは得意げに、雲ひとつないような笑顔をニエルに向ける。

ニエルは何も言わずにジルの瞳を見つめた。純粹で、強い想いが込められた幼い瞳を。

「だから、もうニエルもホワイトも戦わなくていいからね。そうすれば、二人はずっと僕のそばにいてくれるんだよね？」

「そうだね…… そうなれば、いいよね……」

「うん。だから僕、たくさん訓練するんだ。痛くても苦しくても絶対に負けないから！」

「そうだね——」

「あれ、どうしたの？」見上げるジルの頬を、一滴の涙が流れ落ちた。

「どうして泣くの？ どこか痛いの？ ニエル？」

「ゴメンね。ゴメン……」

ニエルはギュツと力を込めてジルを抱きしめた。
何度も何度も、何度も何度も「ゴメンね」と囁きながら。

俺たちがマリアノ基地へ来てから一週間が過ぎた。

エルリック司令とアドリアナ隊長とは、初日のミーティング以来
まともに顔を合わせていない。結成式に始まり、部隊間打合せに記
念式典。各所への挨拶回りに基地内の下見。

ゆつくりする暇など欠片もないほどに多忙なスケジュールで二人
は動いていた。

もちろん、それだけが二人の仕事ではない。事務仕事だって山のよ
うに溜まっている。

元来が研究者であるエルリック司令は、お世辞にも戦力になってい
るとは言い難く、隊長の負担は相当なものになっていた。イラーノ
副隊長がいればなんの問題もないのだろうが、療養中でここにはい
ない。

俺はといえば、隊長を手伝うこともできずに、ひたすら新型機での
模擬戦を繰り返していた。

連日ロブソン副隊長に足蹴にされる日々だった。

副隊長に関してはつきりと分かったことがある。

隊長から聞いてはいたが、この人は強い。それも、物凄く。

いくら不慣れな機体を使っているといっても、新型が標準装備の量
産機にかすり傷を負わすこともできないのは屈辱だった。それが一
週間も続けば尚更だ。

「動きに無駄が多い」、「攻撃が直線的過ぎる」、「バレバレのフ
ェイントでは意味がない」、「やけくそで突っ込んでも当たりはし
ない」

副隊長が嘲笑うかのように俺の攻撃を受け流す。いや、間違いな
く嘲笑われているだろう。

それでも俺は、立ち止まるわけにはいかないのだから。

「強く生きる」

それが先輩の最期の言葉。

「自分で答えを見つけるんだ」

それが俺へのメッセージ。

仮にこの人を。隊長が強いと認めるこの人を超えることができれば、何かを見つけることができるかもしれない。その先に、答えがあるのかもしれない。

だから俺は。

「よし。今日はこのくらいにしておくぞ」

結局、今日も何もさせてもらえなかった。

何度無様に地面を舐めることになっただろうか。もし実戦ならば、今日だけで何度副隊長に殺されただろうか。

「さて、ラストイ。お前に一つ頼みがある。後でリンダと一緒に俺のところに来い」

「——分かりました」

そのときは思いもしなかった。ロブソン副隊長の頼みが「場所取り」だとは。

その晩の隊長と副隊長の会話。もちろん、後から聞いた話ではあるのだけど。

「はぁ…… もうこんな時間」

一日の仕事を終えた隊長が大きく嘆息する。時刻は二十二時の少し前。

隊長は非常灯の緑色が寂しく照らす廊下を自室へと歩いていった。数歩先に行く自身の影を追っていたおかげで、大男の影にまるで気付き様子も見せずに。

「相変わらず遅いお帰りで」

突然現れた副隊長に驚いた隊長は、大きく息を吐いた。

「ロブソン—— ビックリさせないでほしいわ」

「すっかり制服にスカート姿がさまになっちまったな」隊長が身に着けた紺色の内勤用の制服を指差して副隊長が言った。

「息が詰まるから、ネクタイは嫌だわ」隊長は胸元を緩める。

「俺としては――」副隊長がスカートから除く膝頭へと目線を移していく。「タイトスカートのスリットから覗く脚がたまらないから、そっちのほうがいいと思うぞ」

「――よくリップにも同じようなことを言われたわ」隊長は静かに息を吐いた。

「フラムで戦死した部下だったか…… そのリップ君とは、美味しい酒が飲めたかもしれないな」

「かもね」隊長は目を細めた。

「それはそうと、エルリック総司令殿はちゃんと働いているのか？」

「どうかしらね？」隊長は壁に寄りかかって笑った。「冗談よ。司令だって、毎日遅くまで一生懸命やってくれているわ。そのせいか、今日の式典中は舟をこいでいたみたいけど」

「そいつは意外だな。『総司令』ってのは肩書きだけで実業務をお前に丸投げするような人だから、興味の無いことには手を付けないものだと思っていたんだが」

「確かに興味はなさそうだけどね」それよりも、と隊長は続ける。

「それよりも、誰かさんが手伝ってくれば楽になると思うのだけど？」

「俺が事務仕事はからっきしだってことくらい、知っているだろうに……」

「そついうところも、変わらないわね」隊長は口元を押さえてにやる。

「苦手なものは苦手だからな」

「はいはい。ロブソンには新人君たちの面倒をみてもらっているのだもの、文句なんて言えないわ。で、あの子たちの様子は？」

ロブソン副隊長は顎に手を当てて、ひとしきり唸った後に言った。

「リンダはダメだ。あの小娘には足りないものが多すぎる。胸が無いのは仕方ないにしても、色気、茶目っ気、愛嬌、その他諸々。そういうものが一切ない」

「——何を言うのかと思ったら。リンダに聞かれたら殴られるくらいじゃすまないわよ。きつと三回は殺されるわね」隊長は噴き出しそう笑いそうになるのを堪えながら言った。

「冗談だ。いや、真実ではあるがな。それで、肝心な本業だが、上出来と言っていていいと思う。新型の調整も順調に進んでいるしな」

「実力の程は？」

「話にならないな」

「新人がロブソンに適うわけないか——あまりやり過ぎないように頼むわよ。自信を喪失させたら意味がないのだから」

「ほどほどにはしているさ。俺の絶妙なさじ加減のおかげで、日を追う毎に成長しているのは間違いないしな」ただし、と副隊長は付け加えた。「ただし、ラスティは焦りすぎだな。けしかけた俺が言うのもなんだが、余裕がなさ過ぎるというか、思いつめ過ぎているというか。あの精神状態のまま前線に出すのは危険だと思うが」

隊長は天井を見上げ、その向こうに広がる夜空に語りかけるように言った。

「彼には話してもらわないといけなことがある。いつにしようかと思っていたのだけれど、そろそろ頃合かもしれないわね」

そうかもな、と答えながら副隊長は時計に目をやる。二十二時を回ったところだった。

「アドリアナ。お前、明日は非番だったよな。今からちょっと付き合え。俺の奢りだ」

「——私の気が済むまで、が条件よ」

ロブソン副隊長とアドリアナ隊長がバーの入り口に立って店内を見渡していた。

カウンターが六席と、四人掛けのテーブルが三つ並ぶだけの手狭な

店だが、品揃えには定評があり、この日もほぼ満席になっている。

「満席みたいね。他を当たったほうがいいんじゃないの？」

「あそこなら空いているぞ」ロブソン副隊長が、とあるテーブルを指差す。「先約がいるみたいだから相席になりそうだが、別に構わないだろう？」

「そうね」

俺とリンダが、その店で四人掛けテーブルに二人で座っていたの偶然だった。

そういうことにしてくれと副隊長に頼まれた以上、それは偶然に違いないわけだ。

「偶然ね」と驚いた顔でアドリアナ隊長が隣に腰を下ろすと、リンダは頬をピクピクとさせながら「そうですね」と答えた。

「ゴメンなさいね、せっかくのデートなのに邪魔をしちゃって」隊長が俺を見ながら両手を軽く合わせる。

「デートなんかじゃないですって」そう返すと。

「そうですよ、アドリアナ隊長」デート、という単語にリンダも素早く反応した。「昔話と、愚痴と文句をダラダラと喋っていただけです」

「ほお。誰に対しての文句と愚痴なのかは非常に興味深いところだな。今後の参考にしたいから是非聞かせてくれないか、リンダちゃん？」副隊長がニヤリと言う。

「筋肉と巨乳にしか興味が無い、どこかの上官に対する恨みの数々です」

「おいおい、その言い方はないだろうが」

「誰もロブソン副隊長のことだなんて、言っていないですけど」

ポニーテールの頭を大げさに抱えこみながらロブソン副隊長は唸り声を上げた。

俺たち四人の真ん中を、笑いの風が通り抜けていく。

——そういえば、声を上げて笑ったのはいつ以来だろうか。

心の中で指を折り始めたところでアドリアナ隊長が俺の名を呼んだ。

「ラストイ、ちょっといいかしら？」

「何ですか？」

「いつ聞こうか考えていたのだけれど――」隊長はグラスに浮かんだ氷を見つめる。暖色系の照明に照らされた氷には、俺たち四人の顔が重ねあわせに映りこんでいた。

「どうしたんです、隊長？」

「フラムに現れたあの空を飛ぶ機体のこと、教えてくれないかしら」
「それなら、俺よりもエルリック司令に聞くほうが早いんじゃないですか？」

「確かに、司令殿を叩けば埃が大量に出てくるだろうな。埃以外にも色々」と早くも一杯目のビールジョッキを飲み干したロブソン副隊長が口元を緩める。

「そうね。エルリック司令を問い詰めれば色々出てくるでしょうね。でも、私が聞きたいのはそういうことじゃない」隊長の視線が俺へ戻ってくる。「あなたと、あの機体の繋がりを知りたいの」

「繋がりが、ですか」瞼の裏で、あの蒼い翼がはためく。

忌むべき蒼い翼が。

「リップが言っていたわ。あの蒼い空飛ぶ機体はあなたにとって仇だつて。あれを倒すためにあなたは軍に入っただつて」セイラムに乗ったあなたのムチャな戦いぶりを見て、先輩がそう言ったのだ、と隊長は続けた。

頭の中ではためく蒼い翼が、先輩の後姿へと変わっていく。片手をポケットに突っ込んだまま顔を俺に向けると、ペロツと舌を出して頭をかいいた。

「――誰にも言うなって、言っただはずなんですけどね」

「本当なのね？」

俺は小さく「はい」と言った。

任務としてあの機体を追うのであれば、自分の持ち得る情報は出したほうがいい。

確かにそうだろう。でも、今はそんなことよりも大切なことがあった。

俺自身の気持ちを整理するために。先輩の想いに、姉さんの願いに応えるために。

あの日の出来事に、もう一度正面から向かい合おう。

「ノックスヘッジ——」その街の名を口に出すも久しぶりのことだ。「北極海に面した小さな町です。名前くらいなら知っているかと思えますけれど？」

「名前は知っているわ。確か——」アドリアナ隊長が頬に指を当てて答える。「五年くらい前に起きた大規模爆破テロで街ごと廃墟になったっていう、あのノックスヘッジでしょ？ 史上に残る規模で実行されたテロだって、当時は大騒ぎだったわ」

「犯人グループもろともに街が焼き尽くされて、どこの誰が何の目的で実行したのかも分からないままだったって話ですよ」リンダが横目で隊長を見る。

「違うんだよ、リンダ」

そう、違う。俺は自分自身に言い聞かせるように、静かに、ゆっくりと言葉を続ける。

「犯人グループなんて、最初からいなかった」

「どういうこと？」釈然としない顔でリンダが口を尖らせる。

「フラムと同じだよ。政府の公式発表なんて、政府の都合でしかないってことさ」

俺は三分の一ほどになっていたジントニクの残りを一気に飲み干した。

リンダを、副隊長を、そして隊長の目を見て続ける。

「そう、五年前の話です。その日のノックスヘッジは、雲ひとつない快晴の冬空が広がっていました。凍るように冷たい空気だったのをよく覚えています。」

晩ご飯を食べ終えた俺は、ホテルの部屋でのんびりとテレビを観て

いました。昼間あちこち歩き回って足が棒みたいになっていたので、マッサージをしてもらっていたときです。突然、外で爆発音が鳴り響きました。最初は雷かと思いました。でも、そうじゃなかった。窓を開けると空に向かって飛行機雲が吹き上がっていたんです。町中のあちこちから狼煙のように、幾筋も。今見れば、それが何かはすぐに分かったと思います」

話が見えない、というリンダ制し「続きを」とロブソン副隊長は言った。

「それは砲撃でした。戦車からなのか、D・F.なのか。詳しくは分かりません。砲撃はどんどん激しさを増していきました。いつ俺たちのいるホテルに直撃が来てもおかしくない、そんな状況だったんです。

危険を感じた俺たちはすぐに外へ飛び出しました。そして、無我夢中で走りました。街から出れば助かる、何とかなるって思いながら走りました。

外は酷い有り様でした。崩れたビルの下敷きになった人たち。爆風に吹き飛ばされて動かなくなった人たち。熱風で全身を焼かれた人たち。途方にくれて高笑いをする人たち。きつと、生きた心地がしなかったと思います」

覚えていないのか、という問いには「必死だったから」と返し、俺は続ける。

「どのくらい走ったのか、はっきりとは分かりません。やがて俺たちの視界に、町の出口を示す標識がはっきりと見えてきました。これで助かる、あと少しだ。そう思ったときです。

——あいつが通り抜けました。真冬の空を空気ごと切り裂いて。逃げ惑う俺たちを嘲り笑うかのよう」

「それって」

俺は隊長のほうを見て静かに顎を引いた。「フラムで姿を見たのはそれ以来です。でも、間違いはありません。そう、間違えるはずもない——」

「あの機体が五年前のノックスヘッジの町にも現れたっていうの？
じゃあ、爆破テロというのは？」

「少なくとも、俺の知る限りではそんな事実はありません」

「なるほどな。フラムの件で政府の公式発表がおかしいという話をしたとき、リンダと違ってお前は落ち着いていたのはそういうわけか。捏造と事実の隠蔽をすでに経験済みなら、驚くことはないからな」ロブソン副隊長が腕を組んで俺を見る。

「そうですね」

「で、さっきから話の主語が『俺』じゃなくて『俺たち』なのは、『仇』つてのに関係があるわけだろ？」

——洞察力も鋭いわけか。本当に、この人は。

「姉と一緒にいました」

目を閉じる。暗闇の中に姉さんの姿が浮かび上がる。

優しい笑顔で俺の頭を撫でる姉さんの姿が。頬を膨らませて俺を叱る姉さんの姿が。

「俺は姉の手を引いて走りました。途中で、街の外まであと少しと
いうところで姉の足が止まりました。一人で泣いている男の子を見
つけたからです。近くに家族の姿は見当たりませんでした。五歳く
らいのメガネをかけた子だったと思います。」

姉は、そういう子を放って置けない人だったから。男の子の元に駆け寄って、涙を拭いてあげて。頭を撫でて、励まして。きっと、自分がお父さんやお母さんを探してあげる、とか言っていたと思います。

その瞬間だけは手を離して、俺は、少し離れたところにいました」

なんであの一瞬だけ、俺は手を離れたのだろうか。

「奴が、俺たちの真上を駆け抜けました。進路を塞ぐビルを蹴散らしながら——」

瓦礫に包まれながら姉さんは、その男の子を庇うように覆いかぶさっていました。俺は、スローモーションで降り注ぐ瓦礫を、茫然と見ていることしかできなかった——

ハツと気付いたら目の前にあいつがいて、紅い瞳が光って、その場の全てが吹き飛ばされて、俺は必死に手を伸ばして、天地がひっくり返って、空が回って、目の前が真っ白になって——姉さんがいたはずのところにあいつが立っていて、瓦礫を踏み倒して、吹き飛ばして——

次に気が付いたらもう、俺はベッドの上でした」

グラスの中で積み重なっていた氷が、カチャンと崩れ落ちる。

「どうして、ラストイはノックスヘッジにいたの？」

リンダの細指はグラスに吸い付いたかのように動かずにいる。

「新居を、探しに行っていた」俺は膝の上の拳を、強く強く握り締める。「姉さんたちが新しく住む家を探しに。翌月に結婚することになっていたから——」

重たい空気が重なり合って、俺たちの真ん中に腰を下ろしていた。皆が口を開こうとしては躊躇し、アルコールに手を伸ばす。

「姉さんは——」搾り出すように言葉を吐き出す。「姉さんは、仇討ちなんかを望むような人じゃない。きっと俺を見たら、今の俺の姿を見たら、しかめっ面でおでこを弾いて、目を吊り上げながら怒って。それから、えくぼを浮かべて微笑むんです。きっと」

「——いいお姉さんだったのね」氷が溶け落ちるのを見つめながら隊長はゆっくり目を閉じる。

「そうですね」

そして、仕方ない子ね、と言いながら俺を優しく励ましてくれるんだろう。

「隊長とは違う雰囲気だけど、同じように優しくて、同じように厳しくて、同じように素適な女性でした。七つ年上だったから、生きていれば隊長と同年ですね」

おいおい、とロブソン副隊長が突っ込む。

「ドサクサに紛れてアドリアナにアプローチか？ 昔話を絡めて攻めるのは悪くない作戦だが、アドリアナを攻略するのは一筋縄じゃ、って……うぶぐお！」

乾いた音を響かせて、リンダの右ストレートが副隊長の顎を打ち抜いた。

「もう！ わきまえて下さい！」赤いサイドテールを揺らしながらリンダが拳を引いた。「そ、それにしても、ラストイはよく無事ですんだわね」

「無事じゃないさ。骨折が九箇所に全身打撲で全治四ヶ月。致命傷を負わなかったのが不思議なくらいだったって、お医者さんは言っていたよ」

「そうなんだ。それで、お姉さんは……」

「冬場で空気の乾燥していたノックスヘッジの町は、あつという間に焼け野原になったそうです。遺体は見つからなかったけど、生存者リストに姉さんの名前はなかったし、あの状況じゃとても……」
俺は後ろを通った店員に声をかけて追加のジントニックを注文する。

「で、身体の傷が癒えた弟は、心に傷を抱えたまま、誰も望まない復讐を誓い軍に入った」ロブソン副隊長が顎をさすりながら言う。

「やがて訪れた復讐を果たす絶好の機会。強すぎる想いに我を忘れた弟は、復讐を果たすどころか、今度は敬愛する先輩をも失う羽目になった」

「ロブソン！」アドリアナ隊長が机を叩く。

「いいんですよ、隊長」

そう、現実から逃げていたらダメだから。

「副隊長の言うとおりです。リップ先輩が死んだのは俺のせいです。そんなこと言うと先輩は怒るでしょうけどね」

三人の視線は俺を串刺しにするかのようにだった。

「先輩は最後に、『答えを見つけれ』と言ってくれました。俺は、その答えを探しています。副隊長との訓練でがむしゃらに突っ込んで行ったのも、そこから何かが見つかるかもしれないと、そう思ったからです」

「そういうことか」副隊長は背もたれに深くもたれかかった。

「でも、ダメでした。考えても、考えなくても、答えは出てこない。動いても、動かなくても、何をしたらって、結局は同じところに行き着いてしまっんですよね」

考えても分らない。なんとも情けないけれど、それが俺の出した一次回答。

「だったら、先に進んでみるしかない。俺の想いは変わりません。あいつを、あの蒼い翼の機体をこの手で倒す。仇討ちじゃなくて、そう、けじめを付けたいんです。そうしないと、今より先へは進めないから。そうしないと、きっと答えなんて見つからないと思うから」

「戦う理由は人それぞれよ」隊長が慎重に、重ねるように言葉を並べる。「私も、ロブブソンやリンダも、イラーノもそれぞれの理由で戦っている。もちろんリップだってそう。あなたが戦う理由はあるが胸の中に秘めていればいい。もしもあなたが、自分を追い詰めて、悔やんで、憎んで、呪って。身を滅ぼすような理由で戦うのなら、私たちはそれをあなたに気付かせないといけない。そう思っ

て話を聞いてみたの」

刹那の後、「でも」と隊長は続けた。

「でも、その必要はなさそうね。これから私は、今まで通りになたを全力でサポートする。あなたが答えを見つける手助けになるのならなおさらね」

「隊長には助けてもらえばなしですけどね。これからもよろしくお願いします」

「副隊長も忘れんなよ、後輩」

そうさせてもらいますよ、副隊長。

「当てにしてもらっていいわよ。同期だもの」

当てにしてるよ、リンダ。

「よろしくついでに一つ質問だ。お前ら、士官学校時代は付き合っていたのか？」

副隊長の唐突な質問に、俺とリンダの声がぴたりと重なり合う。

『付き合っていないません!』

「あら、そうなの。ラストイの士官学校時代の恋人って、リンダのじゃなかったのね」

何故だか隊長は残念そうな顔をしている。

いや、そもそも隊長に士官学校時代の恋人の話なんかしていない。

「——その話、リップ先輩から聞いたんですか？ あの人はいくらペラペラと」

「上官には部下のことを知っておく義務があるのよ。それで、本当のところは？」

「だからリンダじゃないですよ。『寄せずのリンダ』に手を出す度胸は俺にはありません」

「なんだその『寄せずのリンダ』ってのは？」副隊長が身を乗り出す。

「男を寄せ付けない、っていう意味ですよ。オーラが出てるじゃないですか。いつもしかめっ面だし、目つきも悪いし。副隊長は感じませんでしたか？」

リンダが「寄せずのリンダ」と呼ばれていた理由その二、だ。

「いや、分からなかったなあ」

「鈍いのよ、ロブソンは。ねえリンダ？」

「知りません」むくれ顔のリンダは、俺のジントニックを奪うと一気に飲み干した。

「男を寄せ付けない、ねえ。俺はてつきり、リンダちゃんの胸元には寄せて上げるほどのお肉もないっていう意味かと……うぬんほお！」

今度はリンダの右肘が、寸分の狂いもなく副隊長の鳩尾に突き刺さった。

「何か言いました、ロブソン副隊長？」

「う……お……」急所をつかれた大男が、前かがみに悶絶しながらリンダを見上げる。「上官を、殴ったりしたら懲罰の対象だぞ、リンダ、ちゃん……」

「この前の膝蹴りといい、さっきのパンチといい見事なものね。頑丈なロブソンを一撃でダウンさせるなんて。格闘家にでも転職したらいいんじゃないのかしら？」

アドリアナ隊長が膝を叩いて笑う。

仕方なく俺は、もう一度店員を呼んで注文をする。

仮にノックスヘッジでの事件がなかったら。姉さんが生きていたなら。

俺は隊長やリップ先輩と会うことはなかっただろう。

もしフラムでの出来事がなかったら。先輩を失っていなければ。俺たちは、今この場で笑いあうこともなかったはずだ。

後悔も無念もたくさんある。

あのときこうしていれば。なんであれをやらなかったのか。数え上げればきりが無い。

でも、今は前を見て進んでいこう。

その先に答えがあると信じて。

三日後、俺たち特別部隊にスイレン島攻略作戦への参加が通達された。

第五章 ラスティと蒼き翼の魔人 ー スイレン島攻略作戦 ー

第五章 ラスティと蒼き翼の魔人 ー スイレン島攻略作戦 ー

『ようやくお出ましね。作戦通りに行くわよ。ロブソン、ラスティ、準備はいい?』

『もちろん』

「問題ありません」

『サイルフの動きを止めることだけを考えること。それじゃ、行くわよ!』

満を持したかのように姿を現した「風のサイルフ」を目掛けて、俺たちは逆三角形のフォーメーションで強襲をかける。

俺の左には大剣ファルシオンを構えたカスタムタイプがいる。機体を彩るシルバーのコーティングと、煌く銀髪から名づけられた「銀色の剣士」という通り名が示すように、戦場でのアドリアナ隊長は正に、勇敢なる剣士そのものだ。

背後からロブソン副隊長が援護する。何度も行った模擬戦では、結局一勝もできなかった。士官学校からの付き合いであるアドリアナ隊長も「ロブソンには手も足も出なかった」と言うほどの人が、援護に徹してくれている。

右翼に位置する俺にとっては、試作N型を使つての初めての实战だった。二週間にも満たない期間だったけれど、副隊長との訓練のおかげでN型を操る錬度は飛躍的に向上している。

『直線的に突っ込んだらダメよ。とにかく的を絞らせないように』
「分かっています。行きます、隊長」

サイルフの動きをはつきりと捉えることができた。フラムでは目で追うことすら適わなかった蒼き魔人の繰り出す攻撃が、どこから来るのかが手に取るように分かった。

「隊長、右から衝撃波が来ます!」

俺の声が届くよりも先に隊長のカスタムタイプは身をかわし、風の刃をやり過ごす。

ワンテンポ遅れて、副隊長の砲撃がサイルフへと延びる。攻撃の出し終わりを狙った完璧な狙撃だったが、サイルフは超人的な反応速度でそれを回避する。

『ラスティ、真上よ！』

いつの間にかサイルフの真下に入っていた俺は、隊長の声と同時に膝部に装備されたレールカノンの引き金を引いた。糸を引くように打ちあがった弾道は、サイルフに直撃する半歩手前で風の渦へと飲み込まれる。

サイルフは高く舞い上がると、俺たち三人を見渡せる位置にまでゆっくりと後退した。

『やはり簡単にはいかないな』モニターの向こうで副隊長がニヤリと笑う。

「そうですね。攻撃よりも回避に特化している機体というのは間違いないですね」

圧倒的なスピードと高機動性を活かした攻撃に目が行くけれど、サイルフの最大の長所は尋常ではない回避能力の高さと竜巻を用いた防御にあった。

フラムで隊長の乾坤一擲の一太刀をかわした超反応。守備隊の集中砲火を無力化した竜巻の防御。この二つを破らない限りサイルフを撃破することはできない。

『見える範囲からの攻撃では難しいわね』言葉とは裏腹に隊長の表情には余裕があった。

「そうですね。でも」

『ああ、ここまでは想定どおりだ。そういうわけだから、お膳立てにかかるとするぞ』

副隊長のテンションも上がってきている。
俺は、出撃前のブリーフィングを思い返す。

エルリック司令が、風のサイルフの防御面が如何に優れているかを訥々と語った。

「蒼い空飛ぶ機体、もとい、サイルフの防御が完璧なのは分かりました。で、それをどうやって攻略するんですか？ まさか、奴の防御は完璧だ、で終わりってわけじゃないんでしょ？」

副隊長がわざとだらうけれど、嫌味な聞き方をする。

「もちろん対策はある。まずはこの映像を見てもらおうか。アドリアナ隊長やラスティ君にとっては見たくないシーンかもしれないけどね」

スクリーンに投影されたのは燃え盛るフラムの街と、闇夜を舞う蒼い翼。そして紅蓮の炎をまとった真紅の機体。

サイルフの一方的な攻撃にさらされて成す術のないセイラムが方膝をついていた。

「テク開のカメラで撮影したあの子の映像さ。よく撮れているだろう？」

「——こんな映像があるなんて、初めて知りました」

アドリアナ隊長の戸惑った声を一笑に付し、エルリック司令があっけらかんと続ける。

「そりゃそうさ。初公開だからね。ちなみに、この映像のことは他言無用で頼むよ。これが世間に知れたら公式発表の嘘が簡単にばれてしまう。そんな面倒ことはゴメンだろ？」

「立案時に映像を出してもらえれば、もっとあっさり対策も決まったでしょうに……」

隊長が司令には聞こえないような声でボソツと呟く。

俺には聞こえていたが、あえて黙っておいた。

スクリーンの中のサイルフは、セイラムの息の根を止めるべくとどめの一撃を繰り出す体勢へと入っていた。

次の瞬間、背後からの攻撃をともに受けサイルフがバランスを大きく崩す。

ロケットランチャーを連射しながらD・Fが、リップ先輩が飛び

込んでくる――

背後から弾頭の直撃を受け、フラフラと一時離脱を試みるサイルフが大写しになったところで、司令が映像を止めた。

「つまり、こういうことさ。分かるかい？」

何がこういうことなのか、俺には分からなかった。

「なるほどな」副隊長が納得した表情で頷く。

いや、だから何がそういうことなのかさっぱり分からないんですが。

「どんなに優れた能力を持った機体やパイロットであっても、予測できない方向からの攻撃は防げないってことだ。分かるだろ、リンダ」

俺以上に大きなハテナマークを浮かべているリンダに副隊長が言った。

「予測できない方向からの攻撃？」

「つまり、お前に全てをかけるってことだよ」

副隊長の曖昧な説明にリンダは目をパチパチとさせている。

「それじゃ、具体的に作戦内容を説明します」隊長の目つき少し鋭くなる。

プチ本気モード、って奴か。

「本作戦の正面攻撃を担当する海軍上陸部隊が、スイレん島の南側に広がる砂浜から一斉に突撃を仕掛けます。同時に私たち特別部隊のランドホエールは島の北側、断崖の続く場所へと移動、D・F・部隊を展開します。島に上陸するのは私とロブソン、ラスティの三機。偵察段階で判明している島の守備戦力の相手は海軍に任せて、私たちは標的のサイルフが出てくるまでは待ちに徹します。ここまでがフェーズ1。」

サイルフが出てきてからが本番のフェーズ2。三機はトライアングルフォーメーションで標的に接近。向こうの注意をできうる限り引き付けてランドホエールから見える場所、障害物のない地点にまでサイルフを誘導します。これでフェーズ2は完了」

「おびき出して、誘い込んで。次は当然、狙い撃つってわけだな」
副隊長が指先で銃を撃つポーズを取る。

「そういうこと。仕上げのフェーズ3。ランドホエール上で待機するリンダの遠距離射撃でサイルフを狙撃、動きを止めたところを三機で仕留めます。もちろん対応は臨機応変に。最初からサイルフが出てきた場合フェーズ1はパスするし、フェーズ2で撃墜できればそこで作戦は終了です」

装甲の薄い背中越しに動力部を狙い撃つのがベストだね、とエルリック司令が付け足す。

「責任重大だな」リンダの頭にポンと手を乗せてロブソン副隊長は眉を上げる。いつものリンダなら、即座に副隊長の腕を払いのけるところだろうが、緊張しているのだろう、固まったまま動かない。

「緊張しなくてもいいのよ」アドリアナ隊長が優しく言葉をかける。「一撃で決めようなんて考えなくてもいいわ。向こうが少しでもバランスを崩せば私たちが仕留めてみせる。仮に外したとしても、サイルフの注意があなたに向けば、それは私たちが攻撃するチャンスなのだから」

「はい」分厚い手のひらを頭に寄せたまま、リンダはコクリと頷いた。

リンダの射撃の腕を信じて、俺たちは牽制と誘導に専念する。ある意味では大博打だが、別の意味では極めて確実なやり方。

リンダなら何とかしてくれるだろう。

でも、この手で奴を仕留めてやりたい。

『ワイヤードナックル！』隊長のカスタムタイプの左腕がサイルフに襲い掛かる。

紙一重でかわしたサイルフに向けて、後方で控えていた副隊長機が突貫した。直撃にこそ至らないが、すれ違いざまのショットガンの乱射に、サイルフは怯み後退する。

「今だ!」、俺はN型の両腕に装備したクローをいっぱいに広げ、奴めがけて振り上げる。

捕らえた。

そう思ったのも束の間、サイルフはあるとき見せたような重力も慣性も無視した急加速で俺の目の前から姿を消した。

『ラストイ、上だ!』

「つつ!」

副隊長の声で空を見上げる。嵐が近づく鉛色の空に、五年前と変わらない蒼き翼が溶け込んでいた。翼と一体になった鋭い刃を光らせて、俺を見下ろしている。

「しまった!」ダメージを覚悟し、咄嗟に身を固めた俺と、舞い降りる蒼き翼の間を一筋の光が駆け抜ける。

飛翔するのは高速回転する銀色の大剣。

アドリアナ隊長の大剣ファルシオンが唸りを上げて俺たちの間を断ち斬る。

『ナイスパスだ、アドリアナ』

高速で回転するファルシオンの柄をまるで待っていたかのように、曲芸士のような華麗な身のこなしで掴んだロブソン副隊長が、回転の反動を利用してそのままのサイルフへと斬りかかる。投げる側と受け取る側の呼吸が少しでもずれたら大怪我どころでは済まない完璧な連携だ。

『で、こいつは避けられるんだろう。サイルフさん、よお!』

副隊長の言葉の通り、サイルフは大剣の一撃を凄まじい急加速でかわしきる。

『こいつはおまけだ、とっておけよ!』

かわされ際に胸部内臓のバルカンを浴びせかけながら副隊長はサイルフから離れる。

地上にいた俺たちも、ある限りの飛び道具をサイルフに向けてばら撒いた。

『こいつは竜巻で防御するんだろう—— 予想通り』

着地した副隊長が見上げた先には弾丸を飲み込む猛風のカーテンが引かれていた。飲み込まれた銃弾が霰のように降り注ぐ。

『——竜巻が解けるわ』隊長が唾を飲んだ。

サイルフを覆った風の渦がほどけていく。

俺たちを見下ろす紅い瞳は、怒りに満ちて震えているように見えた。

サイルフの意識を俺たちに集中させる。

サイルフをランドホエール上のリンダが狙い撃てる位置まで誘導する。

お膳立ては、完璧だ。

「そろそろ、種を明かしてもらえませんか？」

スイレノ島攻略作戦の直前ブリーフィングの最後、サイルフ対策が終わった後にアドリアナ隊長がエルリック司令に問いかけた。

「種明かし？」

「自分たちが戦う相手が何者なのかを知る権利くらいはあるはずですよ」

隊長は部屋に残った俺とリンダ、ロブソン副隊長にルーシエットさんを見回す。

「その目で見られるとなあ……」見るもの全てを凍りつかせるように澄み切った隊長の視線に、司令は頭をかいた。「で、何を話せばいいんだい？」

「司令はあの空飛ぶ機体、サイルフのことを知っている。それは聞くまでもないことです。そうでなければ装甲の薄い背中越しに動力部を狙い撃つ、などという作戦を立てられるわけありませんからね。だとすると『どうして知っているのか？』という疑問が沸くのは当然のことじゃないですか？」

俺たちが積み重ねていた疑問を、隊長が代表して司令にぶつけていく。

「——一度には答えられないから順を追って話そう。お願いだから、

そんな怖い目で見ないでほしいな」司令は諦めたかのようにゆつくりとイスに腰を下ろした。

釣られるように俺たちも席に着く。

「君の推測の通り、僕はあの機体『サイルフ』のことを知っている。何故知っているのか、その疑問はもつともだと思う—— 答えは簡単さ。僕はサイルフを開発当初から見えていたからね。別の開発チームの一人としてだけど」

「開発チーム？」

「そう、開発チーム。そこで開発されていたのがサイルフという兵器。開発コンセプトは『空を制すること。圧倒的な機動性を主軸とした空戦能力で戦場を空から蹂躪する。あれはそういう機体なんだ」

空戦能力を高めるために軽量化を図った結果、背面のジェネレータが剥き出しの設計になっている。だから自分たちはそこを突いて攻撃する、司令はそう続けた。

「司令は別のチームにいた、そう言いましたね」隊長が確信を持った表情で言う。「司令はサイルフを開発していたのとは別のチームであの機体、——フラムでラスティを乗せて戦った『セイラム』の開発していた。違いますか？」

「たいした想像力だ。いや、普通に考えるとそういう考えにたどり着くのかな？」

はぐらかすような司令の物言いを払い飛ばし、隊長は質問を続ける。

「あの機体、セイラムとは一体何ですか？」

「随分と大雑把な聞き方だね」首の後ろをかきながら司令は天井を見上げる。「テク開で開発していた新型機、という答えで納得してもらうわけにはいかないかい？」

隊長の視線は、エルリック司令の眉間に突き刺さったまま動かない。

やれやれ、と司令はため息をつき、続けた。

「セイルムの開発コンセプトは『一対多の状況で最大限の戦果を追求する兵器』なんだ。ようするに、一機でたくさんの敵を相手にすることを前提として開発された機体さ。回避能力やら機動性やらは一切度外視。分厚い装甲と圧倒的な火力をもつて敵を力で殲滅する。サイルフとは正反対のコンセプトと言ってもいいかな」

「なぜ、そんな極端なコンセプトの機体の開発を？」

「様々な可能性を追い求めていた、というのが大義名分。実際のところは趣味の延長みたいなものだね。男なら、単機でバシバシ戦うスーパーロボットに憧れるものだろう？」

冗談とも本気ともつかぬ司令の言い様。

本当に、いつものことだけど、この人の言うことは分からない。

少しの静寂、そしてロブソン副隊長が口を開いた。

「スーパーロボットの開発？ 大いに結構なことですね。けど、そのスーパーロボットでもが大暴れしたせいで、街が一つ火の海になったという事実があるわけだ」副隊長が俺をチラツと横目で見る。

「暴れたうちの一機は俺たちの、いや、あんたの手元にある。そして、もう一機を倒せという命令が俺たちには与えられた。俺たちは軍人だ。命令には従いますよ。けどね、自分とこの大将が敵と繋がっている、となると話は別だ。俺が何を言いたいか、分かっただらえませんか？」

「分かるよ。それは分かるさ。君たちは命を懸けて戦うわけだ。司令である僕を信用できずに命がけで戦うことなんてできない。それも当然だろうね」

エルリック司令は静かに微笑み、こう続けた。

「少し昔話をさせてもらうよ。それで僕を信用してくれとは言わない。けれど、今の僕とサイルフが何の繋がりもないということを示す後押しくらいにはなるだろうからね」

司令はテーブルに肘を着き、指を絡める。そしてゆっくりと話し始めた。

「この発端は、一人の天才の無知から生まれた夢物語。そして今

のそれは、天才が去った後の迷走が育んだごちゃ混ぜの未来なんだよね――

今から十七年前、一人の天才科学者がとある技術を生み出した。やがて実用化されたその技術は、世界に革命を起こし、D・F・をはじめとする兵器にも搭載されることになった。ナチュラルスーパードクターと呼ばれる世紀の大発明のおかげで、天才科学者の下には子孫数世代が遊んで暮らせるほどの富が転がり込んだわけだ。

科学者とは探求者だからね。巨万の富を得たといっても、それで彼の探究心が満たされることはなかった。むしろ彼は益々研究に没頭していった。天才である彼が次に目を向けたのは人工知能の研究だった。準永久機関であるナチュラルスーパードクターに人工知能が揃えば、自分で判断し永遠に動き続ける機械ができあがるはずだ、とね。

天才である彼ならば不可能ではない。政府や軍の人間さえもがそう考えた。

そして、それぞれの思惑は政府と軍が主導して組織された人工知能搭載型の無人戦闘マシンを作り上げるためのプロジェクトとして形になった。政府や軍の描いた青写真が実現すれば、戦場で武器を持つて戦う人間は必要なくなる。全て機械でできた兵器が、全部自動で戦争をやってしまうんだ。血の流れない戦場が実現できる夢のようなプロジェクトだろう？」

「――そんなの、ムチャクチャです」リンドが机を叩く。

「そう、ムチャクチャだよ。その兵器を使う側に血が流れなくても、相手側はそうはいかない。ましてや、どんなに優秀な人工知能を作り上げたところで、戦闘員と非戦闘員の区別なんてつくわけがないんだ。白旗を上げた人間を撃たないような制御ができるのか？それは本心での降伏なのか？それとも降伏を装った騙まし討ちなのか？分かるはずないだろう？」

研究しか知らなかった天才は、そんなことにすら気が付かなかったのさ。

数年を費やし、ようやくそれに気付いた彼にとって、プロジェクトは既に終わったも同然だったのだろうね。誰にも何も言わずに彼は忽然と姿を消してしまったよ。

本来であれば彼の失踪と共にプロジェクトも幕も閉じるはずだった。けれど、それを良しとしない力が働いた。国防軍の意向で続行されたプロジェクトからは、汎用性に優れたの二足歩行型の兵器・が生ずることになる」

「それが、D・F……」

リンダのほうを向いて頷いた司令は、さらに続ける。

「表向きにはプロジェクトは終了し、開発チームも全て解散となった。でも、さっき言ったように水面下で国防軍は現実的な視野に立つてD・Fという汎用型量産兵器の開発を進めた。テク開フラム支部では殲滅戦に特化した高火力、重装甲の実験機が極秘裏に整備されていた。どこかの誰かは『空を制する』はずのサイルフを好き放題に飛ばして街を焼いた」

「今サイルフを所有しているのが誰かというのを司令は知らない」
「当時のプロジェクトメンバーの誰かが関与している可能性が高いだろうけどね。残念だけどそこまでしか言えないというのが実情だよ」

その後司令は、この話を信じてもらえるかどうかは分からないけどね、と付け加えた。

正直言つて、俺には分からない。

司令の話がどこまで本当なのかも。この人をどこまで信用するべきなのかも。

そんなことはこの際どうでもよかった。今あの機体を、サイルフを動かしているのが誰であろうとも別に構わない。俺は前に進むだけだから。

そう思っていた。

リンダの試作D型から放たれた弾丸が、正確にサイルフの動力部を

刺し貫いた。

予測できない攻撃は防げない。
姿を捉えることすら難しい距離からの狙撃をかわすことなどできるはずがない。

口で言うのは簡単だけど、こともなげに成し遂げるリンダの狙撃能力には感服す以外になかった。狙撃する隙を作り出したアドリアナ隊長とロブソン副隊長の連係は、それだけで客が呼べるサーカスのような美しさだった。

『ラストイ！』

——みんな揃って叫ばなくても分かっていますよ。

動力部に火花を散らしてバランスを失ったサイルフが、スロー再生のようにゆっくりと下降を開始していた。

——人じゃ、何もできなかったのにな。

自分でも驚くほどに落ち着いていた。みんなが作ってくれたこのチャンスを逃すわけにはいかない、そのくらいに気負っていたほうがいいのかもしれない、そう思うくらいに。

両足を強く踏み込んで腰を落とす。膝に股関節、腰と足首。下半身に力を溜め込む。両腕のクローを構える。そして視線を奴に向ける。サイルフのか細くて紅い瞳が映る。

「これで——終わりにする！」

落下するサイルフ目掛けて跳躍する。大丈夫、今の奴が反応できるはずはない。

天へと伸ばしたクローを十字に振り上げる。両腕に残る確かな感触とともに、空を制した蒼白の両翼が斬り離されて、二対の放物線を鉛色の空に描いていく。

落ちていくサイルフを見下ろす俺の中を、たくさんのものが駆け抜けていく。

困った顔で微笑む姉さん。

燃え盛るノックスヘッジの夜空と、メガネをかけた小さな男の子。身寄りの無くなった俺を引き取ってくれたおじさん家族。

士官学校の仲間たち。

ムスツとしたイラーノ副隊長。

呆れたように両手を広げるリップ先輩。

紅く染まったフラムと、共に戦ったセイラム。

そして――

「みんな、複雑な顔をしてさ」

分かっているよ。これはゴールなんかじゃない。スタートなんだつて。

隊長が言っていただろう。私たちが架ける橋は人を未来へと導く橋だ、って。

俺もようやく土台を作る準備くらいはできたかな。

「どんな橋にするかは、これからゆっくり考えますよ。先輩」

斜面へと着地した俺に、みんながねぎらいの言葉をかけてくれた。それに俺はこう答える。

「俺は、ゴール前でボールが転がってくるのを待っていただけですから」

そう。MVPはリンダだし、優秀選手は隊長と副隊長だろう。

監督の采配も見事だったし、スタッフの働きも最高だった。

俺は最後のおいしいところを譲ってもらっただけ。

それでも、少しくらいは余韻に浸る時間はあってもいいかな。

――そうはさせまいと、連鎖的な爆発音が響き渡る。

島の向こう側、上陸部隊とスイレノ島の戦力が交戦しているはずの方角だった。

間髪いれずにエルリック司令から通信が入った。

「みんなご苦労様だったね。作戦完遂の達成感に浸りたいところだろうけれど、緊急事態が発生してしまった。すまないけれど、正面の上陸部隊の救助に向かってもらえないかな？」

言葉尻こそ柔らかいものの、司令の表情は険しい。

『救助？ 加勢ではなく救助ですか？』

アドリアナ隊長の質問に司令の顔は更に険しくなる。

『戦闘はほぼ終息したよ。向こうのD・F・部隊の特攻と自爆攻撃のおかげで両者痛み分け。両軍ともほぼ全滅だよ』

『特攻だあ？』ロブソン副隊長が訳の分からないものを見たように言う。

『その通り。負傷者多数。至急救援を乞う、って感じなのさ』

『ロブソンは私と来て。ラスティ、あなたはサイルフの様子と、可能であればパイロットの生存確認をして。指示をするまではここを動かないこと』

隊長の判断、決断、対応はいつもながらに早い。この早さが隊長の器というやつなのだろう。

『あいよ』そう言うところブソン副隊長は、俺に対してプライベート回線を開く。

『あれのパイロットが生きているようなら、煮るなり焼くなり好きにしてもいいんだぜラスティ。ただし、アドリアナたちにはばれないようにやることだな』

崩れ落ちたサイルフの亡骸に親指を向けて、副隊長は笑った。

「……………」

うん。やっぱりそうだ。

やっぱり俺は、この副隊長が苦手だ。尊敬はできても、敬愛はできないな。

ジルは、不安げな顔のまま立ち尽くしている。

暗く、狭いコクピットの中で、手足を大の字に開いた状態で固定された少年は、姉代わりの女性と蒼き翼のサイルフの無事だけを祈っていた。

「僕が行くまでの辛抱だからね」そう呟いたジルは、オーランドへ怒りをぶつける。「何をやっているんだよオーランド！ あれだけ

『僕の力が必要だ』って言っていたくせに、肝心なときに出撃できないなんておかしいよ!」

「もう少し待てと言っている!」

一心不乱にキーボードと喧嘩をしながらオーランドも声を荒げた。

モニターには発進カタパルトの動作不良を示す赤いエラー通知が空しく点滅している。

その様子を少し離れたところから見ていた男が口を開いた。

「この日のために万全を喫し、完璧な状態にまで仕上げた秘密兵器でも発進できなければ何の意味もない。このままでは、せつかくの秘密兵器が文字通り秘密のままで終わってしまう—— 実に滑稽だな」

黒い長髪を揺らし、傍観者然とした男は蔑んだ表情を見せる。

「オブザーバーであればそれらしく、黙って見ていてくれないミスター・スタウト!」

オーランドの怒声を軽くないながらスタウトと呼ばれた男は携帯端末を広げる。そして冷酷な微笑を浮かべながら言った。

「そうもいかないな。君の秘密兵器はいつ発進できるのか分かったものじゃない。君を待つ間に国防軍にここまで攻め込まれたら、それこそバカだろう? ここは少しばかり助け舟を出させてもらう」

「何をするつもりだ?」

「せつかく用意してあげたプレゼントがあまり役に立っていないようだからね。本来の使い方を見せてあげようかと思つてね」

プレゼントとは、今まさに島を守るために戦っているD・F・部隊のことだった。

D・F・は素人が乗って動かせる乗り物ではない。戦闘をするとなればなお更で、国防軍では専門の教育と訓練を受けたものだけがD・F・パイロットとして登録されていた。

だが、スタウトの用意した戦闘支援システム搭載型のD・F・を使えば、未経験の人間であっても国防軍と互角に渡り合うレベルで戦闘をすることができた。今、戦闘を繰り広げているD・F・部隊に

搭乗しているのは、オーランドの志に同意し、彼に協力する研究者たちだった。

「本来の使い方だと？ 未経験者を乗せて戦闘をさせる以外の使い方があるのか？」

「確かに、用意したD・Fには戦闘支援を行う人工智能が搭載してある。その力を使えば、国防軍の量産型程度が相手であればそれなりに戦闘はこなせるだろう。だが、所詮は量産型を相手に互角、程度というのが関の山だ」

「それで充分だ。パイロットがいない我々にとって、研究員がD・Fを操縦できるというだけで充分にありがたい」

「感謝してもらえて嬉しいよ。でも、こちらはその程度じゃ満足できなくてね——」

端末の操作を終えたスタウトは、戦況を写す大型スクリーンに目をやった。

『オーランド博士、オーランド博士！』

研究員の一人、ガラガラ声の男から悲壮感に満ちた通信が入る。

「どうした！」

『人工智能が勝手に！ コントロールが突然効かなくなって——
うわああああ！』

絶叫を爆炎が包み込み、上陸部隊のD・Fを道連れにレーダーから反応が消えていった。

「何をした！」オーランドがスタウトを睨みつける。

「言ったはずだろ、助け舟だとね」

スタウトは少年のように純真な瞳でモニターを見つめた。

正面に展開していたD・F部隊が、海軍の上陸部隊を目掛けて猛然と突撃を開始する。

『なんだ、機体が勝手に！ うわああ、ぶつかるところ！』

『止まれ！ 止まってえ！ きゃあああああ！』

戦闘支援システムの助けを借りてギリギリの戦いをしていた研究員たちは、突然の人工智能の「暴走」に、ただただ悲鳴を上げなが

ら爆発に消えていった。

「国防軍の機体を道連れに自爆だと——パイロットが乗っているんだぞ！」

「君もあのプロジェクトのメンバーだったのなら、人工知能搭載型兵器の意義くらいは知っているだろう？ 兵器を使い捨ての消耗品とし、無駄な死傷者を出さずに敵を倒す。消耗品ごときに人を乗せるほうがどうかしていると思うけど」スタウトはすました顔で続ける。「それよりもいいのかい。早く秘密兵器を出さなくて。頼みのサイルフも撃墜されたみたいだよ。今回は随分とあっさりだったね」

室内にはスタウトの乾いた笑いが響き渡った。

「分かっている！」

オーランドがキーボード力の限りに叩くと、モニターの中央に居座っていたエラーを示す赤い文字がようやく消え去った。

「待たせたなジル。さあ、君とソールの力を、奴らに、見せ付けてやれ！」

『分かったよ』待っていましたと言わんばかりにジルが瞳を輝かせる。『オーランド、ホワイトに戻るよう伝えて。後は僕に任せて、つて』

「……………カタパルト起動。射出する」

『オーランド、ホワイトにい……………っ……………』垂直方向への急上昇にジルは舌を噛みそうになる。

爆発音は断続的に続いていた。

特攻する側とされる側。それぞれの悲鳴と絶叫が混ざり合って、スイレイン島は悲劇の戦場へと姿を変えていた。

「さてと。正面の敵部隊は一掃できたようだから、ひとまずここに攻め込まれる危険性は下がったわけだ。後は、サイルフを撃破した連中と君の秘密兵器との力比べといったところか。そういえば向こうはまだ、セイラムを出してきていないようだね」

「出さざるをえなくなる。ソールの力を目にすればな」

「これからどうなるか、しっかりと目に焼き付けさせてもらおうしよう」

「好きにしる」

スポンサーに対して随分な物言いだな、という言葉にオーランドは耳を貸さなかった。

ジルは、変わり果てたスイレノ島の姿に愕然としていた。

ホワイトと眺めた草木の絨毯はボロボロに破れ、ニエルと駆けた白銀の砂浜にはD・Fの残骸が投げ捨てられて、汚れた煙を出していた。鳥たち魚たちの姿も見当たらない。

右奥に動く影を二つ見つける。それは二機のD・Fだった。大きな剣を手にした機体が前を歩き、すぐ後ろに銃を構えたもう一機が続いている。

「違う、あそこじゃない。空にはいない。どこにいったんだよホワイト……」

ジルの使命は国防軍を殲滅すること。

だが、ただ一人の家族を探す少年にとって、そんなことは二の次だった。一心不乱にサイルフの、大好きな人の姿を探す。

「どこにいったの、ニエル？ ええと、ここをこうやって、レーダーを動体探知モードにして——この二つはさっきの二機で……反応が後ろにもう一つ」

ジルはコクピット内で直立したままコンパスのようにぐるりと回転する。

島で一番高いところにいるジルからは、島の全景を見渡すことができた。

「両腕に爪が付いた機体——あれも国防軍なの？ だったら、後であいつも始末しないと」

そう呟いたジルは、爪の機体の足下に横たわる見覚えのある姿に顔色を失った。

「……………」

魚のように口をパクパクとさせ、よだれを垂らしながら薄ら笑いを浮かべるジル。

「そんなところで、何をやっているんだよ？　ほら、僕が戦うんだからもういいよ。安全なところに下がちなよ——　早く下がってよ！」

翼をもがれ、動力を破壊され、地べたに這いつくばったサイルフはピクリとも動かなかった。

ジルの甲高い声だけが、暗いコクピット内を空しく跳ね回る。

「そうか——　そいつが邪魔しているんだね。そいつのせいで、僕のところに来れないんだね？　分かったよ。分かったよ——　まずはそいつを、そいつを、ぶちのめえエえすうううう！」

無反応だったコクピット内の機械が、ジルの怒りに呼応して青白く輝く。

目の前の空間が白く、眩しく収縮していった。

俺はもう、迷わない。そう決めていたはずだった。

「何故、君が——」

でも、これは反則だよ。

「教えてくれよ——　なんで君がそこに座っているんだ」

運命の再会だって？　できすぎだろう、こんな展開は。

そこに、もう動かないサイルフのコクピットに座っているのは間違いなく彼女だった。

紅茶色の瞳。儚げに垂れた目。深緑色の髪。あのとときと違うのは、背中まで下ろしていた髪の毛を一つにまとめていることくらい。

確信はあった。そこにいるのは、間違いなくニエルだった。

それでも俺は、モニター越しにこちらを伺う彼女の様子に違和感を覚えた。

決定的に違うのは雰囲気。彼女のかもし出す空気だった。

冷たいを通り越し、凍りつくのさらにその向こう。温度を感じることができない。

『そういうことか——』

彼女の第一声は、ゾクツとするほどの低温な低音だった。

『ニエルの知り合いが、国防軍のパイロットだとは思わなかった——』

言葉の意味が分からなかった。そこにいる君はニエルではないのか？ 他人の空似？ でも、君は確実に「ニエル」と口にした。

『もう、サイルフに力は残っていない。わたしの役目は終わっている——』

「君は、何を言っている？」

彼女はゆっくりと目を閉じた。憑き物でも取れたかのようにスツと両肩から力が抜けていく。

——ガクンと頭を垂れた彼女は、やがてそろりと頭を上げた。

瞳を開いて、俺を見て、目尻を下げて、静かに微笑んで、眩しそうに言った。

『また逢えるだなんて、思ってたよ。ラストイ』

.....

「——そうだな。うん、俺も思っていなかった」

ニエルは、そう、寂しそうな顔をしていた。

いつも笑っていたのに。いつも優しく微笑んでいたのに。いつも？

俺はニエルの何を知っている？ たった半日。半日しか一緒にいなかった俺が。

何から話せばいいのかが分からない。

どういう順番で言葉を並べればいいのかが分からない。

俺は何を聞けばいい？ 何を問えばいい？ 迷わない。そう決めたはずなのに。

『色々なことがあって、色々な理由があった。それじゃダメかな？』

ほんの少し悪戯っぽい笑顔を浮かべて彼女は、ニエルは言った。
俺が言葉に詰まっているのを見透かされたのだろう。

思えば、最初からそうだった。

俺のことは見通されているのに、俺はニエルのことを何も知らない。
あの日、何もできなかったのは男として情けないことだと思う。
だからといって、サイルフのパイロットとして現れるのはメチャク
チャすぎる。

「ゴメン……　そういうわけにはいかない」

「そうだよ。仕方ないよね——」ニエルは諦めたように、朗らかな微笑を見せた。

だが、それも一瞬で、彼女の顔に戦慄が走る。

「あれは！　ジル、こっちを狙っているの？　やめて！」

ニエルは俺の後方、高台にある観測施設に向かって声を張り上げた。

「ダメ、間に合わない——　サイルフ、お願いっつ！」

ニエルの心の底から引きずり出したような哀願に呼応したサイルフが、もう動けないはずの蒼き魔人が、最後の力でこっちに突っ込んでくる。

俺は、身をかわす間もなく体当たりをまともに受けて、もつれ合うように倒れこんだ。

ギョオウウウン——

地に背がつく寸前、俺のN型とサイルフをなぎ払うかのような光の束が、そら恐ろしい勢いで通過していった。眩いばかりの閃光に目の前が真っ白になる。数秒後、視界が回復していく過程で俺は光の正体を知った。

「ビーム……　右腕を持っていけた？」

ステータスマニターを確認するまでもなかった。ビームの直撃を浴びた右腕は、ルーシエットさんご自慢の耐熱セラミック素材のクローもろともにごっそり焼け落ちていた。完全に焼き切れてしまっていたので誘爆の心配はなさそうだったが、ダメージは大きい。

「ニエルっ！」咄嗟に彼女の名を呼んだ。

俺を庇い、腰から下が吹き飛んだサイルフは、静かに、完全に、力尽きていた。

俺はコクピットから飛び出した。

上半身と頭だけになってしまったサイルフのコクピットハッチが半開きになっている。隙間に腕を押し込み力いっぱい引くと、鈍い音と共にハッチが開いた。辛うじて生きているシステムが明かりを灯し、そこかしこに火花が飛び散るコクピット内に、ニエルは横たわっていた。肩を揺ると僅かに呻き声を上げたのに胸を撫で下ろし、彼女をそつと抱きかかえる。

『なんでだよ！　なんで邪魔をするんだよ！　僕は、僕は、うわあああああつ！』

通信機が生きていたのだろう。ノイズ交じりだが誰かの絶叫がコクピット内に響き渡る。

俺はニエルを背負い、近くの岩陰へと身を隠した。さっきのビームがもう一度来るかもしれないと思い機体には戻らなかった。

「一体何なんだ。あのウニの化け物は――」

高台にある施設には異様な物体が居座っていた。

トゲに覆われた鉄球。巨大なウニの化け物。

そう形容するしかない巨大な物体が周囲に向けて無差別にビームを撒き散らしていた。

「あれは……ソール」

そよ風のようにか細い声で、意識を取り戻したニエルが呟く。俺は彼女の背に腕を回す。

「大丈夫かい？」

ニエルはゆっくりと頷いた。

「ラストイ、お願い――　ジルを、あの子を助けてあげて」

「……その前に、話してもらいたい」

スイレン島は何なのか。あのウニの化け物は何なのか。ジルというのは何なのか。

そして、何よりも、君は、誰なのか。

——二エルの話聞いた俺は、機体に戻り、ランドホエールへの通信回線を開いた。

『無事だったかラスティ君。いくら呼びかけても応答がないから心配したよ』

エルリック司令でも、ちゃんと部下の心配くらいはしてくれらしい。

——さすがに、それは言い過ぎか。

「すみませんでした。理由は後で話します。謝るついでにお願いがあります。今から送る座標に向けてセイラムを射出してもらえませんか」

『——随分と思い切ったことを言うものだね。僕たちは「サイルフ撃破」という当初の任務を達成した。加えて、向こうさんの自爆攻撃のおかげで海軍部隊は壊滅状態だ。そこへ来て巨大なイガグリ型兵器の出現。さらには、大型低気圧が接近中ときている。普通に考えれば、ここで出す判断は「撤退」の一択だろうけれど』司令は一呼吸置いて意味深に笑った。『僕たちは普通の部隊ではないからね。ルーシエットに代わろう。詳細は彼女に』

通信モニターが格納庫のルーシエットさんへと切り替わる。

『今大急ぎで計算をしているけれど、緊急発進用のカタパルトデッキから最大パワーで射出すれば届くはずよ。問題は空中では無防備になってしまうことだけれど、そこはみんなにカバーしてもらいましょう』

こんなときでも、いや、こんなときだからこそルーシエットさんは生き生きとしている。

——ほんと、生粋のメカオタク、いや、メカニクなんだな。

「ムチャを聞いてくれてありがとうございます。それで、セイラムの状態は？」

『万全よ。でもいいの？ セイラムはラスティ君にとって——』

「これが最後です」

そう、これが最後。そう決めたから。今、決めたから。

「どうしても、今やらないといけないことができました。その為にはセイラムの力が必要です。自分で望んで乗るのは最初で最後、そのつもりです」

『分かったわ。あなたとセイラムを引き合わせたのはあたしだもの。それなら、最後もあたしがしっかりと、セイラムをあなたの元にエスコートするわ』

「よろしくお願いします」

ギョツと唇をかみ締めて力強く親指を立てたルーシエットさんがモニターから消えると、今度は隊長たちの顔が並ぶ。

『話は聞いたわ。あの金平糖のお化けを何とかするのね』

「隊長から見たら、あれは金平糖ですか。俺はウニだと思ったし、司令はイガグリって言っていましたよ」

隊長はいつものように、クールで暖かな眼差しで俺を見てくれていた。

——俺があなたを支えることができるのは、いつの日になるんでしょうね。

『んじゃ、俺はハリセンボンとでも言っておくか』

さすがのロブソン副隊長も少し疲れた顔をしている。あの化け物のチーム攻撃にさらされつつ、生き残った海軍部隊の救助を行うのは容易ではなかったはずだ。

『今日は露払いに徹する日だな、まったく』

「可愛い後輩の顔を立ててもバチは当たりませんよ、きつと」

——副隊長は強い。そして頼りになる。好き嫌いは別の話だけど。同期をフォローする私には、何が当たるのかしら？

「そうだな。試しにデートでもしてみるか？」

『遠慮しておくわ。どこかの先輩にわざわざネタを提供するようなものじゃない』

「そりゃそうだ」

リンダは、切れ長の目を流してプイとそっぽを向いた。

『さて、初陣としてはハードな展開になってしまったけれど、そろそろ決めに行くでしょう。みんなまだまだ余力はあるみたいだからね。嵐が来る前にさっさと終わらせようか』

エルリック司令の言葉と共に、全員の顔が一斉に本気モードへと変わる。

『カタパルトデッキ固定完了。射出三十秒前。艦の慣性制御をマニュアルモードへ移行。セーフティロック解除—— セイラム、射出へのカウントダウン！』

ようやく、一本の線に繋がった。

僕は今、誰もいないコクピットで一人待っている。

カタパルトに乗せられて、彼の待つ場所へと射出されるのを。

「彼」とは物語の主人公、ラストィーウィン。

「僕」は彼を見守るもの。

ウォース旧市街地での戦い。フラムでの出遭いと戦い。そして別れ。マリアノ基地での新しい仲間との邂逅。そして、スイレン島での戦いと、彼女との再会。

いつも僕は、彼の姿を見守っていた。

「彼女」はニエルでありホワイトでもある。

フラムで見せた花のように可憐な姿。それが彼女の表の顔ならば。空を駆ける機動兵器サイルフのパイロット。それは彼女の裏の顔なのだろうか。

ニエルはラストィに、自分自身のことを語った。

ニエルとジルはある戦災の町で生き残った孤児であり、同じ施設に収容されたところからずっと一緒にいる姉弟同然の間柄だという。施設に入った彼女たちを待っていたのは、身体検査という名の適正テ

ストだった。それがサイルフの適合者を探すテストだったということを知ったのは随分後になってからだったという。何故そこで、そんなテストが行われたのかは分からないけれど、彼女は何百、何千という人々の中から選ばれた存在だった。

サイルフの適合者として、即ちパイロットして選ばれた彼女を待っていたのは、オーランドという名の科学者と、訓練という名の人体実験の日々だった。連日続く過酷な人体実験の前に彼女の心は、サイルフに乗るただけに感情の所有を放棄した「ホワイト」と、二人分の想いを預かった感受性豊かな「ニエル」に分裂してしまっただという。

彼女がパイロットとしての自分を受け入れざるを得なかった理由は、ジルの存在だった。自分のことを姉のように慕うジルを人質同然にされた彼女に、他の選択肢は存在しなかった。

やがて二人は、サイルフと共にスイレイン島へと移送される。

オーランドは彼女を自分の欲望のために利用した。サイルフと同じプロジェクトで開発されたセイラムを鹵獲することが彼女に与えられた使命だった。果てることなく続く訓練は、ホワイトの心を完全に崩壊させてしまった。

ジルは決戦兵器ソールのパイロットとして見出された。ジルにとって、「ソールが完成すればホワイトが戦う必要はなくなる」というオーランドの言葉は文字通りの甘い蜜だった。

何の疑いもなくソールに乗るジルの心は、彼女への依存心だけが強くなっていた。

ニエルはラスティに頭を下げた。

あらん限りの想いを込めて、彼女はラスティに懇願する。

「あの子に心からの笑顔を取り戻させてあげたい。だから、お願い

……」

それは純粹なまでの願い。ニエルとホワイト、二人分の想い。

「分かったよニエル。一緒にその子を助け出そう。俺たちの力で」

ラストイの瞳には強い意思が宿っていた。

彼が戦う理由。その答えが今、見つかったのかもしれない。

『カウントダウン。――3、2、1――射出……』

これが僕にとって最後の「出番」になるのだろうか。

僕を待つラストイの元へ、雲の海へと飛び出していく。

ウニの化け物「ソール」が僕を照準に捉えている。光が集まってい

く。
サイルフのような翼を持たない僕は、風に身体を預けることしかできない。

糸を引くように、白い軌跡が僕を追い抜いていく。

ランドホエール上から狙撃するリンダのスナイパーライフルが描く弾道の軌跡。

サイルフの動力を撃ち貫いた精密射撃が、ビームの発射を妨害する。ラストイも言っていたけれど、今日のMVPは間違いなくリンダだろう。

大地が近づいてくる。

ラストイを乗せていない僕では、着地はおろか受身をとることすらできない。

地面に激突した。大きく二回バウンドして、三度横向きに回転して仰向けに地面を削ったところでようやく止まることができた。今にも泣き出しそうな鉛色の空が広がっている。

ニエルを背負ったラストイが駆け寄ってきた。

傍にまでやってきて、彼は僕を見上げてギョツと口を結ぶ。

ニエルと共にコクピットに乗り込んで、彼は大きく深呼吸して息を整えた。

固い決意と共にシートに腰を下ろし、彼は呟いた。

「さすがだなルーシエツトさんは。それにリンダも、隊長たちも」

――おかげで僕は地面へとダイブする羽目になったわけだけだ。

「そんなこと言うなって。また俺に力を貸してくれ、セイラム」

—— ああ、もちろんだよ。一番の見せ場じゃないか。

「ありがとう、助かるよ—— さあ、ニエル。君の大切な弟のところへ行く」

—— そう、僕は彼に力を与えるもの。

—— 彼と心を通わせる存在。

—— 僕はセイラム。

まったく、大げさな夢になってきたものだよ、ほんと。

アドリアナ隊長とロブソン副隊長の二人を持ってしても手に余る程にソールは強大だった。無差別に繰り出されるビーム攻撃を芸術的な連携プレーがいくぐりながら接近しても、分厚い殻が立ち上がり有効打を与えられずにいる。

それでも二人には余裕があった。数年ぶりの連携は切れ味を増していくばかりだった。

『ラスティの準備が整ったみたいだぜ。ルーキーにはかりおいしい所を持っていかれるのは癪だが、今日はそういう日だと思うしかなさそうだな』

『ロブソンにしては、随分と謙虚じゃない』

『後輩に花を持たせてやるのさ。なんといつても俺は、あの二人の教育担当だからな』

『うかうかしていると、あの子たちに追い抜かれるわよ』

『俺が抜かれるってことは、そのずっと前にお前も抜かれているってわけだろう？ 隊長としてそれはまずいんじゃないのか、アドリアナさんよ？』

『言ってくれるわね。戻ったら一勝負してみる？』

『いいぜ、たつぷり可愛がつてやるよ』

一撃もらえば致命傷になりかねないビームの嵐の中で軽口を叩き合う二人。

『そういうわけだラスティ。さっさと終わらせて引き上げるぞ』

「そのつもりです」

『考えはあるの？ 相手は攻防共に強力よ』

「ありません。正面から行くだけです。必ず止めてみせます」

隊長が「命に代えても、なんて考えたりはしていない？」と聞いてきたので、「死んだら元も子もないですから」と応えた。

さて、それじゃ行くとしようか。

「今の人たちは？」コクピットの隅に隠れていたニエルが不思議そうに聞いてくる。

「みんな俺の仲間だよ。帰ったら紹介する。いい人たちだから」

「——うん。楽しみにしてる」

「オーケイ。何とかあのソールに取り付いて直接回線を繋げるから、そこから先は任せる。ジルを説得できるのは君しかいないんだから」

「うん」

操縦桿に力をこめる。セイラムにビームの雨をかくぐるだけの機動力は期待できない。であれば取る方法の一つ。小細工なし、一直線に突っ込むのみ。

俺たちは、再び心一つにしてソールへ向けて駆け出す。

ソールを覆うトゲの一つが白く輝き大気が歪む。奴のビームがこちらを狙っている。

「来ることが分かってれば対応できる。セイラム！」

——了解。シールドを展開。

セイラムの肘と手首の関節から炎が渦を巻いて湧き出す。すぐさま炎は、燃え盛る盾となってビームの軌道を折り曲げた。

「よし。このまま一気に——」

ソールを覆うトゲのすべてが逆立ち、眩い光を帯びていく。中空に漂う埃が渦を巻いてソールへと吸い寄せられていく。

ソールは全てのエネルギーを集約して撃ち放とうとしていた。

ジルの心は、近づいてくる全てに対する憎悪に支配されているのだろっ。

「それでも、前へ進むしかない。こちら全開で行くぞ!」

——分かったよ。出力全開だ。

俺の想いが、ニエルの願いが、ホワイトの祈りが、セイラムに力を与える。

「兄さん! セイラムから翼が、紅い翼が……」

「炎の翼か——ルーシェット。メカニックとしてどう考える?」

「普通に考えればありえないわ。排熱用のスラスタから炎が出るだけでもありえないのに、それが翼になるだなんて……でも、フラムで見せた炎の竜に続いてこれが二回目。ラストイ君が機体の力を引き出しているとは思えない。そう、彼の想いが」

「想いの強さが限界以上の性能を引き出す。オーバードライブシステムか。まったく難儀なシステムだよ。搭乗者の資質に依存する上に、発動すれば機体自身にも多大なダメージを残す諸刃の剣ときたものだからね」

「メカニックとしての意見を言うと、あれは設計不良ではなく、企画不備だと思うけど」

「そう言われると苦しいな。完成の日を待たずにプロジェクトが解散してしまったのが残念だよ、本当に——」

エルリックとルーシェットは、ランドホエールの艦橋からセイラムの戦いを見守っていた。

波は随分と荒くなり、しけりが容赦なく艦体を揺らしている。

「ああ。思い出したよ、ルーシェット」

「突然どうしたのよ兄さん?」

ポンと手を叩く兄の様子を訝しげに見つめる妹。

「プロジェクトメンバーであれと似たようなプランを出していた人

間がいたのを思い出した。拠点防衛用兵器で確か、防衛対象エリアで海拔が一番高い場所に全方位射撃型の固定ビーム砲台を配置する、みたいな感じだったと思うんだけど」

「それって、あのイガグリのお化けそのままじゃない！」

スイレん島を、島で一番の高台になっている場所を指差してルーシエツトが叫んだ。

「やっぱりそう思う？ 発案者はなんて言ってたかな…… 名前は覚えていないけれど、何度か喋ったことはあってね。自分のプランが採用されれば最強の防衛システムができるんだ、って自信たっぷり言っていたなあ」

「その言い方だと、採用されなかったのね？」

「割とあっさり却下されたよ。プランには致命的な欠点があったんだ。全方位に向けて高出力のビームを発射する。そんな芸当を行うためにはどれだけ大出力の動力がいると思う？ それこそ発電所のレベルだよ」昔を懐かしむようにタバコをふかしながら、エルリックは大きく煙を吐いた。

「でも、現に今起動しているじゃない。さっきからビームだって撃っているわ」

ルーシエツトが指差した先のスクリーンには、大地を踏みしめて前進するセイラムが大写しになっている。断続的に浴びせかけられるビーム攻撃は、セイラムの分厚い装甲を確実にそぎ落としていた。「可能性は幾つかある。大出力大容量の動力を開発した。もしくは僅かなエネルギーでも大出力のビームを発射できる仕組みを作り上げた」

「考えられない！ そんな技術がこんな絶海の孤島にあるわけないでしょ」

「そうだね。まず考えられない。だとすると、理由はおのずと浮かび上がる」エルリックは通信機を手に取ると、リンダを呼び出した。「リンダです。司令、あの上まではラスティがやられてしまします。ここからじゃ援護しようにも……」

「分かっているよ。だからリンダ君、君に今日最後の仕事をしてもらおうと思ってるね。これから指示する場所を撃ち抜くだけでいい。それであのビームは止まるはずだから」

「撃ち抜く？ 分かりました、どんな場所でも必ず撃ち抜いてみせます。指示を下さい」

自らの勝利を身体の内奥の奥の、更に深い奥の底から確信しきったオーランドの高笑い、施設中を駆け回っていた。

「アハハハハッ！ そうだ、ソール！ セイラムなど蹴散らしてしまえ！ サイルフを倒したセイラムを葬り去れば、ソールこそが最強だ！ そうさ、私の生み出したソールこそが最高の兵器なんだ。アハハッハッハハハッ！」

「随分と、楽しそうだな」長髪を揺らしながらスタウトが冷やかに言い放つ。

「当然だろう？ 私の恨みと屈辱の全てを注ぎ込んだソールが、プロジェクトのボンクラどもの機体を凌駕する瞬間がすぐそこに迫っているのだから！ どんなにこの日を待ちわびたことか！」

「その狂気と自尊心剥き出しの姿が、君の本当の顔ということか――」

「やれやれ、といった顔をしながらスタウトは水の入ったグラスを口へと運ぶ。

「致命的欠陥と判断された絶対的な出力不足を、施設の発電装置と直結することで補う。なるほど、拠点防衛用兵器としてはあり得ないコンセプトではない」

「当然だ！ 私のプランは完璧なのだから！」

「完璧なプランの割には、パイロットがあのような年端も行かぬ少年なのはなぜだ？」

「ジルのことか」薄ら笑いを浮かべてオーランドは続けた。「パイロットなど誰であろうと構いやしない。継続して私につき従い、絶対的に服従し、意のまま動かすことができる人材であればな。それ

には意思を持たぬ子供が一番手っ取り早い。それだけのことだ」

「——なるほど。サイルフのパイロットの少女、あの少年。それぞれが互いを繋ぎとめる枷になるよう仕立て上げたということか。先ほど君は人を乗せた機体を自爆させることを不快に思っていたようだが、君がやっていることも人道的に非難されるべきことだな」

「何とでも言う方がいい！ ソールの力の前でそのような問答は無意味だ！ 全てを滅ばせば何も残りはしないのだから。ひゃっハハハハっ！」

自分のプランが否定された瞬間に芽生え、ソールの開発に没頭する間に膨らみ続けたものがオーランドの中で弾け飛んでいた。

彼がサイルフを手元に置いていたのも、セイラムを捕獲しようとしたのも全てはソールが最も優れた兵器だということを証明するためだった。自分のプランを門前払いしたプロジェクトが生み出した二体の兵器をソールの力で破壊する。ただ破壊するだけではない。二対に適合するパイロットを見つけ出し、調整し、鍛え上げ、国防軍を凌駕できる性能を発揮できる状態になった上で、完膚なきまでに叩き潰す。

オーランドにとっては、サイルフもホワイトもただの引き立て役に過ぎなかった。

過酷な特訓という名の精神制御によって彼女の心が壊れたことも、ホワイトが痛みも苦しみも感じなくなっていることも、ニエルというクソの役にも立たない別人格が生まれたことも、ジルを守るといふくだらない想いだけで生きていることも、何もかもを知った上で彼女を利用していた。サイルフを動かせる人形を手放すなどという選択肢はありえなかったからだ。

その貴重な人形も、フラム、スイレイン島と続いた無様な失態によって、ただの役立たずへと成り下がった。ソールの踏み台にすらなれずに墜ちた蒼き翼のことなどどうでもよかった。

ジルが戻ってきたらまた適当に精神制御をすればいい。次の標的がホワイトを殺したことにでもすれば、ジルは死に物狂いで戦うだろ

う。

「そうさ。私と共にいれば、全ての頂点に立てるのだから！ ハハハハハッ！」

オーランドの心もまた、壊れていた。

壊れた歯車のように、無秩序な回転を続ける彼を止めるものは、そこにはいなかった。

ソールに一步近づく度に光の束が降り注いでくる。

絶え間なく続くビーム攻撃を受け止め、受け流し、受けもらし、受けきれず。

傷つきながらも俺とセイラムは怯むことなく前進を続けた。

俺に想いを託して涙を流してくれたニエルのために。

そして何より、初めて抱くこの熱い想いが、俺を前へ前へと押し出していく。

「よし、ソールへの回線を開く」この距離まで接近すれば接触回線を開けるはずだ。

ギョツと唇をかみ締めてニエルが顎を引く。

ソールへ向けて通信用端末を射出する。——上手く向こうの機体表面へと取り付いた。

回線を開く。そこには泣き叫ぶ少年の姿。

『死ねえ！ 死ね！ 死ねよ！ 早く死ねよ！ 消えろよ！ 倒れろよ！ くたばれって言ってるんだよ！ うわああああああ！』

涙。鼻水。涎。汗。顔中からあらゆる水分を垂れ流し、ジルは声の限りに絶叫する。

頭が変形するほどに締め上げられたヘッドギア。

礫にされ、千切れんばかりに拘束された手足。

その様子を見て、パイロットと呼ぶものは一人としていないだろう。

ジルが泣き叫ぶ度に機体は青白く光り、ジルがもがき苦しむ毎にビームが発射される。

それはまるで、パイロットの痛みを吸い取って力にし、パイロットの苦しみを吸い込んで力にし、パイロットの涙を飲み込んで力にしているようだった。

『うぐあああああ！ 消えろお！ ホワイトを殺した奴は消えろ！ ニエルを殺した奴は死ねえ！ あがあああああああ！』

瞼が裏返るほど目を見開き、焼き切れんばかりに喉を鳴らす少年の姿を目にした俺は、機体の動きを止めてしまう。そこにビームの直撃を受けてしまいバランスを崩す。今の一撃で右肩の装甲を持っていた。いかれた。

「これは、一体—— どうなっているんだニエル。あれがジルなのか？」

ニエルは何も言わない。いや、何も言えない。歯をカタカタ鳴らして震えている。あまりにも痛々しいジルの姿を直視できず肩を震わせて涙ぐんでいた。

「ニエル、しっかりしろ。——くうっ！」

今度は腰の装甲板が弾け飛んだ。いくらセイラムの装甲が屈強でもこれ以上は。でも。

「ここで、下がるわけにはいかない。セイラム、頼む！」

——オーケイ。フルパワーだ。

揺らめく炎の盾が輝きを増す。粒子を乱されたビームは屈折して弾けとんだ。

「わたし—— 知らなかった…… ジルがあんな…… 酷いよ……」 涙声でニエルが咽ぶ。

「しっかりするんだ。あの子を助けるんだろう？」

そうさ。助けるんだ。あの子のために。ニエルのために。

「だったら、君が泣いていたらダメだ」

ジルがオーランドに言われたことだけを信じて戦っていることを、痛みに耐えて戦えば大好きなホワイトが戦わなくて済むと確信して

いることを、苦しみに耐えて敵を倒せば大好きなニエルといつも一緒にいれるのだと信じていることを。

そんなことを俺は知らない。

「でも……」

「あの子を助けることができるのは君だけだ」

ソールが最強だということが証明することで、二人は自由になれると妄信していることを。

俺はこの時点ではそんなことを知らない。

「分かった—— うん、分かった。ラストイ——」

涙を拭い、ニエルは前を向く。

彼女の紅茶色の瞳が、深紅の光を取り戻す。

操縦桿を握る俺の手に、ニエルの手が重なる。細く艶やかで、力強く繊細な彼女の細指が俺の手に絡む。

「ジル—— ジル、聞こえる？ わたしだよ。分かるよね？」

発狂寸前のジルに零れ落ちるほどの笑顔を向けるニエル。

大丈夫、零れたぶんは俺が拾い集めるから。

『うるさいいいい！ 僕に話しかけるなあああ！ 邪魔をする奴は死んでしまええええ！ みんな、みんな殺してやる！ ぐああああああああ！』

「誰もジルの邪魔なんかしないわ。だから、だから殺すだなんて言ったらダメ！」

『だまれえ！ パパも、ママもみんな死んだ。それに、それにいいいい！』もがき苦しむジルの叫び声に、怒気と絶望と悲哀と諦観が織り交ざる。『ホワイトも、ニエルもいなくなつた！ もう、僕には誰もいないんだ！ ぎゃああああああああ！』

ジルの苦みが膨らんでいくに連れてソールの攻撃は分厚さを増していく。

セイラムの動力はオーバーヒート寸前まで加熱している。燃える蒸気を噴き出す紅蓮の機体にも限界が近づきつつあった。

—— 大丈夫。まだ大丈夫さ。

「わたしは、ここにいる。だからジル—— わたしを見て」
『え?』

「わたしは大丈夫だから。あなたもこっちにおいで、ね?」

『—— え、どうなっているの?』

ジルの表情が変わった。苦痛と絶望と憤怒に染められていた顔が、あどけない少年のものへと戻っていく。ソールの攻撃が弱まってきた。

「どうもしないよ…… 今までと変わらない。わたしも、ホワイトもあなたと一緒に——」

ニエルの白くて細い手がジルへと差し伸べられる。
重なるようにホワイトの手も。

「ゴメンね、ジル—— 今まで何もしてあげられなくて、ゴメンね」
ジルの両目から大粒の涙が零れ落ちる。そして、力の限りに彼女の名を呼んだ。

「パワーダウンだ?」

オーランドの高笑いが止まる。計器に目を配り、ジルの脳波が正常に近づくのに気付いた。

「何をしているのだジルううう! 惑わされるなあ! 目の前にあるもの全てがお前の敵なのだあ! 何のためにお前みたいなガキを飼っていたと思っているんだああああ!」

オーランドはジルを呪い殺しかねないほどの形相でしゃくりあげるように言い放つ。そしてスイッチを捻る。

『うるさいい! 黙れえ! 僕の、邪魔を——するなああがががががが!』

脊髄に直接電流を流されたかのような激痛に、ジルは痙攣しながら声にならない声を上げる。

ジルの悲鳴を吸収し、ソールは更に出力を上げる。

発電装置へ直結されたソールのエネルギーには底がない。ソール自体が倒れるか、ジルが燃え尽きるまで決して止まらない。

「そうだ、それでいい！ 見る！ セイラムはもうボロボロだ！

さあとどめを刺せえ！ エネルギーの全てを奴に叩きつけるんだ、あはははははっ！」

次の瞬間、オーランドたちのいる施設内の照明が非常灯へと切り替わった。

狂気の笑いを撒き散らすオーランドと対照的に、スタウトは冷静に戦況を見つめていた。

島の裏手にいたはずの輸送艦ランドホエールがいつの間にか正面へと移動しているのを彼は見逃さなかった。

「サイルフを狙撃した輸送艦を正面に回すか—— 国防軍の指揮を執るのが彼ならばソールのことを知っていてもおかしくはない——

撤退するのであればわざわざ正面には出てこないだろう。そして、メイン電力が落ちた。となると……」スタウトは自分の考えをオーランドに伝えようとしはしなかった。仮に伝えようとしたところで、今のオーランドがそれを受け入れることはないだろう。

自分の足下すら見えていない今のオーランドには。

「君の計画。ソールの力。——それなりに楽しませてもらったよ」スタウトは静かにその場を後にした。

セイラムはとくに限界を超えていた。

留まることなく破壊力を増すソールの猛攻の前に、機体の損耗率は既に七割を超えている。このままだと、もってもあと数十秒だろう。でも。

「ジル、ジル！ もう止めて！ お願いだから——もう、止めてええええええ！」

『うわあああああ！ ニエルっ！ 僕は、いやだあ…… あぐうあ
ああ！ いやだ、いやだ、イヤダ、ぎゃあああああ！』

もはやジルが自分の意思でどうにかできる状態ではなかった。

拘束され、身悶え、泣き叫び、助けを乞い、哀願する。ジルにはそれしかできなかった。

「……にしてあげて」身を切られるような、沈痛な横顔でニエルが声を絞り出す。

「——今、なんて言った？」

「もう終わらせてあげて！ 可哀相だよ。こんなの酷過ぎるよ——」

「——さつきも言っただろ。君が泣いていたらダメだって」

「でも……でも……」ニエルは真珠のような涙を流す。

でももへちまもない。そう言いたいところだけど、万策尽きかけているのも事実。

今の状態でジルを助け出すにはどうすればいい？

コクピットごと引きずり出すのか？ これだけのダメージを負ったセイラムに、絶え間ないビームをかくぐり、あの分厚い殻を破ってコクピットを引きずり出す。

そんな芸当ができるのか？

「何を迷ってるんだよ。決めたじゃないか——」

そうさ。もう俺だけの問題じゃない。ニエルとジルの、血は繋がっていないけれど深い絆で結ばれている姉弟のためにも。

不意に、唐突に、暴風雨のように吹き荒れていたビームの雨が止んだ。

同時に堪えきれなくなった鉛色の空から、大粒の雫が零れ落ちてくる。

『ラストイ！ そいつはもうビームは撃てないはずよ！』

サイドテールを揺らしながらモニターの向こうのリンダが叫ぶ。

「何をしたんだ？」

『施設と接続されたエネルギーラインを撃ち抜いた』と、ただでさえ切れ長の目を更に細くして親指を立てる。『最後はしっかり決め

なさい!』

「——すまない。ありがとうな、リンダ」

ソールは完全に沈黙した。振り落ちる雨粒がソールが流した涙を洗い落とす。この化け物と地面の間の僅かな隙間を這う青いケーブ
ルが、破れて火花を散らしている。

これを狙い撃つか——でも、リンダはきつと「止まっているものを狙うのは簡単」とか言うのだろうけど。

「さてと。これが最後だ。お前の力の全てを見せてくれ。セイラム
っ!」

——了解。僕たちの力、限界を超えた力。オーバードライブ。見せてやろう。

静かに瞼を閉じる。もう一度、心を一つに。

「わたしたちの想い」「ラストイと一緒に」「ホワイトとニエルの手がそつと重なった。

——姉さん。俺はみんなと一緒に戦います。

俺一人だと何もできないかもしれない。ううん。何もできなかったけれど、みんなの想いを一つにすれば、それは大きな力になる。それが俺たちの強さ。

——先輩。これが、今の精一杯の答えです。

みんなの力。俺たちの力。今こそ一つに——

『セイラム、オーバードライブ』

一隻の高速船がスイレネ島を静かに離れていく。

「致命的な欠陥を付け焼刃で何とかしようとしていた時点で、ソールに勝機はなかったということだな。凝り固まったこだわりと、執念と、狂気が、結果的に墓穴を掘る形になったわけだ。——残念だよオーランド君」

スタウトは窓越しにスイレネ島を振り返りながら言った。

天高く積乱雲がそびえたち、横殴りの雨が窓を叩く。

「随分と波が高くなってきたな。少し長居しすぎたか——」

オーランドが背もたれに身を預けようとしたそのとき、外が真っ白い光に包まれた。

僅かに遅れて爆音が突き抜け、衝撃波が船を襲う。オーランドが再び振り返った先には、雷雨を紅く染める爆煙がスイレン島から噴き上がっていた。

「発電施設と直結するためのケーブルを撃ち抜かれ、行き場をなくした電流が蓄積。ちょうど降り始めた雨水が建物内へと浸透し漏電、そして発電施設もともに爆発といったところか。ソールの構造的欠陥が最悪の形で露呈した。皮肉なものだな」

「いかがしますか？」船長がオーランドに問う。

「どうもしないさ。このまま進んでくれ。嵐に巻き込まれたくはないだろう？」

「了解しました」

スイレン島に背を向けて、高速船は一路リムリア本土を目指す。

「そもそも、まともに制御すらできない兵器が拠点防衛などに使えるわけがないだろう。あれはそうだな、強いて言うならば、無差別破壊兵器だな——」

波の揺れに身を任せ、オーランドは静かに眠りに落ちていった。

終章 そして、僕の夢の続きを ーフィフス・エレメンツー

終章 そして、僕の夢の続きを ーフィフス・エレメンツー

「結局このときも『雷雨と漏電による爆発事故』で片付けられちゃったのよね。スイレン島爆発事故とか言われて。どこが事故なのよね?」

ルーシエットは「ふぁー」と言いながら大きく伸びをした。

「そうだったね。ま、仕方ないだろうな。島一つ丸ごとを不法占拠され、最終的には国有の施設もろともに爆破炎上したわけだからね。そんなこと発表できやしないさ」

「そうかもしれないけれど、釈然としないわ」

「今さらそんなこと言ってもしょうがないさ。そうだろう?」

エルリックは渋い笑いを浮かべながらタバコを灰皿へと押し付けた。「――あの事件からも、もう三年も経ったのよね。つい最近のことみたいに感じるわ」

「ルーシエットも今年で二十七だろう? 三十歳なんてあつという間だから、うかうかしていると、うかうかしていらなくなるかも」「何がうかうかできなくなるっていうのよ」

ルーシエットは兄の肩をパンと叩いた。

エルリックとルーシエット兄妹は、古いアルバムを一ページずつめくっていくかのように、ゆっくりと昔話に花を咲かせていた。

「結局、施設が木っ端微塵に吹き飛んでしまったスイレン島は破棄されたのよね。後日行われた調査では何も見つからなかったそうだけど、事件の首謀者は兄さんの知り合いに間違いないんでしょう?」

「オーランドという男だろうね。特に親しい間柄ではなかったけれど、何度か話した印象から察するに、随分と自尊心の強そうな男だったかな」エルリックは背もたれに身体を預けて言った。「ま、随分と前の話だけだね」

「で、兄さんはその『随分と前に関わったもの』に今も手を取られているわけか」

「まったく、やれやれだよ」そう言いながらエルリックは次のタバコに火を点けた。

「面倒なことを引き受けちゃったって思っていたりするの？」

「面倒どころじゃないさ。とんでもなく面倒なことだよ。こんな厄介なシステムを考えた人間の顔を是非とも見てみたいね」

プカプカと煙の輪を吐き出しながらエルリックは、楽しそうに愚痴った。

「よく知っているくせに」目配せをしながらルーシエットはくるりとそっぽを向いた。「でも、どうしてお父さんはこんなよく分からないシステムを作ったのかしら？」

「天才の考えることだからね—— 人工知能の研究を始めたのだから、ただの気まぐれに違いないだろうし。自分の父親とはいえないや、父親だからこそか—— 何を考えていたかなんて分かりやしないさ」

クレメンス＝ハーミット。

ナチュラルスーパーコンダクターをはじめとする数多の発明、発見、実用化によりその名を世界に轟かせた不世出の天才科学者。国と軍に見出されて、人工知能の研究を始めたけれど、やがてその空しさに気付いて失踪した気まぐれな天才科学者。エルリック、ルーシエット兄妹の実の父親。

ルーシエットは口を尖らせると、父の作ったシステムに文句をつけた。

「どう考えても効率が悪くなるだけじゃない。人工知能が蓄積したデータにアクセスするために、わざわざ別の解析プログラムを媒体にしないといけないなんて。何のためのデータ蓄積なのよ一体？」

「まったくだよ。人工知能を擬似睡眠状態にする必要はあるし、所

々で微調整をしたり、休憩を挟んでやる必要もあるからね。しかも、サイルフのデータまで一緒に抜き出さないといけないわけだ。もう面倒くさい以外の言葉は出てこないよ」

そう言ってエルリックは、テーブルの上に設置されたモニターを眺めた。

モニターには三つのウィンドウが表示されている。

一つにはデータの転送状況を横長の青いバーが描かれている。現在の転送状況はおおよそ二十五パーセント。さっきまで二百分と表示されていた残り時間は、今は十三時間となっていてまるで信用がでない。

二つ目は映像を再生する動画プレイヤー。先ほどまで兄妹はここに映し出される映像を観ながら昔を懐かしんでいたのだが、今は停止状態になっている。

そして三つ目のウィンドウには、立体描画された洋室を模した部屋と、三人の登場人物が映し出されている。

壁際でプカプカと漂うサッカーボールが解析プログラム「ヴォル・ポニー」。

床をゴロゴロと転がっているネコは、風のサイルフの人工知能「キヤット・シーフ」。

そして、部屋の中央でイスの上にちょこんと乗せられたクマの人形。それが炎のセイラムに宿る人工知能「アル・カング」だった。

「キヤット・シーフが完全な状態だったら、こんなに手間の掛かるやり方をせずに済んだのだけだね。ま、あれだけ機体が破損した状態だったのに、データが完全に消えていなかったただけラッキーと思うべきかな」

愛くるしい仕草で床に寝そべった3Dのシロネコをマウスの矢印でツイツイと突きながらエルリックはタバコをふかした。

「でも、さすが兄さんね。キヤット・シーフの破損データをヴォル・ポニー経由で抽出して、アル・カングのデータと統合しながらダウンロードするなんて。理屈は分かるけど、そうそうできることじゃ

ないわ。本気出したら凄いんだから、普段からそうすればいいのに」
ふふっ、とエルリックはシニカルな笑みを浮かべた。

「兄さんは面倒くさいって言うけれど、このシステムじゃなかったらセイラムの蓄積したパイロットのパーソナルデータを見ることはできないわけなのよね—— プライベートに関することろまで覗けてしまつて、ちよつと気が引けるけど」

「それに関しては、パイロット本人の許可は取つてあるさ」

「どうだか—— そういえば、映像の中でセイラムともサイルフとも関係のないシーンがあつたわよね？ セイラムかサイルフに搭乗したことがある人の情報しか振り返れないはずなのに、あれは何なの？」

「ああ、あれね」エルリックは目を細めて続けた。「セイラムやサイルフが蓄積した情報だけじゃ、どうしても物語は細切れになつてしまふからね。話を綺麗に繋げるためには記録されたデータ以外の部分が必要だろ？ そこで、ところどころを叔父さんに提供してもらつた情報をで穴埋めしているのさ。もちろん叔父さんの実名は出せないから、『スタウト』っていう仮名での登場だけだ」

「—— ああ、あの黒髪ロン毛の嫌味っぽい人は叔父さんだったのね。あたし、あの人のことをよく知らないのだけど、普段は何をしている人なの？」

うーん、とひとしきり唸つてから応えづらそうにエルリックは言つた。

「叔父さんは暗躍するのが仕事だからねえ。今だつて、どこで何をやっているのか、さっぱり分からない。今回の件だつて、どこで情報を仕入れてきたのかも、なんで協力してくれる氣になつたのかさっぱり分からないわけだ。なんといつても、天才の弟だからね」

そつか、とルーシエツトは呆れを織り交ぜた表情を見せながら席を立つ。空になつたコーヒーカップをトレイへと乗せ、エルリックの肩を軽く揉みながら言つた。

「じゃ、頑張つてね天才の息子さん。式まであと三週間。関係者へ

の事前試写会までは十日なんだからね」

「十日か。それだけあれば何とかなるかな。そういえば、事前試写には誰が来るんだい？」

「返事が返ってきたのはリンダちゃんだけかな。なんだかんだでみんな来と思うけど。あと、向こうの知り合いとかも何人か来るって聞いているわ」天井を見上げながら指を折るルーシエツト。そして何かを思い出したように手を叩いた。「そうそう。当人たちには秘密なのは当然だけど、ジル君には特に気付かれないように気をつけてよね」

「あの子に知られたら、あつという間にお姉さんを初めとする大勢に話が届いてしまうだろうからね。気をつけるよ」

よろしくね、と立ち去る妹の背中にエルリックはついでの質問をぶつけた。

「で、結局のところ編集して何分にまとめればいいんだっけ？」

「二時間よ二時間。それ以上でもそれ以下でもダメよ。『二人の出会いからの軌跡を追ったスペシャルムービー』っていうお題目で式の進行に入っているのだから、しっかりお願いね」

「分かったよ。それから、コーヒーは飽きたから次からはジュースにしてくれないか？」

はいはい、と腰を振りながら出て行く妹をエルリックは見送った。

ふと彼は、モニターの向こうに「天才クレメンス」の存在を感じる。息子よ、俺の作ったシステムの解析は順調か？ お前が今触っているところなど、システムのほんの一部なんだぞ。お前に全てを解き明かすことはできるのかな？

今にもそう言い出しそうな父親の顔を思い浮かべて、エルリックはどうにもならない高揚感と劣等感と幸福感を同時に抱いた。

彼が見たただの幻か、それとも「人工知能」という名の天才の置き土産なのか――

「僕としてはどちらでもいいんだけどね。そうだろう、ラスティ君」?

ラスティ「ウィン。」

セイラムのパイロットとしての彼の道程は、ひとまずここで終わる。

ウィンドウにはシステムの再起動プロセスが刻々と表示されていた。

AR - CANGUES In SALAM"ANDER is

Loading..... Complete .

CAT - THIEF In SYLPH is Loading

..... Complete with some errors .

VOL - PONI In GNOME is Loading...

..... Complete .

ALPHABET - SOUP In UNDIENE is Lo

ading..... Incomplete . UNDI

NE is Not Found .

Please Wait.....

All Process is started .

Welcome to "EREMENTAR MEETING"

You are the Fifth Element's

あれからどのくらい経ったのだろうか。

長い長い時が経過した気がするが、それは一瞬のことなのかもしれない。

一瞬で過ぎ去ったと思う時間も、実は長大な時の出来事だったのかもしれない。

そんなことは、どうだっていい。

僕の目の前にヴォル・ポーニ。

僕の足下にはキャット・シーフ。

状況は何も変わってはいないのだから。

そういえば、あれからラステイはどうなったのだろうか。

スイレン島で閃光に包まれて、そこで映画は中断したままだ。

「それでハ、続きをはじめよう力」

相変わらずヴォル・ポーニは無感情で。

「続きだナン！」

相変わらぬ元気なシロネコはキャット・シーフで。

「分かったよ。始めてもらえるかな」

今度は、どんな物語が始まるのだろうか。

イスに座った僕は、いつの間にか膨らんでいた期待に、胸を躍らせている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6421h/>

クマ人形と、炎の化身

2010年10月10日12時05分発行